

團を割いて右翼に送つたのは二日前の事である。日本軍としては敵が非常な力を以て乃木軍を粉砕しようといふのだから、出来得る限り敵の左翼を猛襲し、敵をして乃木軍を顧る邊なからしむる様にしなければならぬ。若し黒鳩公が最初から死力を盡して我軍に當つたならば彼は四十萬の兵、日本は二十五萬足らずの兵である。戦の結果はどうなつたか解らないのだ。兵數に於て砲の數に於て日本は遙かに劣つて居る。此に於て日本はどうしても一氣に攻め落さねばならぬ。これが大體の作戦計畫である。

近衛師團は第二師團、第十二師團と共に第一軍に屬して居る。さうして三日の攻撃には第一軍の左翼を受持つて隣の第四軍に接して居る。近衛師團の受けた命令は沙河の對岸唐家臺を攻撃するにある。ところが此の唐家臺といふ處はどんな處かといふに西は奉集堡から東は石灰窑に到る陣地で、昨秋以來半歳の間營々として防禦工事を起したのである。高地の要所々々には歩兵一大隊を容るべき大閉鎖堡を設け、守兵は坑路に依つて出入し、火線には掩蓋あり、彈藥貯藏所あり、所謂蟻の這ひ出る隙もなきまで築き上げたのである。どうしても是を占領せよといふ命令を受けたのだから堪らない。淺田師團長は渡邊少將の第二旅團に命を下した。渡邊少將は旅團を二分し、飯田聯隊を右翼となし、志波聯隊を左翼となし、昨夜の十一時から唐家屯に向ひ攻撃を初めた。唐家屯の守備兵は約二個師團である。日本は其の四分の一にも足らぬ一旅團である。敵は高處から瞰射し味方

は隠れるものもなく身體を露にして山を攀ち登るのである。

一郎は報告を終つて席へ復らうとする。と師團長は言つた。

『淺見副官、君は旅團司令部へ行つて貰はにやならん』

『はい、今直ぐにですか』

『まあ待て、ゆつくりだ』と師團長は言つた。

『ゆつくりだよ、君、ゆつくりに限るよ』

參謀長は頭も肩も灰だらけになつて七輪の火を吹いて居た。七輪の上に何だかぐつぐつ煮えて居る。

『やらんか淺見』と彼は言つた。さうして飯を飯盒に盛つた。

『はい、難有う』

『こんな飯を食ふのは今日で八日目だ、これから當分又食へんよ』

『私は毎日食事の度毎に今日も無事であつたかと不思議に思ひます』と一郎は言つた。

『其れだ、其の心掛だ、おい此のパンは馬鹿に柔か過る』

『閣下はパンを煮てるのですか』

『うん重焼パンを煮て見た』

「其れはオモヤキパンと申します」

「なぜか」

「重傷は重傷に通ずるので兵卒等は嫌ひます」

「オモヤキパンか、なる程、どうだ、杓で掬つて食らんか、杓がないからバットの箱で掬へ」

「参謀長は恚う言つて自分の箸で綿の如くなつたパンを掬ひ上げた」

「うまい、實にうまい、さあやれ、どうだ副官」

「恚う言つた時電話が掛つて来た。参謀長は直ぐ受話器を耳に當てた」

「うむ、さうか、ちや未だなんだね、志波聯隊は四五百名？ 飯田聯隊は？ 七百名？ うむ、うむ、うむ」

「参謀長の顔はさつと血が漲つた。師團長はどつかと椅子に腰を下したま、参謀長の顔を凝と見詰めて居る。」

「右翼！ 奈良原少佐戦死！ 飯田聯隊の將校全部死傷！ 左翼！ 松前少佐負傷！ 第一線は？ 第一線は？ おい、第一線は全滅か？ なに？ 半分になつた？ 豫備隊をやれ、豫備隊！」

電話が終つた。参謀長は受話器を下に置いて師團長の顔をちらと見やつた。師團長は沈黙して居る。

「當番！」と参謀長が呼んだ。當番兵は凍傷に痛む足を曳いて入つて来た。

「罐詰があるか」

「あります」

「何だ」

「蟹と杏です」

「可しツ、皆此の鍋に打込め、どうもオモヤキパンは不味いぞ」

當番が出て行つた。

「行かう」と師團長は言つた。其の黒い顔は赫と輝いた。

「さうですな」

参謀長も立つた。鍋のものがぶう／＼湯氣を立てた。

一郎は外へ出た。彼は工藤軍曹に逢ひたいのであつた。頃日彼は軍曹を見なかつた。で彼は騎兵中隊の方へ足を向けた。路傍には兵卒が一ぱいに溢れて居た。彼等は前進の命令を待つて居たのである。工兵に限らず彼等の携帶道具は實に珍なるものである。彼等は銃の他に十字嘴と圓匙を持ち、櫂の長柄の付いた鋏を負はねばならなかつた。此の鋏は敵の鐵條網を切斷する道具である。一人の少尉は鋏の使ひ方を説明して居た。

『大佛の頭を苜り込むに丁度可い』と言つたものがある。

『其れよりもお前、俺の考では棒の先に盤を結び付けて差出すが可いと思ふよ』
人々はどつと笑つた。

『何しろ寒くてやりきれない、早く行きたいな』と一人が言ふ。

『えらさうな事を言ふな』

『一體敵の大將は何といふ人だ』と誰か言ふ。

『解つてるぢやねえか、ロスキーだ』

『俺は知つてる、軍團長はねカシタリンスキーだ』

『出鱈目を言ふな』と皆が笑つた。

『出鱈目ぢやない、俺は今聞いて来たホヤ〜だ』

『菓子足りんすきいなら俺達の事だ』と誰か言つた。一郎は微笑した。敵の彈丸が彼等を待つて居るのだ。其れにも拘らず彼等は平氣で駄洒落を言ひ合つて居る。

『妙な考が不圖一郎の頭を掠めた。』

『死といふものは半面は滑稽ではなからうか』

彼は篤と其れを考へようとした時、歪頭山、狄々山、代家峪の我が砲兵陣地の砲聲が一度に轟

いた。

騎兵中隊へ行くと兵卒は天幕を覺んで居た。馬は悉く尻を向けて一列に並び、出發の準備は既に整うて居る。と見ると七八人の兵が環になつて立つて居る。中に工藤軍曹の聲が聞える。

『上官の命でも其れだけは出来ません』

相手になつて居るのは曹長である。

『併しお前は撲るのが可くないよ』

『撲らずに居られるもんですか、彼奴は歩兵曹長だつて何も威張らして置くに當りません、彼奴は慥う言ひました。おい騎兵はのんきで可いね、逃げたい時に逃げられるからと。斥候の時にや逃げるのが任務だと私が言ひました、すると逃げるのが任務なら露助に備はれて行けと慥う言ふのです、だから撲りました』

『さうだ、そんな奴は……』と一人の騎兵が應援した。

『是非の如何に關らずだ』と曹長は眞赤になつて怒鳴つた。

『上長に對して亂暴を働いたものは軍法に處されるんだ、おい工藤、お前は随分功勞があるのだが、毎もこんな事で帳消になるんだね』

『構ひません』と三吉は言つた。『騎兵を侮辱したものは……』

曹長は憐れむもの、如く三吉を見やつて去つた。

『おい工藤!』

一郎は背後から其の肩を叩いた。三吉は一郎を見るや否や頭を低れた。

『相變らずやつてるね』と一郎は言つた。

『駄目です、私はもう駄目です、一つ可い事があると其の次には必ず一つ悪い事がある、さういふ廻り合せなんだから』

『君は飲んでるね』

『いや、中尉殿!』と三吉は狼狽して、『飲みやしません、決して……貴方に言はれてから決して』

慙ういふもの、彼は確かに酔つて居たのである。一郎は曾て三吉が慙う言つた事を思ひ出した。

『飲んでる時だけは母親や妹の事を忘れます、いくら國のためだと言つた處で私にや親があるんですからな』

一郎は黙つた。突然誰が言ふとなく前進の聲が擴まつた。

『集まれい』

騎兵隊は急に動揺した。一郎は急いで司令部へ歸ると、豫備隊が進行し初めた。

『淺見副官!』と師團長は一郎に言つた。彼は今馬に騎らうとする處であつた。身體が肥つてゐると防寒服を充分に着て居るために身體が自由にならず、鎧に足を掛けては又逆戻りをした。従卒は何か中将に言つたが中将は只笑つて居た。だが三回目には到頭馬上の人となつた。其れから忘れて居た事を思ひ出した様にもう一度一郎に言つた。

『行つてくれ』

『旅團本部へですか』

『いや、聯隊本部だ』

『はい、任務は? 閣下』

『行けば解る』

一郎は馬に騎つて今しも整列中の歩兵の中を霧々地に驅けた。彼には何かしらん重大な任務に當る様な豫感があつた。今日こそは尋常一様の戦でない。死ぬなら氣持快く死にたい。

彼は三十分と経たぬ中に聯隊本部に着いた。其處は全く狼藉を極めて居た。敵の曳火弾が本部を見事に掃した。斃れた軍馬や、糧餉車は縦横に散亂して兵士に死傷は無かつたが其のために騎兵隊は少しく退却せねばならなかつた。聯隊とはいふもの、此の時には本部に一小隊ばかりしきやかなかつた。

『やあ御苦勞』と聯隊長は言つた。『守備を頼むよ。此の地點だけは確かに』

『承知しました、敵は？』

『はツ／＼／＼』と聯隊長は聲を擧げて笑つた。

『敵は大砲を打つてるよ』

一郎は黙つた。吾ながら子供らしい質問をしたものだと思は顔を染めた。

『さあ見に行かう、背後の高地だ』

聯隊長は先に立つた。二人は丘に登つた。丘の背後からすつと離れた高地に我が砲兵が四門の砲で盛んに戦つて居た。高地と丘との間の窪みに我が糧餉車が隠されてある。輜重隊は此の窪みの小路を往來して居る。

最早朝の六時である。素晴らしい天気である。前面の山々の巒々までが一つ／＼見える。其れは丁度昔の名所園繪にある様な山々で、左の突角からは幾流れかの谷が穀をなして、其れに連なつて牛の背の様な巒が右まで延びて居る。右にも又幾つかの谷が峻しく聳えて次第々々に西の方へ斜に走つて行く。

『静かなものですな』と一郎は言つた。實際其れは静かである。聞えるのは大砲の音だけで小銃の音も人馬の聲も聞えない。

朝日は非常な美しき光を以て東の角面堡を照らした。其のために突出した堡壘の右の谷々は濃い影を落して紫色に見えた。ほつと白い煙が角面堡の一點から昇つた。

『来たぞ』

聲と共にどうんといふ砲聲が聞えた。次に又一つバツと昇る。其の次も其の次も……

白い煙は初め、一つの圓い玉の様に無造作に出る。と半空で其れが擴がつて眞綿を伸ばした様になる。一つ二つ三つ四つ、其等の煙は丁度同じ高さの處まで來ると角面堡を滑つた朝日の光を受け、牛乳色と黄金色と薔薇色の雜つた色が溶け合ひ纏れ合つて一番高い後方の山の尖りの邊で薄れて行く。と其の下から又次の煙が湧いて來る。

ブーン／＼といふ空気を截る砲丸の音が頭の上を通る。其れは彼の煙と同じ間を置いてやつて來る。バツと見るとブーンと聞える。すると背後の山から我が砲兵が其れに應ずる。其れと同時に目に見えない方々の陣地からも一齊に射ち出す。戰場に於ては何と言つても背後に控へて砲撃してくる味方の砲兵ほど難有いものはない。

最右端の高地からも敵は盛んに射ち出した。左の角面堡と右の堡壘との間に起伏して居る幾つもの谷々の隙間から霧が昇り初めた。其れは朝日に溶けた雪の蒸發氣である。此の霧は味方に取つて極めて不利であつた。東からの風が霧を右の方へ／＼と吹いて堡壘を隠してしまふ。

霧の美しさは又格別である。霧は一向戦争を知らぬもの、如く平氣で彼の遊びを續けて居る。或塊は長く列なつて鬼ごつこをしたり、或塊は風に打たれて筋斗返りをしたり、或塊は駱駝の背中の様に凸起してさつさと流れて行く。此の霧の薄らぐ絶間からちらり／＼と敵の砲壘の赭色な顔が見える。其處からは煙なしにブーン／＼と砲丸が飛んで来る。

「十四珊だ」と聯隊長が言つた。

霧に隠れた右と反對に左の角面堡は、きら／＼と輝いて居る。パツ／＼／＼と煙の環が絶えずに起る。さうして其れが麓を流る、小さな河と一緒に硝子の如く光る。

折り／＼煙の中から彈藥箱を運ぶ兵士や砲身の反射光などが見える。

「こんなに明るくなつては突撃も出来んね」

聯隊長は恚う言つて双眼鏡を眼に當てた。と彼は大きな聲で叫んだ。

「副官、あれを見い、やられてるッ」

一郎は双眼鏡を眼に當てた。初め彼は何にも見えなかつた。最左端の角面堡の上部に敵兵が群れて動いて居るだけであつた、が眼鏡を下の方へ移すと同時に彼も思はずアツと叫んだ。今堡壘の突出した断崖の下に恰ら葡萄が蔓に列なつて居る様に日本の兵が潜んで居る。彼等は曳々聲を合はして斜面から這ひ上り鐵條網を破壊しようとする。瞬く間に機關銃に掃られる。タタタ、といふ

音と共に崖から落ちるもあり、倒れるもあり其れは恰ら熱湯を蟻の群に浴びせる様！

崖の下から日本兵は其れにも屈せず猶這ひ出ようとする。彼等は工兵と歩兵と皆一緒に混亂して居る。軍刀を翳して躍進々と號令して居るのは中隊長らしい。だが誰あつて進むものもない。此儘に過すと見す／＼彼等は敵の瞰射に大掃除をされるか、でなければ饑と寒さで立往生するより他はない。進む事も出来ず退く事も出来ないのである。

其れを救ふために日本のあらゆる陣地から猛烈に砲撃した。

「さあ、行かう」

聯隊長は眞先に丘を降りた。麓の路ではもう負傷兵がぞろ／＼運ばれて居る。擔架卒が足りないので輜重兵が補充した。呻き、叫び、死際に萬歳を叫ぶ聲、其等が堪らなく一郎を昂奮させた。旅團からの命令が来た。

「騎兵のありたけを盡くして輜重兵を助け糧食、彈藥を角面堡の第一線部隊へ運べ」

聯隊長は凝と一郎の顔を見詰めた。其れは何とも言へぬ陰鬱な而も嚴肅な眼であつた。

「承知しました」

一郎は早くも聯隊長の意向を覺つた。彼が恚う答へた時聯隊長は右の手を差し出した。「お別れだ」

一郎が兵と共に丘の窪みの處へ行つた時に、しゆつくといふ小銃の音が聞えた。兵に取つては大砲の音より此のシュツといふ音が恐い。窪みに集合した輜重車は五輛共敵弾に粉砕され其の邊に我が兵の死骸が五つ六つ横はつて居た。其處を通る輜重兵は何れも妙な顔をして横を向いた。中には自分の友達が有りやしないか、我が兄弟が有りはしないかとそつと横目で見るのもあつた。小銃の音が益々烈しくなつた。敵は我が輜重車を窺つたのである。タタタ、といふ機關銃の音が八方から聞えた。

「誰だつて死ぬんだ〜」と一郎は怒鳴つた。彼は自分で何を言つてるのか意識しなかつた。さうして五分間も立つと彼の言葉がいつの間にか變つて居た。

「死ねば可いんだ、其れだけの事だ」

敵の砲撃は益々烈しくなつた。實際此の日敵砲は旅團司令部や師團司令部をも襲つた。候家屯にある假編帶所も曳火弾を受けた。歪頭山の華族砲兵隊の陣地は一面の火に包まれた。

「彈藥缺乏」

時々刻々に苦境が迫つた。糧食の車は兎もあれ、彈藥だけはどうしても間に合せねばならぬ。彈藥車に一番恐しいのは敵の曳火彈である。

「間隔を取れ」と一郎は幾度も號令した。だが人と馬、道路の都合で動もすれば密集してしまふ。

其の間に敵弾は次第に激しくなる。麓の路を曲彎した小橋の下では誰も進む事は出来なかつた。小隊長は馬と共に屏風倒しに倒れた。

「前へ！ 前へ！」

一郎は聲を限りに叫んだ。此の時迅風の如き力を以てガラガラと背後から駆け抜けた車がある。

「やあ中尉殿！ どうして」

其れは工藤三吉であつた。

「臨時雇だ」と一郎は言つた。

「私も雇です」

三吉が恚う言つた時、敵弾がひゆう〜飛んで來た。三吉は馬を降りて車の彈藥箱の上に仰向に寝轉んだ。

「やられたか」

「やられやしません、工藤三吉よりも彈藥の方が大切ですから」

いかにもさうだ、人間が身體で庇へば彈藥に火が付かないかも知らん。其の代りに一つ間違へば、五體が消炭になる。

「前へ！」と一郎が言つた。三吉はさつさと前へ進んだ。

「路は六百八十里！ 長門の浦を舟出して……」 彈藥箱に寝たまゝ、青い天を眺めつゝ、彼は葛々地に馬を走らした。

「彼奴はえらい」と一郎は心の底から感歎した。

「彼は死ぬといふ事を思はないのだ、俺は死にたいと思つてるが矢張り死が怖い、彼は死ぬといふ事と生きるといふ事を同じに見てるかも知らん」

彼は聲を勵まして叫んだ。

「先登に倣へ」

一隊は突進した。彼が戦線の後部に着いた時三吉は車の上に坐つて居た。

「えらいなあ工藤軍曹」と一郎は言つた。「今日の動作は金鶏勳章だね」

三吉は凝と一郎を見上げたが直ぐ投げ出す様に言つた。

「なあに當になりやしません、此の次には屹度悪い事が出来ますから」

背 後

三月七日。日本の乃木軍と奥軍が奉天の北方に大苦戦をしつゝある時、露國總司令官黑鳩公は奉天停車場の一室で窓から天を眺めて居た。彼は充分疲れて居た。何人にも能くある通り非常に多忙

な時間の真中で、凡ての用事が悉く奥へ引込んでしまひ、何も彼も済んでしまつた様な気がするものである、其れが忙かしかければ忙がしい程、さういふ空虚なボカンとした時間が出る。特に神經衰弱の人には此の狀態が珍らしくない。

黑鳩公は丁度ふはく和白い雲の上に乗つた様な氣持で何時までも天を眺めた、外は軍馬の嘶砲車の響、何やら怒鳴りつける聲や足踏の音、雜然たる音響が彼の耳にはすつと遠く夢の様に聞える、だが其れは三十分と續かなかつた、彼の眼は矢張り鼠色の天に溶ける薄桃色の雲に一定しながら耳は次第に意識を惹き戻した。最初に隣の會議室で將校達が争ふ聲が聞えた。

「其れだから危険だといふのだ、第二防禦陣地へ退却するといふ事は味方の士氣に影響を及ぼすのだ」

恚ういふのは身體は小さいが聲が馬鹿に大きいクラアギン大佐であつた。

「戦線の縮小だよ、戦線が擴がれば擴がる程聯絡に空虚が出来て壓迫を受ける、恚うなると一旦退却して更に突進する方が可い」

參謀大佐バンバエフは諭す様に言ふ。

「さうぢやない、君は遼陽の失敗を繰返す積か」

「攻勢に出た沙河はどうだ」

「其れとは違ふ」

「いや違はない、日本兵に對するには堅忍が第一のモットーでなければならぬのだ」

「堅忍は總退却か、潰走か」

「馬鹿な事を言ふな」

「何を？」

二人の聲は次第に高くなつた。四五人ががや／＼仲裁したので蜂の巢を突いた様に騒々しくなつた。黒鳩公は漸く吾に復つた。其れは双方一理ある議論であると思つた、昨日彼は戦線を縮小して鐵道線路を守るために沙河線上の全線を渾河々上に撤退すべく決心した。彼は此の事を各司令官に傳へると第一に反對したのは第三軍のビルデルリング大將であつた、ビルデルリングは勝敗の決此の一擧にある、敵の乃木軍に對しては貴下の有する總豫備を盡くし且目下到着中の第三旅團を以て當らしむるが可いと極言した。だが黒鳩公は肯かなかつた、彼は不利な戦闘を頑強に續けるよりも一旦退却して銳氣を新たにし、急に敵の疲勞に乗じて逆襲する事が古來の戦法として金科玉條であると確信して居た。で彼は次に第二軍のカウリバース大將に命令した、カウ大將は猛然と反對した。二人の反對に逢つて彼は途方に暮れた、彼は第一軍のリネウキツチ大將に相談しようと思つたが、無論これも無駄だらうと思つた、のみならず彼はリネウキツチとは事毎に衝突した、露土

戦争で負傷して右の足が跛になつたりネウキツチの傲慢な顔を見ると毎も何とも言へない不快を感じる。で彼はリネウキツチに傳達する事を止めた。さうして退却の命令を取消した。取消したものの第三軍のビル大將は既に退却に着手した後であつた。

悠ういふ風に一日命令したものを取消したり、取消しても間に合はなかつたりした事は彼の神経をいやが上にも疲れさしてしまつた。彼は呼鈴を鳴らして副官を呼ばうとしたが急に椅子を離れて參謀長サハロフの室へ行つた。サハロフは今晝を刺つて居た。彼は洗面臺に顔を突き出して極めて不器用な手付で剃刀を動かして居た。洗面器からもや／＼と湯氣が立騰つて鏡を曇らす、とサハロフ中將は指先で曇りを拭く、三本の指の形が鏡に残る。

「退却の命令が各軍に傳達したらうかな」と黒鳩公が言つた。

「あ、……併し」とサハロフは剃つた後の頤を手先で撫でながら言つた。「完全とまでは行かなくとも多分」

黒鳩公は黙つて首肯した、サハロフは毎も判然とものを言はない性癖を有つて居る、十分の喜びを九分に言ふ、其の代りに十分の悲みをも九分に言ふ。だが彼が多分とか恐らくはとか言ふと其れが普通の人の十二分に聞える、其れは其の巨大な身體、圓々と肥つた顔、てらく／＼に禿けたビリケンの様に背後に長い頭、其れ等から發する悠揚な如何にも頼母しさうな氛圍氣のためである。黒鳩

公は毎もサハロフの顔を見ると非常な力強さを感じる、これといふ用事のない時でも何時までも傍に居て貰ひたい様な気がする。

「大丈夫です、成功です」とサハロフは剃刀を収めて言つた、其れから顔を洗面器に漬ける様に洗つた、湯氣の中に長い禿けた頭がびか／＼輝いて動いた。黒鳩公はサハロフの洋袴の背後から鎖に繋いだ澤山の鍵がぶら／＼下がつてゐるのを眺めて居た。

「ですが閣下」とサハロフは顔を拭いて席に着きながら言つた。

「今日パウケン侍従が着きますぜ」

「さうだつた」と黒鳩公は両手を擴げて思ひ出した様に言つた。

「侯爵に聞いたら解るだらう。全く無茶苦茶らしいよ」

「宮中では睡み合ふ、國民が暴動を起す、これでは一生懸命に戦争をしてゐる者は馬鹿だ」

とサハロフは言つた。

「だから今度こそは負けられない、どうしても勝たなけりや、どうしてもな」

黒鳩公の顔にさつと血の色が浮いて来た。

「勝ちます、多分勝ちます」とサハロフは言つた。さうして、「だが……だが……日本人ほど不思議な奴は世界にありませんな」

其處へ一人の副官が入つて来た。

「優勢です」と彼は敬禮をしてから言つた。

「レネンカンブ支隊のダニロフ少將部隊は馬群丹の敵を撃退しました、ツマノフ少將の部隊は孤嶺子方面の敵を撃退しました、第三軍は敵の猛烈なる攻撃を撃退して完全に渾河左岸に退却しました。

第二軍はゲエルシエリマン中將の部隊が莫家堡に於て敵を潰亂せしめました」

「敵は？」

「奥軍です、第二軍です」

「第二軍は？ 北部は？ ゲルングロス中將は？ パウロフ少將は？」

サハロフは矢繼早に訊ねた。

「田義屯は？」と黒鳩公が言つた。

「味方は優勢です、只今までの報告では敵の第三軍は八家屯で大打撃を受けつゝ、あります」

「よろしい」

黒鳩公は両手を机の上に組んだ、其の長く細く白い手には一ばいに茶色の毛が生えて居る。彼は両手を組んだまゝ、動かなくなつた、其の眼は喜びに輝いて居る。

「乃木がカウリバースに引掛けられた」とサハロフは大きな聲を出して笑つた。

黒鳩公は確乎した足取で参謀室を出た。廊下には將校や下士が只氣狂はしけに往來して居た。彼等の中最も疲れたものは皆壁の下に足を投げ出して居眠をして居た、どれも／＼青い血の氣のない顔をして、眼は窪み口を大きく開いて居る、片隅では一人の下士を三人掛りで揺り起して居る、が眠つた下士はバツと眼を開くと直ぐじめ／＼と引込まれる様に眠つてしまふ。

「さあ、起きろ／＼」

恚ういふ下士も大きな欠伸をすると同時にがつくり眠つた下士の肩に自分の顔を寄せて昏々と眠りに入る。理由なしに歩いて居る人達も畢竟眠るまい爲めであつた、此の七日間は全く不眠不休である、彼等の脳は何の働きもなさない、彼等は只眞直に顔を立て、歩く、彼等には横を向くさへ大儀なのである。彼等は正面のものだけが見えるが、其れ以外には瞳が動かないのである、其れは丁度木製の人形の様、だから極めて小さいもの……例へば床板の剥き目にでも踏くと恐しい音を立て、倒れるのである、彼等は何かの刺戟に依つて意識を喚起さうと努める、で誰か滑稽な事を言ふと皆が笑ふ、笑ふにも聲が出ない、丁度鮎が地上に置かれた時の様にバクリ／＼と口を開くだけである。黒鳩公は其れを見て見ぬ振をした、如何となれば其の位の事で愉快な氣持を失ひたくないからである。と、彼は廊下の隅でものを書いて大尉副官を見た、此の男は露土戦争にも従軍した老武者で、本名は知らぬが人はトボン／＼と呼んで居た、何の長所もない男だが、折り／＼奇妙な

考を出すので退役にもせずにある。彼は此の半年の間に一生懸命に考へ出したのは日本人の食物に就いて、あつた。彼はいろ／＼研究の結果日本人が凡ての人種よりも水を多く飲む事を發見した。さうして日本人は水を飲んで勇氣を増す、水を飲む人間は寒さにも暑さにも堪へ得るものだ結論した。彼は今日日本軍の兵數に就いて夢中に調べて居た、彼の手帳は細かい數字で一ぱいに汚れて居た。彼は黒鳩公を見て跳上る様に立つて敬禮した。

「何を調べてるか」と將軍は微笑した。將軍に言葉を掛けられた光榮を感じて大尉は喉に魚の骨を刺した人の様に喉を塞らして言つた。

「日本の兵力は三十萬だと思ひます、閣下」

「そんな事は解らん」

黒鳩公は急に不機嫌になつて言つた、さうして外へ出た、彼自身すら此の問題には困つて居るのである、實際日本の兵數に就いては見當が就かなかつた、遼陽に於ても沙河に於ても彼は實際より過剰に見積つて失敗した、だがどうしても三十萬の兵力があるらしい、味方には三十五萬の兵力がある、さうすると、勝たねばならぬ筈なのだ、其れに負けるとは！

「併し今度こそは……」

彼は恚う思ひ返した。彼は守備を堅くして目下バイカルまで進行しつゝある第四軍團の來着を待

つ事が最上策だと信じて居る。第四軍團が来れば此に七萬ばかりの兵力が増加する、すると假に日本を三十萬とするも我は十萬以上の優勢である。

外は薄い日が射して居た。輻重車が幾百輛となく廣場に竝んで、馬と車と荷物と兵卒がごたくになつて騒いで居る。輻重大隊長は一番高く積んだ車の上に乗つて大きな聲で怒鳴つて居た、彼はもう聲が啞れて語尾には釘で鐵板を引掻く様なキイキイした聲を出すのであつた、彼は旗を振る事にした。黒鳩公は人目に付かぬ様に混雑の間を潜り抜けた。彼は砲聲の聞える森の方へ出ようとしたのである。其處の橋を渡ると右手に大きな建物がある、其處にも一ぱいの將校や下士が屯して居た、中から樂隊の音が聞える。其れは極めて副調子なもので喇叭と太鼓と笛とは手ん手に自由行動を取るのて酷く騒々しく聞えた。入口の階段の下で兵卒が火を焚いて温つて居た。彼等は何よりも靴の尖を炙つた、一人の兵が煙を除けるために顔を横に突出して唄つた。

あの時お前は若かつた。

あの時私も若かつた。

其れは寂のあるバスであつた、と他の二三人がこれに和した。

今ぢや私も年老つた。

今ぢやお前も年老つた。

黒鳩公はにや／＼と笑つた。だが彼は自己の威厳を保つためにパイプを銜へて唇の統びるのを防がねばならなかつた。建物の中では氣狂ひじみた音楽が益々暴れ出した。彼等は舞踏をして居るのであつた。彼等の相手は看護婦である、彼女等は敵の大砲が此處に落ちて來ても組んだ腕は離すまいと覺悟して居るもの、如く顔を充血さして踊つて居る。怒うなるとどんな醜女でも構はない、士官共は奪ひ合つて女の腕にぶら下がる。一組の男女が妙に猥褻な舉動をして見せると皆は喜んで拍手した、其の女は勳章を胸に下げた看護婦長でもう五人の將校及び一人の若い料理番と浮名を立てて居る、年齢正に五十二歳。

黒鳩公は此處を見ぬ振して立去らうとした時彼は表に向いた壁に大きな漫畫を書いてあるのを見た。其れは骸骨がセルギー勳章を胸に掛けて居る圖である。

「詰らないものを書いたものだ」

怒う思つて五六歩行くと、其處にも一つの漫畫があつた。最初は百姓が馬を鞭で叩いて耕作して居る圖で次には百姓が馬を殺して居る圖で第三は百姓が馬の皮の外套を着て殺した馬の肉を食つて居る圖であつた、さうして百姓の顔をニコラス皇帝に似せてあつた、猶其の上に怒ういふ文句が書いてある。

「散々こき使つてから殺して肉を食ふ、其れでも馬は不足が言へない」

黒鳩公は突然踵を返した、彼は恐ろしい難かしい顔をして兵士の間を抜けた、今兵士共はタバコ僧正の祈禱式に行く處であつた。一人の兵が一人の酔拂つた兵の腕を捕らうとすると其の兵は大聲で怒鳴つた。

『何でえ、露西亞は何でえ、皇帝は何でえ、神は何でえ』

黒鳩公は益々憂鬱になつた、彼は大急ぎで司令官室に入つて副官に慪う言つた。

『一體露西亞はどうなるんだ』

『閣下』と副官は驚いて言つた。

『酒保の壁を見て来い』

副官は去つた、將軍は黙つて下唇を噛んだ。此の日頃彼の頭のどん底に渦巻いて居る憂鬱は敗軍の件ではない、リネウキツチと仲が悪い件でもない、全く祖國を糜爛する悪思想なのであつた。第一に嬖臣ベツブマソフは全く甘言を以て陛下の聰明を掩ひ、國務大臣との間を隔離して國家の重大事は一切御耳に入れない様にして居る、各親王は銘々我儘を振舞つて國務に容喙する、其のために各大臣は何れも退隱して身を全うする事ばかりを考へて居る。其の上には四つも五つも黨派が出来て婦人達の甘い囁きや媚ある微笑が恐ろしい魔力となつて全露西亞を支配する。

『今に路易十六世が露西亞に現れる』

慪う言つて入獄されたのは前の警保局長リエンチーであつた。宮廷は其の通だが國民はどうか。遼陽に敗れ沙河に敗れた昨年十一月二十五日、學生労働者より成る數萬の社會黨員がモスコに大會を開いて代議制度の實施を迫つた、其れから今年の一月十八日、職工七萬五千人が暴動を起した、十九日ネヴァ河畔で行はれた祈禱式の大祭場に皇帝と皇后が臨御した、其の祝砲の中から實弾が飛んで王宮の窓を破つた。其の三日後にカボン僧正は數萬の群集を率ゐて王宮に迫つた。

其の度毎！ 社會黨が騒ぎ出す度に皇帝は黒鳩公に訓電を降す。

『何をしてるのだ、早く戦に勝て！』

實際戦に負けた事もある。又豫定の退却をした事もある、其の都度に背後から叱言を言はれては心細くて堪らない、單に皇帝ばかりではない、社會黨は此の機を以て戦争を中止させようとする、虚無主義者は國家などはどうでも可い吾々は個人として生きようぢやないかと煽動する。帝室も政府も國民も悉く忍耐力がなくなつて、只戦争に勝ちさへすれば解決が着くものと思つて居る。

『こんな苦勞して戦つても本國では一人として其れを感謝するものがない』

黒鳩公の満々たる不平が其れである。冠を幘門に掛けて隠退しようか。いやくと彼の良心が叫ぶ。

『私でなくて誰が祖國の難局に當らう』

一面に祖國を愛する至誠が火の如く燃えて居る、が一面には祖國の官民を怨む念が亦燃えて居る、青い炎と赤い炎が連れ合つて彼の胸を焼き盡くす。

而も嫉妬の眼が四方から睨んで居る、グリツペンベルグが敵の鴨綠江軍と黒溝臺で戦つて故々な失敗をした揚句、私を無能呼はりして本國へ歸つてしまつた、さうして私の悪口を言ひ廻つて居る、リネウキツチだつて何時どんな事をするか知れない、サハロフにしても油斷がならない。一身の安佚を得ようとすれば此の儘歸れば可いのだ。だが俺には愛國心がある、愛國心があるから此んなに苦しむんだ。

『國を愛しない人は氣樂なものだ』

彼は不圖慙う考へた、と其れが堪らなく苦しくなつた、非常に重大な罪を犯した様に思へたので。

『閣下！』

ブレボー少將が入つて來た、彼は黒鳩公の股肱である、彼の顔は瘦せて青白く眉は薄い、美しい髭を有つて居たのだが沙河で敗戦した時に髭を剃り落してしまつた、其のために顔は何となくもの淋しく、毎も泣いて居る様に見えた。

『内務大臣ブレヴェから電報がありました』

『どんな』

『戦況を進めてくれないと内亂が起る、ポーランドが獨立運動を起しかけた』

『私は……』と黒鳩公は拳骨で卓子を打つた。

『ブレボー聞いてくれ、私は内務省や外務省の事まで處理せんければならんのか』

『御尤もです閣下』

少將の顔は益々泣き出しさうになつた。

『愆う返電してやつてくれ、可いか、全露西亞軍に對して背後から大砲を射つものは逆賊であると』

『閣下！』

『いや構はん、斷乎としてやるんだ、斷乎としてやるんだ、私でなくて誰がこんな事をやるか、私かなかつたら……』ブレボー、私かなかつたら』

ブレボーは卓子に兩手を突いて首垂れた、涙がほとりと落ちて擴がつた。そこへサハロフ中將がのそくと入つて來た。

『サハロフ！』と黒鳩公は叫んだ。『貴方は此の戦争をどう思ふか』

サハロフは答へずに只微笑した、此の微笑は黒鳩公の激怒を緩和するため用ひただけなので、直ぐ淋しい悲しさうな口元に變化してしまつた。

『此の戦争は』と總司令官が叫んだ、『日本が勝つたのぢやない、露西亞が負けたのだ、露西亞の』

國民が負かしたのだ』

サハロフ參謀總長は何か言はうとしたが沈黙してしまつた、今窓から見える町の眞直な街道を幾十となき支那風の馬車が行く、其れは負傷兵を載せた車である、平常には二人しきや乗れないのだが、四人五人、血だらけの兵の上へ血だらけの兵を重ねる様に寝かした、悲鳴！ 呻吟！ 狂氣じみたウラトの聲！ 車は次第々々に多くなつた、百臺、二百、三百！ 町の端れでは島の上に死骸を積み、薪を焚いて火葬して居る、白い煙は眞直に立騰る、何處までも眞直に！

突然煙の向ふから二人の騎兵が現れた、二人は全速力なので馬だけが駛つてる様に見える、先なるは栗毛で次なるは蘆毛である。二人は町へ入つた、と其れと同時に左手の島地に豆ほどに小さく見える騎兵があつた、其れは二騎三騎と續いた。

『沙河で私は攻勢を取つた、さうして失敗した』と黒鳩公は少將に言つた、『失敗は豫め解つて居た、だが政府はどうしても決戦しろといふんだ、決戦せずに退却すると内亂が生ずると言ふんだ』扉が開いた。呼吸せきながら二人の騎兵將校が現れた。

『田義屯は？』と黒鳩公は言つた。

『駄目です』

『八家屯は？』

『駄目です、レーシ大佐とデヴキツト少將の聯絡が絶たれました』

『敵は？』

『第二軍です、第二次の陣地轉換を實行しようとして居ます』

『味方は？』

『兵が足りません』

『トボルニン中將は？』

『今入つて来る傳令の方を向いてサハロフが言つた。』

『苦戦です、干洪屯を辛うじて支へて居ります、敵の優勢な騎兵團は新臺子の方面に出ようとして居ります』

『新臺子？』

『サハロフは地圖を凝と見た。』

『秋山支隊だ、敏捷な奴だ』

『馬圍子は？』

『黒鳩公は同じ一本調子で言つた。』

『激戦中でありませぬ、敵は益々兵力を増加しつゝ、あります』

黒鳩公は地圖をむすど攔んで叫んだ。

「本官はツエルビツキー中將に逆襲を命じた積だ、又ゲルングロス中將に前進を命じた積だ」

「憊う言つた時には傳令の姿も少將の姿も見えなかつた、彼は蒼白な顔をして地圖を見詰めて居るサハロフ中將を見やつた。」

「サハロフ！」

將軍！ 退却しませう」

サハロフは鉛筆の尖を地圖に落した。其れは鐵嶺であつた。

「併し」と黒鳩公は言つた。「私は決戦しなければならん、サハロフ、奉天は貴方に御任せして私は總豫備隊を以て決戦しよう」

「其れは……併し……」

サハロフは憊う言ひかけたが黒鳩公の眼をちらりと見やつた時、何とも言へぬ悲壯な氣に打たれた。本國へ申譯のために無謀な戦をせねばならぬ總司令官の胸中を察すると、最早引きとめる勇氣もなくなつた。

「よろしい、奉天は引受けました」

十分の後に停車場は大混亂を來した、傷病兵は悉く汽車に積まれた、其のために一人として

舞踏をするものになつた、看護婦共は今にも敵が押寄せて來るかの様狼狽てきつて居た、彼女等は只理由なしに涙をこぼした、さうして泣きながら矢鱈に饒舌り合つた。糧食や彈藥も一緒に積んだ、其等は一般に知れぬ様に秘密に運ばれた。だが凡ての人は其れを知つて居た。此の騷擾を靜めるためにサハロフは軍隊の檢閲式を行つた、其の間に黒鳩公は豫備隊を率ゐて乃木軍と決戦すべく出發した。

其の日の午後日本の大山總司令官は東烟臺の幕營をのそり／＼と獨りで歩いて居た。すると參謀副官が慌だしくやつて來て小聲で囁いた。

「閣下！ 干洪屯は猛襲を受けて苦戦中でありませう」

「さうか」

大將は眉毛一つ動かさず其の儘歩みを續けた、副官はそれを見送りながら帽子を脱いで汗を拭いた。大山大將は少し前屈みに肥つた肩の中に首を突込む様にしてコツリ／＼と床を踏んで行くと、其處へ又一人の副官がやつて來た。

「閣下！ 飯田師團は張家子まで進出しましたが敵の頑強なる抵抗に遭ひまして……」

「さうか」

大將は前と同じ様な態度で言つて又歩き出した。彼は參謀長の室で盛んに談話の聲が起つて居る

のを聞いたので其處へ入つて見た。若き將校連は兒玉總參謀長を圍んで煙草の煙を漲らして居る、彼等は將校の姿を見て聲を止めた。

『やれ／＼』と總參謀長が言つた。

『議論か』

大山大將は慙う微笑して一つの椅子に腰を下した、兒玉總參謀長は若い將校を集めて議論をさせるのが好きであつた、毎でも暇があると彼は慙ういふ氣箴會を開く。

『其れからどうした』と總參謀長が促す、色の黒い仁尾中佐は續けた。

『此の戦が長びくものとして戦ふのと、早く終局するものとして戦ふのと、其の差異に依つて作戦を考へなければならぬと思ひます』

『さうぢやない』と恐しく向齒の出で居る加藤大佐が言つた。

『戦争は如何なる場合に於ても長びくものと決心して而も短日月に終局する様にせねばならぬのだ』

『違ひます、其れは兵力や資力が互角である場合の事です、日本は凡てに於て弱點を有して居ます、敵は未だ／＼數十萬の兵が本國にあるが日本は……』

『だから奉天を占領し鐵嶺を占領して敵を殲滅しなけりやならん』

『其れでも哈爾濱があり、モスコーがあります、哈爾濱までは百二十里、なか／＼です』

『其んな事を言つたら君はモスコーまで進撃する積か』

『無論です』

『其れは空論だよ』

『いや、敵が降らなければ露都まで行かなきやなりません、其の覺悟がなくては戦争が出来ません』

『さうだ、さうだ』と若い將校連は賛成した。

『攻撃ばかりを考へずに守備をも考へなきやならんよ』と大佐が言ふ。

『さうです／＼』と他の將校連が言ふ。總參謀長はにや／＼黙つて聞いて居たが、聽て兩手を卓子の上に置いて言つた。

『仁尾中佐、その點は心配が要らんよ』

『なぜですか』

『日本には外務省がある』

一同は黙つた、總參謀長は矢張り笑ひながら、言つた。

『戦端を開くのも外交、戦局を收拾するのも外交、其れには日本に立派な外交官がある、私達は只戦へば可いのだ、勝てば可いのだ、其の他の事は國民が可い様にやつてくれるよ、私達は國民に信頼しようぢやないか』

仁尾中佐の顔は見る／＼朱を注いだ様に紅くなつた。

「解りました、さうです、私は餘計な心配をして居たのでした」

「併し外交がうまくやつてくれるかしら」

「囁く様な聲が隅々に起つた。」

「うまくやるよ」と總參謀長は拳に力を込めて言つた。「國民を信じたまへ、國民を信じないから露

西亞が弱いんだ」

もう誰も聲を出すものがなかつた。將校達は去つた、總參謀長はいつまでも微笑を續けて居た。

「貴方はえらい」と大山大將は重さうに口を開いた。「貴方はなか／＼雄辯ちや、私は覺えて置いて

皆に聞かしてやらう」

「はッ／＼／＼」と總參謀長は聲を出して笑つた。大山大將はのそり／＼と室を出た、彼は自分の

席に着いた時そこに一束の新聞があるのに氣が付いた、彼は其れを押しやつて凝と考へ込んだ、諸

方の報告に依つて今や激戦最中である事が解る、此處が先途である、今夜一夜！ 戦の時はこれ

である。彼は最初から押通して來た作戦に就いては一點の疑ひを有しなかつた、どんな不利な報告

が來ようとも彼は驚かなかつた。

「今夜かな……」

彼は奉天の事は考へなかつた、彼の考へてるのは其れよりも十四里の北方鐵嶺の占領を考へて居たのだ。

不圖彼の眼に留まつたのは彼の新聞であつた、新聞には五六人の看護婦の寫眞が掲げられてある、其の中には馴染みの深い顔もあつた。

「はてな」

彼は新聞を取上げた。其れから衣袋から眼鏡を出して更に見詰めた。

「やあ、これはどうも……」

蝶々が翼を擴げた様な帽子を輕やかに被つて白い折襟の着いた黒地の看護婦服を着た氣高い婦人

達！ 土屋陸軍中將夫人、内山中將夫人、落合……伊地知……豊島各少將夫人！ 日本赤十字社

篤志看護婦！

「これは實に！」

ものに驚かぬ大山大將は片手を額に當て、暫らく動かなかつた。彼は日本婦人の熱烈な愛國精神を見透す様に寫眞を見詰めた、其の老いの眼は次第に朧になつた、中將夫人の顔も少將夫人の顔も何にも見えなくなつた、そこで彼は眼鏡を脱して節くれだつた太い拇指で曇を拭いた。

追 撃

浅見一郎は眠らうとしたが眠れなかつた、此の日頃彼は激しい疲労を感じた、其れでありながら寝床へ入ると眠れない、少しばかりうとうとすると直ぐ又ぱつと眼が覺める、彼は自分で自分が日増に瘦せ行く様な氣がした。最も彼を悩ましたものは獨りになると死にたいといふ考が湧き出る事であつた、其の癖彼は多數の中に入ると一變して生きたいといふ氣になる、特に敵彈が激しく來れば來る程生きたくなる、部下を率ゐて夜陰に斥候に出る時には此の念が一層強くなり、十分ばかりの間齒の根が合はぬ様にガツ／＼顫へるのであつた。此の生と死の二つの異つた考が晝となく夜となく彼の頭に出没する。

どうかすると彼は堪らなく故郷が戀しくなる、彼は父母に對する輕蔑の念や、妹の良人に對する憤慨や、華族といふもの、傲慢や頑迷や、其等一切の不平を捨て、故郷の人々の胸に抱き付いた様な氣がする、と又直ぐ元へ逆戻して此の世は汚ららしいものだ、不義や非道の渦中に蛆蟲の如く生きて居るのは屈辱であると思ひ返す、慙ういふ二重の心は折り／＼彼をして自分は二重人格者でなからうかと思はせるのであつた。

寢られぬ儘に彼は寢床を出た、眞黒な天に鈍い光の星が散らばつて居る、山々と天との境界が判

然しないが、寢静まつた麓の荒野には一點の灯火も見えず、冷い風が枯木を鳴らし、足元の芥屑や新聞紙などをカサ／＼音たて、過ぎる。疲れた兵士は抱き合つて眠つて居た。天幕の中に並んで居る馬共は折り折りごとん／＼と地を蹴つて居る、路傍には忍びやかに斥候の支度をして居る一團がある、一人は小さな聲で唄つた。

「隣に居つた馬さへも、微發されて行つたのに、私は人と生れ來て、而も男子とあるものが、御國のための御奉公が、何れあらうと待つ中に、昨日届いた赤襷……」

「おい止せよ」と誰かが怒鳴る。唄は構はず續く。

「かけて勇んで行きます、父上母上いささらば、私はこれから行きます」

「私はこれから行きますと來やがらあ」と他の聲が言つた。

「不景氣な唄を唄ふなよ馬鹿」

聲は工藤軍曹であつた。

「工藤か」と一郎は聲を便りに言つた。

「はい、浅見中尉殿でございますか」

「さうだ、斥候か」

「はい」

「御苦勞だね」

「行つて参ります」

工藤の顔は判然見えないが、近づいた時酒の香がぶんと漲った。

「方向は？」

「任意であります、今夜は必ず捕虜を……將校の捕虜を伴れて來ます」

「うまくやれよ」

黙々として一隊は馬に騎つた、其れは約五六人であつた。

「勇敢な奴だ」

一郎は悠々呟いて再び宿舎へ歸つた。敵も味方も大砲の音が全然なかつた、夜は恐しい程靜かである、一郎は毛布の中に潜り込んで再び例の空想に耽つた。一時間！二時間！空想は何處までも續いた。

突然馬蹄の音が亂れて聞えた、次いで罵る聲、右往左往の足音！一郎は外へ出た。聯隊長の舎營の入口にどや／＼と動く人影が見えた。

「淺見副官」と言ふ聲がする、一郎が入つて見ると三人の騎兵が一人の捕虜を圍んで立つて居ると聯隊長は寢不足の顔をして暖爐の火を掻き立て、居た。

「捕虜に訊問してくれ」と聯隊長が言つた。

「此奴は、自分の味方の死骸から時計と銀貨入を盗んで居た處を捕へました」と斥候の一人が言つた。捕虜は蒼白になつて居たが、一郎が露語でものを問ひかけた時媚びる様に微笑した。一郎は敵の兵數や、兵種や將校の名を訊いた、其れから四五日前からの死傷者の數や、兵氣の狀態など細々した訊問に移つた、だが彼は農兵に過ぎなかつた、彼は他の同僚一大隊と共に昨日唐家屯に派遣されたもので、故郷には母と妹がある、妹は十八で美人だといふ事を繰返しく／＼言つた、さうして十字を切つた。

「此奴は駄目だ」と一郎が言つた。

「そんなものは要らん、收容して置け」と聯隊長は言つた。騎兵達は彼を曳き出した。

「工藤軍曹は？」と一郎は残つた一人に訊いた。

「將校を捕虜にすると言つてすん／＼防禦線へ上つて行きました、私達が彼奴を捕へてる時二發の銃聲を聞きました」

「やられた」と一郎は思つた。

「無茶な事をする奴だ、將校を捕虜にするなんて」と聯隊長は苦り切つて言つた。

「併し彼は勇敢無比です、彼は……」

此の時ダク足の蹄の音が聞えた、音は屋外で止まつた、と鐵砲玉の如く轉がり込んだ男がある、其れは工藤三吉であつた。

「聯隊長殿、敵は退却しました」

「何を？」

「聯隊長は棒の如く立つて眼を工藤の眼に据ゑた。

「敵は兵器彈藥、大砲數門と死骸數百を残して退却しました」

「何時頃か」

「暖爐の火が盛んに燃えて居ましたから退却してから三十分とは經ちますまい」

「本當か」

「確實であります、聯隊長殿」

「追撃！」と聯隊長は叫んだ、さうして佩劍の帶皮を揺り上げた。瞬く間に全隊は色めき立つた、

夜の静かさが破れて、馬の嘶く聲、佩劍と靴と擦れ合ふ音、歡呼の聲、雜音笑聲一度に起つた、而

も夜は暗い。處々にさつと火の光が迸つた、さうして建物や天幕を其の部分だけ照らした。

「あれは何といふ名だつてな」と聯隊長は帽子の紐を下しながら言つた。

「軍曹工藤三吉です」と一郎が言つた。「聯隊長殿、御記憶を頼みます」



「不思議な奴だ」と聯隊長は笑つた、一郎が戸口へ出ると其處に工藤が馬の鼻を撫でて居た。

「よくやつてくれた、明日留バンを與るから待つて居てくれよ」

一郎は三吉の肩を軽く叩いた。

「えらいぞ工藤、俺まで肩身が廣い」

「何もえらい事はありません、敵が逃けてしまつた後へ行つたんですからな」と三吉は不思議さうに言つた。

露軍の退却は實際日本軍では気が付かないのであつた、此の退却を知つたのは鴨綠江軍が一番最初であると言ひ又第一軍の近衛師團であるとも言ふが、何れが早いか晚いかは問題でない。退却したか否か、問題なのである、實を言ふと此の七日の夜から初めて日本軍の曙光が見えたのである。

十分と経たない中に師團司令部から淺見中尉へ東烟臺にある總司令部へ傳令を命ぜられた。用件は既に解りきつて居る。一郎は暗を衝いて馬を飛ばした。

其の夜大山總司令官と兒玉總參謀長と長い間密議を凝らして居た。密議とは言ふもの、二人の密議は沈黙の時間の方が多かつた。二人は日露戦争が開始された日から、或は其れより一年も前から既に言ふべき事は言ひ盡くし考へべき事は考へ盡くしたのだ、大體の作戰に於ては何の變りもない、

終始一貫して押通して來たのだ、陣形を變へたのは鴨綠江軍編成の時と、乃木軍が旅順から長驅してやつて來た時だけである。

だが二人の胸には互に言はうとして言ひ得ぬ秘密が潜んで居た、其れは開戦の當時只一遍だけ言つたので、其の後は互に其れを繰返す事を避けた。其れは恚うである。

「急がんと不可んな、日本には兵がないんだから」

日本には兵がない、露國は、日本の十倍以上の兵力を有つて居る、だから此の戦は短日月に敵を殲滅せぬと、ぐづくして居る中に、氷が解け春風が吹くと、露國は毎日三千人づつの兵を送る事が出来る。財力の點、糧食の點、凡ての點から言つても一日も早く敵の死命を制せねばならぬ。

而も目下相對峙して居る兵力から言つても、彼は我より五萬以上の兵力を有つて居り、要處々々に堅城堡壘を構へて居る。寡を以て衆を伐ち白兵を以て城壘に薄る、此れだけでも日本には勝目が無いのである、旅順の爲に乃木軍が後れた、而も乃木軍が來ない中は逆も奉天を陥れる見込が付かないのである。

日本全國の總豫備は悉く召集された。残るものは枯骨白髮の後備だけである。

これは丁度無収入の世帯を引受けて巨額の借金を整理しようといふに同じである。冒險至極な話で、世界列國が驚いたのは無理のない事である。財産のありたけを預けられて是れ以外には一文も



様にせねばならぬとしたらどんなものだらう。

戦が抄々しく進まぬに就いて二人が密議をする時に、二人の頭にむら／＼と湧き上る不安な雲はこれである。其れは言つても仕様のない事だから言はぬだけである。

『若し今此に新たに二三萬の兵があつたら』

二人は互に其れを考へない日とはなかつた、さうして其んな事を考へる事を互に恥ぢた。愆ういふ時には沈黙が一時間も續くのであつた。兒玉大將は鉛筆を矢鱈に卓子に擦り付ける、大山大將は凝と腕を拱む、其の右の手は左の内衣囊の處に當る、其處には頑丈な時計が入つてある。彼は時

ないのだ、毎日々々續出する死傷者、其れだけで補充が出来ない、愆う思ふと無謀な戦は出来ない、左りとて敵を攻めなければ時日が延びて敵勢が増加するばかりである、遼陽、沙河、旅順で失つた我が兵数は約八萬である、正真正正銘日本には二十五萬以上の兵がない、露國は百萬を有して居るのだ。愆う考へて見ると日本は一兵をも損じない様にせねばならぬ、鼠を殺すに鶏卵を抛り付けて鶏卵が割れない



計の音がかち／＼と胸に響くのを感じて居る。さうして愆う思ふ。

『巻いた時計の螺旋條は息ましてはならん』

彼は曾て愆う屬僚に言つた事がある、其れを彼が記憶して居た。

『日本で巻いた時計を滿洲で息ませると時計の効力がなくなる』

時計は絶えず動く、進む、だが戦況は一向進まない。

諸報告を綜覽すると敵は優勢で味方は不況である、奉天東方の諸高地攻撃は失敗に歸した、北方正面のラウニツ將軍は逆襲を以て我が軍を潰亂させて居る、リネウキツチ軍の方面は味方が數百名捕虜になり機關砲數門を分捕られた、此の不利な情

況が再轉してじり／＼に壓迫せられたら戦の結果はどうなるであらうか。

丁度今は相撲が劍が峰に踏みこたへて敵を真中へ押し出した處である、日と露が真中でガツキと組んだ、一步押されると勢が決まる、ナボレオンは戦は最後の五分間にありと言つた、今日本と露國は此の五分間の死活の境にあるのだ。

二人は何時まで沈黙した。兒玉總參謀長は鉛筆を取つて戦線圖の輪廓だけを太く引き直した、丁度其は長靴を横に倒した様な形になつた。

「此の靴は」と大山大將は圖面を覗いて言つた。

「豎になるとどうなりますか」

「さうです」

兒玉總參謀長は大山總司令官の言ふ處が直ぐ解つた、彼は數度點頭いた。さうして圖面を裏返して靴を起した形を畫いた。

「長い靴だ」と總司令官が言つた。

「第一軍と第三軍は其れを短くします」と兒玉總參謀長が言つた、二人はもう一度長靴の圖を見詰めた。實際鴨綠江軍と第一軍と第四軍は數十里に互る横に長い戦線の上に立つて居る、さうして第三軍は靴の脚部の裏の方を溯つて奉天をば既に乗越えた處の鐵嶺街道に出て背後から全露軍を包まうとしつゝあるのだ、其れを遂行するために第一軍は靴の脚部の表に沿うて鐵嶺街道に出て第三軍は左から第一軍は右から敵を取入れた巾着の紐をぐつと引かうといふのである。

だが凡ての報告が暗い影を帯びて居る。

「何時かな」と總司令官が言つた。

「十一時です」

總司令官はのそりと身體を起して室を出て行つた。兒玉總參謀長は鉛筆を卓子に突き立てた儘動かさなかつた。

「今夜あたり、どうしても退却しなければならん筈だが」

彼は愚考へた。彼は自分の作戰計畫に就いては確乎たる自信があつた、若し此の計畫が失敗すれば味方は收拾すべからざる苦境に陥るのだ。彼の見積りに依ると、乃木軍は今長驅して奉天の北方を扼さうとして居る、これに驚いて黑鳩公は必ず渾河の兵を收縮して全力を鐵嶺街道に注ぐに違ひない、其の虛に乗じて我が鴨綠江軍と第一軍が息も吐かせず追撃し敵をして鐵嶺に入る事すら出來ない様にしてやる。

大體に於ける計畫はこれであるが、抑々日露開戦の當初から彼が肝腦を砕いて研究したのは露國の政治、宮廷、國民思想、兵力、糧食彈藥、貝加爾鐵道、將校の勇怯、等であるが、彼はこれだけに満足しなかつた。彼は敵の總帥黑鳩公の性格調査に多大の力を費した、當時の日本人は兒玉總參謀長を智略縱横の天才的英傑の様に思つて居たが、彼はいかにも智略縱横であつたに違ひないが、彼には智略以上の偉大なものがあつた事を言ふ人は少い。彼は戦争は兵と兵の戦にあらずして將と將の戦であり、詮じ詰むれば總司令官と總司令官の一騎打であると信じて居る、丁度馬や犬の

性格が飼主の性格に似る様に、大將の性格が全軍の性格になる。彼は黒鳩公のあらゆる著書を読み、又諸方からの調査書類に依つて黒鳩公なる人の性格を知つた。黒鳩公は學者である、と彼は恚う断定した。彼は日常の言葉にも黒鳩公を學者々と呼んだ事がある。次に彼は恚う附加へた。

『神經質な學者で、正直者である』

學者なるものは知識ばかりが発育するから、物に對して毎も迷ひを生じて居る、決斷が鈍いために機會を捉へる事が出来ない、遼陽では戦ふ意志がないのに戦つて負けた、彼は沙河にしろ遼陽にしろ其の他の城寨にしろ、本當に守る積で敵に戦つて居るのか、但しは露國民への申譯のために戦つて居るのか、其れは露國全軍の將校にも解らない、恐らくは黒鳩公自身にも解らなかつたのであらう。大山大將は彼を評して、

『どうも譯の解らん軍をする人だ』と言つた事があるが、世界で戦法の第一人者と謳はれて居る彼が、譯の解らん軍をするとは受取れぬ話であるが、實際果敢斷行、泰山が前に崩れても初志を翻さぬ大山大將の眼から見れば、此の智謀餘りあるために自ら迷ひ自ら板挟みになつて狼狽をして居る黒鳩公の態度が不思議であるに違ひない。

黒鳩公の作戦は第一の方法を考へると共に第二を考へ第三を考へる、智の多い人は凡て其れである。併し兒玉大將は第一の方法を考へるだけである、彼は第二も第三も考へない、彼には最上の方

法只一つである、彼は只一つに全力を籠める、彼は決して逆艦を用ひる握原でなく、確信斷行の源九郎義経なのである。

單に黒鳩公ばかりでなく黒鳩公の有せる性格が凡ての將校に傳染した、彼等は懷疑を以て戦つて居るのである、而も懷疑や嫉妬や殘忍は白人の血に潜める共通な傳統である。

兒玉總參謀長が見て取つたのは此等の露軍全部の性格であつた、我が智のために累せられて居る彼を壓倒するには日本男兒の『意氣』一つにある事を知つた。どうしても今頃は敵軍退却の報告が來なければならぬ筈である。彼は何時までも鉛筆を立てたま、洋燈を凝と見詰めて居た。外はひゆる／＼風が吹いて居る、窓がガタンと音をさせて又コットンと小さな音をさせる、ガタンとコットンが代り／＼に一種のリズムをなして戯れて居るかの様。

淺見一郎が總司令部の前で馬から降りた時、頭巾に粉雪が積つて居た、彼は外套の雪を拂つて眞直に奥へ入つた。

『何か』

一人の參謀肩章を付けた副官が怒鳴つた。

『近衛師團長からの傳令であります、司令長官は……』

『閣下は寢まれたが……待て』

副官は去つた、さうして再び出て来て一郎を長官室に伴つた。

『近衛騎兵中尉浅見一郎……』と彼は名乗り終るまで將軍の顔は見えなかつた、將軍は今寢臺を降りようとして向ふ向きになつて上衣を着かけて居る處であつた。

『うむ、戦況は？』と將軍が言つた其の半白の頭と髭、皺深い厚味のある顔、最早弛みかけた兩方の險の奥に輝く炯々たる二つの瞳は一郎に一種壯嚴な宗教的な感覺を與へた。

『唐家屯の敵は退却しました』

『退却？』

將軍は喉元のホックを掛けようとして顔を仰向にして自分の襟を合せて居たが、其の手をはたと止めて其の儘一郎の顔を凝と見た。

『はい、退却しました、晝の中は猛烈に砲撃しましたが、夜になつて沈黙しました、味方の斥候が其れを發見しましたのは九時頃、敵は多分八時半頃までに退却を終つたものと見えます、大砲、機關銃其の他の兵器及び死屍數百が遺棄されてある模様です』

一郎は勢込んで言つた。將軍は其の間一郎の額から少し上の處を見詰めて居た、彼は其の顔の皺一筋だに動かさなかつた。其の眼は敵の退却を見詰めて居るもの、如く、又其れ以上の何事かを案ずるもの、如くであつた。雀躍して喜ぶだらうと豫明して居つた一郎に取つては此の冷靜な應對は極

て不思議であつた。

『御苦勞だつた、休息して居れ』

將軍は恚う言つて副官を呼んだ。

『浅見中尉に何か食べさせてやれ』

一郎が室を出る時將軍の顔はいかにも平和に見えた。其の夜の中に大山將軍は左の傳令を全軍に下した。

一、第一軍ハ敵ヲ追撃シ其ノ全力ヲ以テ興隆屯附近ニ於テ渾河ノ線ニ達スベシ

一、第四軍ハ追撃後長岑子、萬家嶺、大張爾屯ノ線ノ後方ニ於テ隊伍ヲ整頓シ鐵嶺ニ向ヒ大追撃

ノ準備ヲ完了スベシ

一、第二軍ハ奉天附近ノ敵ヲ撃破シタル後奉天西南地區ニ兵力ヲ集結スベシ

一、第三軍ハ奉天附近ノ敵ヲ撃碎シ後奉天北方ニ兵力ヲ集結スベシ但シ少クモ一師團ノ兵力ヲ滿

河ヲ經テ瓢起屯方面ニ差遣シ敵ノ退路ヲ横斷セシムベシ

追撃！ 追撃！ 最後の五分間は過ぎた、劍が峰に踏みこたへた日本が敵を押しして／＼押し抜い

た。露軍總參謀長サハロフ中將は九日の夜左の退却命令を下した。

一、各軍が鐵嶺ニ向ヒ退却シ同地附近ノ設堡障地ヲ占領スルヲ要ス

二、第三軍ハ日没ト共ニ渾河堡附近ノ陣地ヲ撤シ奉天城内ニ入ラズシテ奉天——鐵嶺道ニ沿ヒ退却スベシ

三、第二軍ハ第三軍ノ撤退スルマデ敵ヲ支持シ然ル後西方ヨリ壓迫スル敵ノ攻撃ニ對シ第三軍ノ退却ヲ掩護シテ鐵道ニ沿ヒ退却スベシ

四、第一軍ハ福陵附近ノ陣地ニ在ル軍團ヲ以テ第三軍後衛ノ渾河沿岸ニ於ケル陣地ノ撤退ヲ掩護シツ、退却スベシ

以下略

九日の夜奉天停車場は鼎の沸くが如くに混亂した。退却！退却！此の聲々が傳はると齊しく城内の軍隊や商人や勞役者は一度に停車場に集まつた。廣場には高粱ビスケット（三千五百輛分）石炭栗藁（三十二萬三千立方呎）を山の如く積んで其れに火を付けた、其の炎は天一ばいに擴がつた、汽車が来る度に傷病兵が先を争うて乗つた、其の混亂を防ぐために士官將校が劍を抜いて制したけれども無駄であつた。起つ事の出来ない傷病者達は他の兵士共の間に壓されて悲鳴を擧げた、彼等はブレークビーム、緩衝機、屋根や踏段にまで溢れた、此の騒ぎの中に最近に着いた許の農兵は手ん手に泥棒を働いた、先發の汽車が途中で日本軍の砲撃に遇ひ全滅したといふ噂が傳はつたので幾萬の人々は聲を擧げて神に祈つた。

各列車は五十二輛乃至五十五輛であつた、其れに砲廠彈藥は三列車、火砲は五百四十輛、冬服一列車、赤十字材料や工兵材料や、兵站部貨物等を積み、其の他は負傷者を乗せる事にした。一番先に積込んだのは火砲であつた、若しこれを日本軍に分捕られたら由々しき大事である、其のために輸送係官は火砲に夢中になつて傷病兵を忘れてしまつた、其れを見て傷病兵等は抗議を申込んだ、一人の士官は恚う言つた。

「傷病兵なんて戰鬥力のない厄介者よりも大砲や彈藥の方が貴重である」

だが士官の説は排斥された、さうして貨物と傷病兵を半分づつ乗せる事にした。どの列車もどの列車も日本軍に砲撃されたので、列車は燈火も點けず汽笛も鳴らさず暗の中を全速力で駛つた。輜重隊の多くは三臺子停車場に停まつて居た。彼等は味方の一縱隊を日本軍と見誤つて大混亂を來し、亂射亂闘少からぬ負傷者を出した。退却中の凡ての兵は慄へて居た、彼等は遠くの森を見ても丘を見ても日本軍だと思つた。此の大狼狽の中に獨り秩序整然として軍樂を奏し唱歌を唄ひながら堂々と鐵嶺に退却したのはリネウキツチ將軍の第一軍であつた。將軍は恚う言つた。

「日本軍はもう少し手厳しく追撃すれば可いのに案外頭腦が悪い奴等だ」

リネウキツチ將軍の批評が當を得て居るや否や、其は預かりとして日本軍の大追撃戦に移らう。追撃又追撃！七日間不眠不休で味方の屍を踏み越え、攻め立てた日本軍は七日の夜に敵の退

却を知つたので此に大追撃が始まつた。だが戦法から言ふと追撃戦に移つた場合には疲れた兵を休息さして新たな豫備隊を使ふのが至當である、悲しい事には日本軍の豫備隊は殆ど使ひ盡くした。そこで其の儘疲れ切つた兵を勵まし、追撃せねばならなかつた。露國の文豪アンドレエフは此の戦に從軍した一人であるが、彼も亦十餘日不眠不休のために凡ての兵は半ば狂病者となり、「赤い笑ひ」を發しながら戦つたと書いて居る、疲労は御互の事だ、我も不眠不休であれば敵も不眠不休なのである、逃げるものも疲れ切つて居れば追ふものも疲れ切つて居る。

近衛師團は九日の朝には舊站に向つて追撃したが、渡邊旅團は疲労の極、休養時間を與へねばならぬ必要が起つた、此の旅團は十餘日一睡の暇もなく奮戦したのである、そこで此の方面は木村旅團が代つた、木村旅團とても疲労の點に於ては大差なかつた。淺見一郎の聯隊は前衛となつた。

午後の二時から恐しい旋風が起つた、其れは奉天の大戦に於て忘るべからざる狂風である、支那には恠ういふ狂風が珍らしくない、赤壁の戦に孔明が祈り出した狂風も此の種の類である、何しろ風は數百里の山に野に暴れ廻り砂塵を飛ばし大地を吹き上げるので、天地溟濛、隣り合つた人の顔さへ見る事が出来なかつた、天佑！此の風は日本軍の背後即ち南から北へ吹く風であつた。此の啼冥な狂風を冒して日本軍は驚々地に追撃した。敵は逃場を失つて其の夜は偶然にも彼我同じ村落に混宿した。而も双方互に知らなかつたのである。

淺見一郎も亦疲れ切つて居た。彼は連日の睡眠不足のために意識が次第に朦朧となり、終りには何のために戦争をするのか自分が今爲しつゝ、ある事は何であるかさへ解らなくなつた。捕虜が刻々に増加した、軍は其等を後方へ護送するために若干づつの兵を割かねばならなかつた。十日の午後には既に二中隊の兵を捕虜の護衛に費した、左なきだに兵數不足の際に此の護送は日本軍に取つて忌々しい事であつた。

砲兵隊は絶えず非常な努力を以て敵を撃攘した、砲力の効果を見るや騎兵は轡を揃へて突貫する。次いで歩兵！敵は蜘蛛の子を散らすが如く潰走する。

達達堡子の高地は山嶺の終點で此處から平野が開け鐵嶺街道が見える。一郎は聯隊長の召に依つて高地に駆け上つた、其處に清水聯隊長は屬僚と共に今しも潰走しつゝ、ある敵を眺めて居た。昨日の狂風に引替へて天は拭ふが如く、春早き日の光が數千里に互る眼下の平野に満ちて居る、茶色の荒涼たる野の真中に白く輝く蜿蜒たる長い帯は鐵嶺街道である、其れより三四里を隔て、北へ並行する鐵道線路は東清鐵道である。最初砲聲がすつと右手の山と山との間から轟いて、一發二發三發！其れは敵か味方が解らなかつた、と突然山の尾にほつちりと見える森の間から一隊の兵が現れた。

「やつた〜」と聯隊長の傍に立つて居る隈元歩兵大尉が叫んだ、此の大尉は二度負傷して聯隊

副官に轉任となつた、其れでも彼は不平であつた、彼は副官の仕事をして居るよりも中隊長になつて劍を馬上に翳して敵陣に破り入りたいたのであつた。

大尉の聲と共に次の一隊が現れた、其れから又次の一隊！ 丁度山裾の森が蜂の巢で、其の巢の中から幾千となき蜂が叩き出された様。彼等は二縦列であつた、其れが大砲機關銃の音と共に四縦列になり二縦列になり、終りには八方に算を亂して散つた、其れは恰も物に驚いて潰亂する小魚の群の様！ 賢い兵は列を離れて逃げた、臆病な兵は群集して逃けるので日本の機關銃に薙ぎ掃はれた。魚の群は刻々に加はり森から出ては散り、又出ては散る、さうして鐵道線路に向つて走る。彼等は線路に出れば助かるものと思つて居るらしい。

輻重車、衛生車、砲車、彈藥車は地上に棄てられ、逆立ちをした。鐵嶺の街道は其等の妨害物に妨げられて彼等は暫らく車の附近で押し合つた。

愉快々々と隈元大尉が躍り上つた。「鐵嶺だ、なぜ逃路を塞がないんだらう」

第三軍はと聯隊長は言つた、さうして急に口を噤んだ。

第三軍があつたの街道へ出て來さへすれば」と大尉が言つた。此の時突然軍樂の音が聞えた、其れは眼に見えぬ程の遠い野末の一端に蟻の如く群る一旅團位の露軍から響き渡るものであつた、喇叭や太鼓はきらりと反射した、彼等は四縦列になつて、歩きつゝある。

「畜生！」と大尉は眞赤な顔をして怒鳴つた。

「あれを……あれを……看すく逃がすのかなあ」

「隈元大尉！」と聯隊長は沈んだ聲で言つた。

「味方に兵力がないんだよ」

「そんな筈はありません」

「彈藥もない、土方少佐の砲兵隊は砲彈が無いので敵の遺棄した彈藥車で漸と間に合はせて居る」

「併し全力を盡してやれば……あの通り敵が逃けてるんです、殲滅しなければ……殲滅しなければ……」

「……黒鳩公を捕虜にしなければ……」

「日本にはもう兵がないのだ、彈藥も……」

「本當ですか」

「兵が充分であれば乃木大將閣下の事だ、既に鐵嶺を扼して黒鳩公を捕虜にして居るだらう」

「残念ですなあ」

大尉は恚う言つた、砲彈で肉を削られた右の頬の大きな傷の痕がピリリと顫へると、大粒の涙がほとりくと靴の先に滴つた。

「俺も残念だ」と聯隊長は言つた。

捕虜の夕べ

追撃と退却！ 日本と露國！ 勝敗の色は此に見えた、だが戦勝を確實にするには敵をして再び起つ事が出来ない様に致命傷を與へなければならぬ。ロンドンタイムスの軍事通信員が言つた様に日本は何處まで露軍を追駆けて行つても真逆に莫斯科までは行けない、單に追駆けるだけでは何にもならぬ。

殲滅だ！

殲滅でなければ露國をして和を乞はしむるに足らない。大山元帥は無論日本全國民が憂慮したのはこれである。

戦勝々々の凱歌に五千萬の國民が酔うて居る時に、獨り仲々として胸に萬斛の憂を秘めて居たのは兒玉總參謀長であつた、彼は奉天の占領を以て戦の終局とせねばならぬ事を夙に知つて居た。祖國には最早兵力が盡きたのである。

戦局を結ぶには最後の致命傷を敵に與へねばならぬ、だが全軍悉く疲れ切つて居る。七日間不眠不休の兵を以て我より五萬若くは十萬も多い敵を追撃した處でどれだけの効果があらう。

追撃に法ある如く退却にも亦法がある、昔から敵に致命的の損害を與へた大戦といへば悉く追

撃の時である。露國のクツウゾフは英雄ナボレオンを追撃して四十萬の大軍を九分通り葬り去つた。エナの戦ではナボレオンが普軍を殲滅した、戦陣に立つものは何人も追撃を唯一の樂しみとなして居るのだ、其の作戦も追撃へ／＼と戦局を運んで行く處に苦心が存するのだ。而も今や日本は追撃の位置に立つた。

追撃の戦術で最も優れるものとして數へられて居るのは、逃げる敵の後面を追撃するのでなく、敵の逃げ路へ先廻りをする事である。敵は行手を塞がれて狼狽をする、腹背に敵を受けて仕方なしに陣形を變更して大轉換を行はねばならぬ、此の動亂を見込んで一氣に突撃すると如何なる鬼神の軍も微塵になつて碎ける。乃木軍が奉天が陥らない中にどし／＼北方へ出て敵の逃げ路を塞がうとしたのは頗る戦法に適つて居る、だが戦術は至れりと雖も實力はこれに伴はない、日本に兵力がないのである。

黒鳩公は自ら手兵を率ゐて乃木軍に當つた、其のために乃木軍は非常な苦境に陥つた、だが其のために一面第一軍は長驅して鴨綠江軍と共に優勢な進出をする事が出来た。我が第二軍第四軍を囊の底とすれば、上方の左は乃木軍で、右は第一軍と鴨綠江軍、これが囊の口元である。さうして敵を囊中に收めようとした、これは自然の戦局である。若し日本に今二個若くは一個師團の兵があれば優に鐵嶺へ先廻りして四面から敵を壓迫し囊の中へマンマと鳩を入れる事が出来たのだ。これは

最上の効果であるに違ひないが、それが出来ないうちに一方の口だけは開かねばならなかつた。

外國の戦術家は日本の此の作戦に就いていろ／＼な批評を下したが要するに其れは戦術上の褒貶であつて日本の政治的な知識の缺乏を表白して居るに過ぎない。戦術の上から言つても敵を四方から壓迫する事と一方に逃げ路を與へてやる事の可否に就いては未だ斷案を下したものが無い、四方から取込むといふ事は窮鼠却つて猫を囓む事になる。敵を殲滅する事は出来るだらうが其の代りに味方の損害も極めて大である事を覺悟せねばならぬ。紐育、トレブユンの通信員は「日本が露軍の後備を壓迫しなかつた爲めに三日の後には露軍は充分に勢力を恢復する事が出来た」と言つた。其れは事實に違ひない、世界の凡ての新聞は其れと同じ様な觀察を以て日本の追撃の緩慢を遺憾とした。だが見逃しては不可ない倫敦タイムスは恚う記した。

『日本は豫備軍の不足に苦しめり』

扱離つて露軍の退却振はどうかと言ふに、これは全然戦術の軌道を脱して居る。日本人は逃ける事が嫌ひだから退却に就いて興味を有つ人は甚だ少い様だが、凡て戦の上手下手を見るには攻撃よりも防禦、追撃よりも退却に注目しなければならぬ。徳川家康も漢の高祖も蜀の玄德も退却に妙を得て居た。楠正成の如きは退却の名人である、退却の極意も追撃の極意も歸する處は一である。曰く斷行にある。

退却に決めた以上は聊かの未練もなく一氣に目的地まで退却せねばならぬ。楠正成は惜氣もなく千早の城を捨てた。退却の意義は敗北でない、敵の鋭鋒を避け味方の不利な地位を捨てて或地點に足並を揃へ、其處から新に攻勢を取つて進撃するためである。世界大戦で巴里が圍まれた時、ジョツフル元帥は大退却を行つて巴里より後方三里の地まで去らしめ、其處から急に攻勢に出て強行長驅して獨軍を突撃したので頽勢を見事に挽回した。

黒鳩公は元來戦はぬ前から退却主義であつた。彼は「敵を殲滅するには敵に倍する兵力を要す」といふ月並な戦術を唯一のモットウとした、さうして春風煽やかに氷を解けば更らに二十萬の大兵を本國から輸送し得ると信じて居た。彼は其れまでは何處までも退却しよう、さうして大兵來らば一撃の下に日本軍を粉砕しようと考えた。だが本國政界の事情、國民の憤慨、社會主義の勃興、其の上に彼の幕僚の抗議、凡ての上から心ならずも戦はねばならなくなつた。彼は退却の命を下してから又其れを取消した、が間に合はないので又々元通りに訂正した。此の命令は通信機關の不備のため到達した處もあり、不達の處もあつた。其のために或軍團は退却し或軍團は進出した、支離滅裂、自由勝手な各隊の行動は恐るべき不統一となつて全局を攪亂した。

若し彼が名將であるなら、一旦決心した退却を斷行し、戦況が不利に陥らぬ中に全軍を收めて鐵嶺を守るべきであつた。首鼠兩端にぐづ／＼した爲に十六萬の死傷及び捕虜を出し而も鐵嶺は愚か

昌圖までも一氣に占領されてしまった。黒鳩公はこれを豫定の退却と稱した。遼陽に於て沙河に於て彼は豫定の退却といふ熟語を用ひた、露國々民は其れを信じて居た。百年前に露國はナポレオンに壓迫されてモスコウを捨て、百里の外に退却した、天寒く糧食盡き佛軍困憊の姿を見るや一氣に攻勢を取つてナポレオンの軍を粉碎した、其れ以來露國は退却を以て虎の巻となした、國民は黒鳩公がクツウゾフの如き大功を奏するだらうと期待した、だがクツウゾフと黒鳩公は餘りに人物が異ひ、佛國兵と日本兵とは實力に於て差がある。

とは言ふもの、日本軍が追撃緩慢であつた事は事實である、大山總司令官は追撃の命令を出したのは八日の午後であつたが、十日の夜九時には除伍整頓の命令を出さねばならなかつた。

各軍ノ光輝アル戦勝ニ依リ遂ニ敵ノ主力ヲ撃碎シ以テ敵ノ根據地タル奉天及其ノ附近ノ陣地ヲ全ク攻略シ得タリ

予ハ今ヨリ除伍ヲ整頓シ戦力ヲ恢復セムトス

遮二無二追撃する事も大切に違ひないが、微弱なる兵力を以てして、此の上にも損害を招く危険は避けねばならぬ。實際當時我が兵数は二十四萬人、而も既に七萬人の死傷を出して居る、全兵力の約三分の一を失つた。残る十七萬の兵！其れ以外には一兵も無い、さうして敵は幾萬幾十萬となく續々増加の力がある。水晶の皿を鼠に投げ付けけるのは愚な事だ、自重しなければならぬ。元

帥及び總參謀長の苦心を誰か知る！

十一日は朝から快晴であつた。昨夜淺見一郎は久し振で熟睡した爲めに元氣を恢復した。此の日早朝から敵の捕虜を獲る事千七百、此のために近衛師團は多くの護送兵を割かねばならなかつた。

「仕様のない奴だ、こんなに捕虜が多くちや今に戦闘力を全部護送に取られてしまふだらう」

聯隊長は恚う言つた、捕虜が出る度に彼は苦い顔をした、さうして兩手で頤の髯をむしやくに揉み上げるのであつた。

「樂隊がないと足が鈍いな」

限元副官は恚う言つて皆を笑はせた、樂隊といふのは敵の砲聲の事である。全く何の抵抗もなく無人の境を行くのである、何時の間にか兵卒は軍歌を唄ひ出した。

路は六百八十里、長門の浦を船出して……

曲りくねつた蔡臺子の路を全軍が唄ひながら行く、さうでもしなければ連日の疲勞に歩きながら眠りが出るのである。長い／＼列が長蛇の如く續く、銃劍の光がきら／＼日に輝いて肌は寒いが最早青い天に春の色が動いて居る。

路傍には敵の遺棄した輜重車が幾輛となく轉がつて居た。誰か其れを檢べると其れは砂糖の車であつた。隊伍は其のために混亂した。兵卒は銘々一と握つづ其れを取つた。一郎は其れを見過し

て通ると背後から聲を掛けたものがある。其れは工藤三吉であつた。

『浅見中尉殿』

『恚う言つてから急に言ひ變へた。』

『浅見大尉殿』

一郎は昨日突然大尉になつた、だが腕章は依然中尉のまゝである。

『あ、工藤曹長！』

一郎は三吉が曹長になつた事を憶ひ出して言つた。

『御目出たう』

『はい、難有うございます』

二人は馬の頭を並べた。美しい日の光は馬の頭に馬上の人に溢れた、其れは滿洲に珍らしい日和であつた。輜廂の影が、こつくりと眉の上に印される。二人は暫らく無言の儘軍歌を聞いた。何といふ美しい日だらう、次第々々に右の方へ遠ざかる山々の巒には紫の影が濃く染められて起伏した斜面々々は青藍の敷を疊んで居る。路には未だ草が生えないが畑には温もつた土の色が光の波を打つて居る、畢竟するに花もなく草もなく何の景物もない此の荒涼たる平野に美を與へたものは只日光だけである。日光は凡てのものを美しくした。ドツ／＼と轟く足音、砲車の音、其れと一

定の間隔を取つて擴がる軍歌の聲を夢の如く聞きつつ一郎は東京の郊外を追想した。

『東京ではもう麥が青い、梅は散つて垣根々々の椿、櫻、木蓮の苔が膨らむ頃だ』

突然はつきりと彼の眼の前に東京郊外の景が現れた。其れは恰ら白晝の光が漲る空中に浮晝の如く鮮かに見えた。一郎は凝と其れを見詰めた。今しも雲の裂目から迸る太陽の光の下に、向ふの小さな村の屋根々々と砲火に挫かれた樹木が見えた。大きな枝の半は既に撈られた此の樹木は残る僅かばかりの枝を頼りに春を待つて居るのである。

『俺は一體何をしてるんだらう』

彼は恚う思つた。彼は恚うして馬に騎つて他の將校や兵卒と共に滿洲の野を進行して居る意義が解らなくなつた、と直ぐに彼は其れを打消した。

『さうだ、戦争だ、俺は今戦争をしてるのだ』

そこで彼は工藤曹長を振返つた。彼は何といふ事なしに工藤に話しかけたくなつた。

『戦争は面白いかね』と彼は言つた。三吉は恐ろしく難かしい顔をして前方を眺めて居たが、急に毎もの子供らしい顔になつた。

『面白かありませんな』

『併し君は勇敢だ、いかにも面白さうに見えるぜ』

『若しも私に母親と妹がなかつたらこれほど面白いものではありません』
『なる程ね』

一郎は自分の胸中を見抜かれた様な気がしたので黙つた。

『ところで大尉殿』と三吉は續けた。『追撃ほど厭なものはありませんね』

『どうしてか』

『強襲、突貫、敵と戦ふ時には恐い事は些もありませんが、逃げる奴を追うて、若しも反れ丸に當りでもしたら詰らないと思ふと、何だか恐い様な気がします』

『其れもさうだな』

『妙なものです、ところで大尉殿』

三吉は何か言はうとして口を噤んだ。

『何だ』

『私はね、今朝から考へて居るんです、私が若し露國に生れたのだつたらどんなだらうとね、さうすると私はね、本當に日本に生れたのが難有くなりましたよ、今まで其れを知らなかつたのです』

『君が露國の曹長だつたら、僕は君に捕虜にされてるかも知れんよ』

『そ、そ、そんな事は、大尉殿、貴方を捕虜にするなんて勿體ない』

三吉は口から泡を吹いて幾度も繰返した。前衛は既に村を過ぎた、其處に敵の遺棄した二百ばかりの死骸があつた、敵は其れを積み重ねて焼くべく準備したのであつた。薪が積まれ、石油の罐が開かれてあつた。

『焼いてやらうか可愛さうだから』と三三人が立寄つた。

『打棄つて置け、誰か、焼くだらう』と隈元大尉が言つた。

村を過ぎると路は坂路になり、左へくと次第に狭まって谷間の隘路を通らねばならなくなつた。

『氣を付け』

聲々が起つた。軍歌は止んだ、どつくとどつと歩調の波濤が一度に亂れた、劍や銃の觸れる音、各隊々々の呼ばはる音、其れ等は一瞬間に起つて一瞬時に止んだ、さうして死の如き靜肅が流れた。

『来たぞ〜』

小銃の音が豆を煎る様に聞えた。前面の小さな堡壘！ 其れは清水臺の高地であつた。

『突貫！』

聯隊長は叫んだ。堤を決潰する逆流の如くに軍は四縦列になつて進んだ。隈元大尉は有名な高聲家である、彼は屹と堡壘を見上げて言つた。

『馬鹿め、血迷うてやがる』

其れから大きな聲で笑ひながら一郎に言つた。

「弾丸が頭の上を越すだらう、そら」

恐しい勢を以て至軍は走つた、堡壘を上る時に前者の尻を次の者が押し上げて進んだ、騎兵も歩兵も砲兵も一緒になつた。壘上にはもう敵が見えなかつた。

「あれだ、あれを見い」

聯隊長は言つた。一郎は西北の平野を瞰下した。其れは實に何とも言へぬ光景であつた、渺々たる平野の上に幾萬となき蟻の群が右往左往に亂れて走る、左の方乃木軍に壓迫されて逃けて來た敵の第三軍である、彼等は此處に我が第一軍が現れようとは夢想だにしなかつたのである、左右に敵を受けた彼等は只真直に北方へ逃けるより他はなかつた。だが逃けても逃けても平野の上である、其等は見る／＼砲火に薙ぎ掃はれた。逃ける事が愚であると覺つた彼等は白旗を掲げて我が軍指して進んで來た。

「畜生め、又俺の兵力を殺ぎやがる」と聯隊長は髯を揉み上げた。

戦は其れで終つた、騎兵聯隊は次の前腰堡まで進んだ、堡と堡との間の一路は死骸を以て埋まつた。

「日本兵の雜らない死骸を見るのはこれが初めてぢやね」

聯隊長は恚う言つた、全く其の通りである。何れの戦でも敵味方の屍が、枕を並べて倒れて居るのだが、此の日だけは前後左右悉く敵ばかりである。擔架卒は敵のために忙殺された。

前腰堡は捕虜を以て満たされた。一郎は直ぐ大隊本部の命を受けた、彼は捕虜の整頓をしなければならなかつた。

捕虜の後送！ これほど厄介な事はない、此のために護送兵を要するのみならず、其の整頓に多大の時間を要する、言語が不通であり捕虜は千人に餘るので一人や二人の通譯では役に立たない。一郎が捕虜收容係に抜擢されたのは露西亞語少しばかりと佛蘭西語に充分堪能である爲であつた。堡の廣場に全捕虜を集めた、其等を整列させて居る中に次から次へと、五人一人づつ捕虜を伴れて來る。

「もう締切にしてくれ」と一郎が言つた時皆が笑つた。

捕虜の顔はどれも／＼馬鹿けて見えた。一郎は彼等の中から將校を抜擢し、其等をして一小隊づつを編成せしめた。兵器は凡て没收した。丸腰の兵隊ほど見苦しいものはない、だが彼等は非常に豊富な財産を携帶して居る。湯沸器、飯盒、大きな麻袋、毛布、其等を彼等は肩や腰や背中に括り着けて居る、彼等は銃器よりも此の七つ道具が大切である様に見えた。彼等の服装はめちやく／＼に汚れて破れて居た、其の大きな手は胼に爛れ其の顔は垢と髭に埋まつて居た。其れは連日連夜不眠

不休で戦つた彼等の勇敢を想像させた。

彼等は後送の命令が下るまで勝手に堡壘の中から釜を運び出した。五つばかりの大きな釜が並べられた。彼等は湯を沸かした、さうして其れを飲み初めた。露國人が湯を飲む事は殆ど奇蹟に値するものである、彼等は大きいブリキの湯呑で四五杯を飲み續ける、其れでも未だ釜の前を去らない、彼等の間に湯の争奪が起つた。將校は流石に其れを耻ぢて彼等を制した、だが、此の場合に於て將校の命令は全然役に立たなかつた。湯の争奪は出發間際まで續いた。

到頭日本兵が彼等の中へ割り入り一人に就き三杯づつと決めた事に依つて靜肅になつた。此の騒ぎの間に將校捕虜は黙つて彈藥庫の前に集まつて居た。彼等は何にも言はなかつた、彼等は折り折り反抗的な又習慣的な傲慢の顔色をしたが自己の地位を反省する事に依つて次第に柔順になつた。一郎は彼等の身分調をした。一郎の流暢な佛蘭西語は彼等の心を和けた、彼等の眼は安心に輝き初めた。彼等の中には參謀大佐を初めとして中佐は六人もあつた。其の中に一郎はモノロフといふ一人の若き大尉に興味を有つた。彼は瘡せ形の極めて平凡な露國人型であつた。彼は兵卒の群にも入らず又將校の群にも入らず、只獨り凡ての同國人と離れて砲臺の下に蹲つて居た、彼は左の脚部に負傷をして居た。其の繃帯が短かいので血汐が洋袴を染めた。彼は其れを凝と見詰めて居た。一郎は看護卒を呼んで手當を加へた。

「皆が済んでからで可いです」と彼は言つた。傷は貫通銃創であつたので歩行に差支がないと彼は言つた。一郎は彼の名を訊いた時彼はさつと顔を染めた。

「名を言はなきやならんのですか」彼は言つた。

「さうです、氣の毒ですが」

「さうだ、私は捕虜である以上は私の名譽は既に無いのだ、イワン・モノロフ」

彼は恚う言つてから暫らく沈黙したが急に力を込めて言つた。

「私は今私の名譽云々と言ひましたね、私は夫れを取消します、私は只習慣的に名譽云々と言つたのだ、名譽なんて、そんなものは人間の價値ぢやない、私達は最も不名譽な事を働いてる、君！

日本の諸君も其れだ、戦争は！

瘡せた彼の顔はさつと活氣を帯びた、彼は一郎の眼をちらと見やつた、其れから次第に淋しい微笑を浮べた。

「ゆるしてくれ給へ、名譽だとか神だとか、人間は子供の時に吹込まれたものが、妙な時に頭を擡げるものだからね」

一郎はモノロフに別れた。其れから例の釜の方へ歸ると其處で頗る滑稽な構事が起りつゝあつた。何しろ俄かの捕虜激増のために我が軍では彼等に給與すべき重焼パンに缺乏を告げた。そこで彼等

に日本飯を焚いて食はせる事にした。捕虜係の兵卒が濛々と立騰る湯気の中で握飯を造つた。捕虜達は不思議さうに其れを眺めて居た。總て握飯が銘々に配られた、彼等はボカンと其れを持つたままどうして可いか解らなかつた。

「食べ方を教へてやれ」と一郎が一人の軍曹に命じた。

「うまい事をしやがつた」と他の日本兵が羨んだ。軍曹は小高い處に立つて握飯を食つて見せた。

「どうも未だ能く解らん様だからもう一つ食べて見せませうか」と軍曹が一郎に言つた。

「ずるい」と日本兵が言つた。露國兵は漸く食べ初めた、だが彼等に取つてはこれほど奇怪なものではなかつた。彼等は五本の指に飯粒がへばり着くので堪らなく不愉快なのである、で彼等は左から右へ持ちかへる、新しい手に新たに飯が愈々へばり着く、そこで又左にする、右にする、飯粒を指で押し潰す、驚嘆と哄笑の聲がどつと漲る。

「馬鹿な奴等だ、飯の食ひやうも知らない」と日本の兵卒が打囃した。

「そんな事を言ふな、國が異ふんだ」

一郎は何だか急に腹立たしくなつて味方の兵を罵つた。

「捕虜を侮辱するのは捕虜になつたよりも恥辱だ、彼等は刀折れ矢盡きて此に兜を脱いだのだ、彼

等は祖國に盡すべきだけの事は盡したのだ、彼等の忠勇は諸君の忠勇と同一である、我等は我等の忠勇を誇ると共に敵の忠勇を尊敬しなければならぬ、彼等が日本の飯の食ひ方を知らないのを何を以て馬鹿といふか、露國人は露國人のものを食ふが可い、日本人は日本人のものを食ふが可い、日本人がパンの食ひ方を知らないからと言つて馬鹿だと言ふ事が出来るか、露國は露國であれ、日本は日本であれ、解つたか」

一郎はこれだけの事を言ふにもなかく骨が折れた、彼は刻々に迫り来る一種の熱の情に堪へられなかつたのである、彼は此の訓誡を終つてから猶胸が鼓動した。彼が今まで骨を削り肉を割いても飽足らぬ程憎んで居た露國人に對して今全然反對な同情と憐愍が全身に養えくり返つたのである。

「捕虜となつた人の心はどうだらう、地を換へれば皆同じぢやないか」

一部隊々々つ後送したので非常な時間を要した。モノロフ大尉は終りまで残つた、で一郎は最後に彼を訪ねた。

「貴方は残部の一隊を指揮して下さいませんか」

淋しさうに夕雲を眺めて居たモノロフ大尉は突然立上つて叫んだ。

「私には其の権利がない」

『だが貴方は大尉でいらつしやる』

『おう淺見大尉！ 貴方が若し捕虜になつた時、貴方の職務が敵地に於て行ひ得ると思ひますか。』

私は今大尉でも何でも無い、私は一農民です、私は今初めて自由を得ました、……

……

『貴方は非戦論者ですか』

『さうです』

『貴方はなぜ軍人になつたのですか』

『國民の義務だからです』

『義務？ 其れだけ？』

『それ以外に何がありますか』

『……』

『愛しません』

『……』

『愛しません』

『貴方は何を愛しますか』

『私は私の生命を愛します』

『其れだけ？』

『其れだけです、其れが眞理です、今に此の眞理が世界の人に解る、戦の後に來るものは戦争を呪ふ思想です、平和を望む心です、……』

『……』

『……』

『其れは戦争に負けた國の事でせう、皇室と國家を愛さない國の事でせう』と一郎は叫んだ。

『貴方は皇帝を愛しますか』とモノロフが言つた。

『天皇陛下は地上にあるもの凡てよりも尊敬します』

『國家は？』

『天皇陛下に生命を捧げるものは國家に對しても同じです』

『さうして貴方自身は？』

『陛下と國家の前には私一個人の如きは考へた事ありません』

『本當か』

『無論！』

「本當か、日本の人民は皆貴方と同じ思想か」

「悉く！」

「悉く？」

モノロフは眼を一郎に据ゑて叫んだ。

「そんなく」

彼は跛を曳きくぐるく同じ處を廻り歩いた、さうして何を思つたか獨語の様に言つた。

「今に日本も私の思想を受ける様になる」

「おい君！」

一郎はモノロフの肩をポンと叩いて言つた。

「日本は戦争に強い如く思想にも亦強いんだよ、其れだけは注意して置く」

モノロフは何にも言はなかつた。日は次第に暮れかけて來た。一郎が彼に別れて本隊に歸つた時、跛を曳きながらモノロフが釜の前に立つて居たのを見た。釜の下の火は消えて居た。彼は空つぽな釜の中を覗いて居た。

捕虜の後送が終つてから一郎は可成りむしやくしやした氣持で馬に騎つた。

「あん畜生！ 撲つてやれば可かつた」

捕虜を憫れむ心と全然別箇な残忍な感情が相並んで胸を占領した。

「虚無思想！ 無政府主義！ 社會主義！ そんなものは露西亞には必要だ、彼奴は自分の愚劣な

國と日本と同一だと思つてやがる、戦争に負けたから思想で復讐しようてんだ、可しッ、何でも來い」

彼は馬にダクを呉れた。

妻

節子は又しても鏡を見やつた、今日はこれで十回以上である。彼女はどうして恚う鏡を見るのが好きになつたか自分でも解らない、或日母が來て鏡ばかり見ると終には氣が狂ふといふ話をした、其れから節子は自分で鏡を見る事を節しようと思つた、朝に一度、外出の時に一度、就寢前に入浴の時、此の位にしたいと思つた、だがどうかすると鏡の前に立つ、はつと氣が付く時には既に鏡の覆ひを刎ねた後である。

「氣にするから猶見なくなるのだ、氣にしない方が可い」と良人が言つた、だが矢張り氣になる。

鏡の前に立つて凝と見詰めると庭の若葉がむらくと鏡面に映る、影の處は藍色で其れから明るくなるに従つて緑になりエメラルドになり黄色な透明さが枝と枝、葉と葉の間に漲る。かつきりと

空は青い。

其の間に自分の顔がくつきりと浮ぶ、此の頃の流行に従つて二百三高地巻に結つた髪は漸く顔に似合ふ様になつて来た。彼女の母恒子夫人は此の髪を高慢な髪だと言つたが慣れて見ると高慢らしくもない。

「瘡せたわ」

彼女は自分の顔に向つて自分で言つた、併し其れは彼女の眼にのみ見える瘡せであらう、結婚後はどんな婦人でも一種の沈着が出来て半熟な娘時代とは全然別な姿になる、此の沈着きを一概に瘡せたと見做すのだが、豊かな瓜實顔、鈴を張つた眼、紅い小さな唇、其れは決して一年前と變らな

い。只彼女が最も恐れるのは眼の光であつた、彼女の母は毎も恚う言つた。

「お前ほど眼がいろ／＼に變る人はなからうね」
實際彼女の眼は敏感な晴雨計の如きものである、ほんの少しばかりの事に觸れても眼の光が變化する。其れを知つて居るものは彼女の母と良人の篤彌だけである。

「どうしたら自分の氣持が眼に現れない様にこまかす事が出来るだらう」

彼女は今其れを考へて居た。彼女は今朝良人に對して憂鬱な態度を取つたのは宜しくない事だつたと後悔した、其れは恚ういふ事であつた。

彼女の一番嫌ひな事は他人の皮膚が我が皮膚に接觸する事であつた。彼女は學校にあつた時に友達に手を取らるゝのでさへ一種の悪寒を感じた、其れが何の用意もなき唐突の場合には猶更激しい嫌厭の情が起るのであつた。ところが良人の篤彌は外國流が好きで少しでも隙を與へると接吻やら握手を濫發するのである。

「御早うございます」

「御早う」

篤彌の姿勢には早不穩な氣分が現れて居た、節子は其れを避けようとする隙もなく良人の腕が首筋に絡んだ。節子は非常な力を以て拒絶した、さうして這々の體で居室へ逃げた。彼女は此の一瞬に良人の絶望的な憤懣の色を見て取つた、だが最早や取返す事が出来なかつた。

「なぜあんな事をなさるんだらう、外國人はどうか知らないが日本では……女中達に見られても體裁が悪い」

彼女は恚う思つて食堂に入つた、良人は鹿爪らしい顔をして入つて来た。

「良人に恥辱を與へて濟まない事をした」

節子は恚う思ひ返した、併し彼女は機嫌を取直す方法を知らなかつた。食事は極めて淋しかつた。二人は言葉少なに箸を擱いた、恚ういふ事があると良人は大抵會社を休んで自分も氣が済む様に妻

も氣が済む様に、和合の手段を講じない中は、外出せぬのであつたが、今朝に限つて黙つて出て行つた。

節子は鏡に向つて今其の事を考へて居た、彼女は自分が我儘である事を知つて居る、併しいくら何でも毛唐の眞似は出来ない。十日許り前にも此の事で争うた、が其れは暫らく中絶した、然るに又もや此の癖が復活した。

「接吻は愛の表現であり親密な挨拶だ」と篤彌が毎も言ふ。節子は其れを憶ひ出し、顔を染めた。彼女は良人がいかに強烈に自分を愛して居るかを知つて居る、此の一年間自分の我儘をも悔へて凡ゆる譲歩をしてくれた事も知つて居る。丁度早天の蛙が一滴の雨を喜ぶ様に稀に許してやる冷い接吻に満身の喜びを感じて居る事も知つて居る。其れでありながらどうして良人を愛する氣になれないのだらう。

二人差向ひで居る時には何となく憂鬱であるが、良人が外に出た後で、一人で淋しく考へて見ると、自分の我儘が袴々と胸に浮ぶ、さうして其れに逆はずに出て行つた良人の姿がいかに氣の毒になつて来る。

縦令いかなる事情あるにせよ、一口妻となつた以上は妻としての義務を果さねばならぬ、自分の利害から言つても、一生を此の男に托して向後何十年間の同棲生活に毎日不愉快な目を見合つて居ると、自分の我儘が袴々と胸に浮ぶ、さうして其れに逆はずに出て行つた良人の姿がいかに氣の毒になつて来る。

「これでは不可ない」

彼女は慙う獨りで言つた、彼女は良人の顔を見ると感情的になるが、獨りで居ると性來の理性がしつかりと氣持を落ち着ける、今朝の態度は自分で宜しくなかつたから、御歸りになつたら心を入れて楽しくしてあげよう。

こんな事を考へてる中に「御歸りイ」といふ聲が聞えた。良人の出入毎に送迎するのは日本の悪習だとして禁じられて居るので彼女は其の儘動きもせず腕椅子に腰を下して居た、さうして又ちよつと洋風の鏡臺を覗いた。

「御歸りです奥様」と小間使のお鈴が扉口から聲を掛けて過ぎた。

「奥様は？ 奥さんは？」

篤彌の慌ただしい聲が聞える。篤彌が外から歸つて帽子を脱ぎもしない中に發する言葉は毎も此の「奥さんは？」である、其れはいかにも外にある間胸一ばいに奥さんばかりを思ひ詰めて居る。急病人ちやあるまいしあんなに慌て、御訊きにならなくても」と女中共がいつも笑ひ話の種にして居る、實際篤彌は家へ入るや否や妻の顔を見ない中は氣が安まらぬのであつた。

「お居室にいらつしやいます」とお鈴の聲が聞えた。節子は椅子を離れて扉口に出迎へた。

「只今！」

篤彌は大きな折靴を女中に渡し、手巾で額を拭きながら全く急病人に馳せ参じた醫者の様に急ぎ込んで入つて来た。

「御歸りなさいませ」

節子が腰を折つて靜かに挨拶した。

「気分はどうですか」

「別に……何も……」

恙う言つて顔を擧げた時彼女は良人の眼に慾望の光が輝いてるのを見た。あつといふ間もなく彼女は良人の胸に抱かれた、其の乾いた唇は熱かつた。節子は戰慄した、彼女は自分の唇を冷たい水で洗ひ淨めたいと思つた、言ひ知れぬ不快が全身に漲つた。篤彌は妻を解放してから上着を脱いだ。さうしてこれで今朝からの憂鬱が一掃された様な顔をして椅子に腰を下した。

「果物が欲しいですね」と篤彌が言つた、さうしてお鈴を呼んで其れを命じた。節子は其れまで何にも言はずに鏡の方を向いて居た。彼女は唐突な良人の暴狀に對する不快がなかく冷めなかつた。だが此の不快は一刻も早く追ひやらなければならぬと思つた、さうして自分の我儘を抑へて愉快に

今日の日を過さう。

だが悪い時には悪い事が續く、又しても節子は堪へきれぬ事が起つた。一旦椅子に落着いた篤彌は直ぐに起つて室内を歩き出した、オリブ地に薄い縞のある背廣を着て胸に玉虫の琥珀地のネクタイを垂れて居る。此のネクタイは彼の最も得意とする處のもので彼は此の他數十のネクタイを所有して居る。さうして毎日々々新しいのと取替へる。最初節子が彼と結婚した時に第一に驚いたのは此の数へきれぬ程のネクタイであつた、節子は生れてから一郎と共に育つた爲めに凡ての男は一郎と同じもの、様に思つて居た。一郎は學生時代から木綿の紺飛白に膝まで届く袴でなければ小倉の洋服であつた、頭は五分刈で顔も碌に洗はない時もある。凡ての學生、凡ての青年は、さうあるべきものと確信して来た節子には、六十本のネクタイを一日代りに着けて行く篤彌は恰ら他國人の如くに思はれた。節子の失望は第一にこれであつた、彼女が妙齡に達してから頭に描いた理想の良人は一郎の如き型である、小事に拘泥せぬ男らしい男、小南浩の様な沈黙寡言で上品で鷹揚で重みのある男であつた。

「男の癖に頭に香水を塗つたり、爪を磨いたり、洋服に氣を配つたり、何といふ厭な人だらう」

これが第一印象であつた。此の印象は八ヶ月後の今日になつてもどうしても薄らがない、猶其の上には彼女は篤彌のあらゆる點が自分と合はない事を知つた。彼女は人間は何よりも品位を重んずべ

きものと信じて居る。處が篤彌には品位が皆無であつた。世間の噂では篤彌は決して總領の甚六でない。無論父萬藏の威光があるとしても、商賣に掛けては萬藏以上だといふ。新らしい事は何でもどしどし行る、交際が上手で、掛引が巧くて機會を攫むに一種の魔力を有して居るといふ。

だが節子にはそんなものは一切不必要であつた。篤彌は毎も怒う言ふ。

『私は平民主義だ』

彼は機嫌の好い時には女中の肩を叩いたり、出入の八百屋と握手をしたりする、さういふ事が平民主義だと思つて居るのだが、機嫌の悪い時は恐ろしく大きな聲で召使共を怒鳴り散らす。

『少し黙として頂戴ね』と節子が言つた。篤彌は窓の處へ行つて鸚鵡の籠を覗いたり、卓子の上の本を弾いて見たり、椅子にドシンと坐つて足を空ざまにしたかと思ふと又起つて鉛筆を削つたりする。

『ねえ貴方、靜かに御話しようぢやありませんか』と節子は再び言つた。

『さうく、さうだね、ところで果物がまだか、晚いな、取つて來ようか』

篤彌は扉の方へ行きかける。

『い、えく』と節子は手を舉げて制めた。

『私が行つて参ります、貴方は輕々しい事をなすつては不可ません』

『輕々しいつて？』

篤彌には其の意味が解らなかつた、節子は室を出た。彼女が苺を盆に載せて入つて來た時、そこに篤彌が鏡に向いて髪を撫でて居るのを見た。綺麗に磨いた指先と櫛が滑らかに動くと、黒い髪が波をうねくと織る。彼はブラシと櫛を極めて巧みに使つた、髪は左手に真直な筋が白い地肌を畫然と見せて左は短く右の方へ起伏した波は油の光に輝く。

『御上手でいらつしやるわ』と節子は淋しく微笑した。

『上手だらう』と篤彌が言つた。此の時節子は凝と彼の背後を見詰めた。頭を背後から見ると辣菫の形に似て居る。其の首筋——短衣一つになつた首筋は際立つて判然と見える。彼女は良人が首から頭の麓まで剃り込んでるのに氣が付いた、其處は恰ら御禿に剃つた赤ん坊の様、さうして白い地肌が耳の處まで露れて居る。

『貴方は首の上を御剃りになつたの？』と節子が言つた。

『あ、日本人はどうも首が短いよ』

『さう？』

節子はちらと鏡に映つた自分の顔を見やつた、其處には何とも言ひ様のない陰鬱な二つの眼が現れた。

「氣を付けなきや不可ない」と彼女は自分を警めた。さうして良人が美味さうに苺を食べるのを眺めて居た。

「別れたい」と彼女は思った、彼女はどうしたら此の男の手から逃れる事が出来るだらうか、此の問題は抑々結婚の當初からの問題であるが毎も要領を得ずに終つた。併し此の儘夫婦として同棲して居た處で其れは却つて双方の不幸ではあるまいか、毎日々々肚の中で良人を罵り良人を呪うて居るのは良人に對しての叛逆であり自分自らの冒瀆である。どうせ永久に愛する事が出来ないものなら今の中に綺麗に別れる方が可い。其れが最も潔白な行爲である。

「でも良人は決して許しはしない、今まで幾度も持出したが駄目であつた、さうすると離婚の望みは全く絶え果てたのだ」

苺を食べ終つてから篤彌は本郷座の芝居見物に行かうと言ひ出した。

「えい参りませう」

節子は冷やかに賛成した、彼女は芝居を見ようが見まいが其んな事はどうでも可いのであつた。家を出るまでに中々時間が要つた。節子は入浴して薄化粧して着物を着換へた頃に篤彌も漸く準備が出来た。彼は西洋風に倣ひ夜會服に絹帽を被らうとしたのを節子が諫めて漸と羽織袴にした。

本郷座は去年歐洲から歸朝した女優望月浪路の一座であつた。第一は「愛國」といふ軍事劇一と

幕で第二はモンナ・ヴンナといふ表題であつた。モンナ・ヴンナは白耳義の詩人メーテルリンクの新作であるが、新聞では冷評半分にドンナモンダなどと地口つたのもあつた。日本で唯一人の女優であり、且恤兵部寄附興行といふので場内は立錐の地もなき大入の盛況であつた。婦人會や慈善會や赤十字などの團體は競争の姿で切符を引受けた。恚ういふ場所には見受けない貴婦人達が木綿の紋附を着て接待して居た。

淺見子爵が二十枚の切符を賣付けられて断る事もならず、其のために親類や知己を招待する事にした。花道側の棧敷で其處には子爵老夫婦や畠山伯爵や篤彌の父萬藏やいろ／＼な人達が二人を待つて居た。二人が着いたのは丁度第一番目が終つた時であつた。

一番目の狂言はほんの時局の當て込みで三臺子の激戦を演出したのであつた。敵の猛烈な強襲に會ひ味方の旗手が第一番に燈れた、續いて代つた旗手が又燈れる、三番四番と九人まで燈れた。十人目の旗手が胸を二ヶ所射たれた。交替兵があるかと思返つたが一人もない、そこで彼は棒立になつて軍旗を捧げたまゝ、動かかなかつた。一分二分三分！五分を過ぎたが旗手は直立して居る、そこへ一人の兵が片脚を曳き／＼走せて來た。さうして旗手に退却を勧めた、旗手は沈黙して居る、再び勧めた。矢張り沈黙して居る、近寄つて見れば旗手は死んだまゝ、直立して居たのであつた。

幕が降りてからも観客は聲を出さなかつた。婦人席ではもう聲を擧げて泣いて居る人がある、と依

へくた沈黙は一時に破れた。期せずして萬歳の聲が起つた。一人の白髪頭の職人が舞臺の上に跳り上つた。さうして拳骨を固めて自分の頭をうんとこさ打つた。観客はわつと笑つた。

「泣かせるわい、うん、泣かせるのう。」

島山伯爵は眼の真中から涙をほと／＼落して其れを拭はうともせずと言つた。

「日本男兒だ、恚ういふ芝居は外國には見たくとも無い。」

「うまくやりましたな、あの役者は何といふ役者でせう。」

萬藏は恚う言つた。

「役者も恚うなると立派な教育家だ、ガムベツタよりも豪い」と淺見子爵が言つた。

「今の處に一郎も居たのでせうか、あんな危い處に」と恒子夫人は涙を拭き／＼、「私も胸が痛

くて見て居られませんか。」

「愉快々々、勇壯ぢや、死んでも軍旗を護つて直立してゐるなんて、どうぢや、あれが日本軍全部の魂ぢや、あれにや敵ふまい、露國などはどうしたつてあれにや敵ふまい、役者でさへあの通りだ、

あの役者が戦地へ行けば矢張りあの通りにやるんだ、其の決心がなければあれだけ巧く演れるもん

ぢやない、役者が……、兵士が……軍旗を……役者が。」

伯爵は興奮した氣持を一度に言ひ表さうとするために、役者も兵士もごちやく／＼にしてしまつ

た。さうして彼は漸く其れに氣が付いた時、いかにも愉快さうに高らかに笑つて、今入つて來た節子と篤彌を見やつた。

「惜しい事をした、もう少し早かつたら。」

「残念でした」と篤彌は挨拶しながら人々の間に入つた。

「御母さま泣いていらつしやるの？」と、節子が恒子夫人に言つた。

「もう／＼私ね、こんなに心配な芝居なら一足御先に歸らして戴きます」と夫人が言つた、一同は

笑つた、隣席の人達も笑つた。

「今度のは外國の芝居ですから大丈夫です。」

と篤彌が言つた。其處へ例の芦澤夫人が島濤博士令嬢の日出子を伴れて入つて來た。其れから引

續きてにをはの刀自も見えた。杉橋中將夫人も見えた。

芦澤夫人は例の幡ヶ谷の行者の信仰者であつたが此の頃行者反對黨の一人になつた。彼女は何れ

の時、何れの席に於ても饒舌らなければ生きて居られないのであつた、さうして毎日の様に他人の

ために奔走し、結婚の媒介やら離縁やら職業探しやら一文にもならぬ事に骨を折つては毎も失敗し

て終りには愚痴をこぼし廻るのであつた。

芦澤夫人が入つて來た時何人も自分の側へ寄せる事を好まなかつた。

「此方へいらつしやいまし」
節子は聲を掛けた。

「おや／＼ほんの鼻先に日本一の御綺麗な方がいらつしやるのに気が付かなかつた」
芦澤夫人は慙う言つて節子と並んだ。

「ねえ夫人」と夫人は節子に言つた、「貴方は富塚さんの御嬢さんを御覽になりませんか」

「富塚さん？」

「そら、肥つた、そら、デブさんですよ」

「あら御口が悪いわ」

「どうしても見えなければならぬ筈ですが」

慙う言つた夫人は直ぐ向ふを見た。

「あ、鶴巻伯爵が御見えになつてる」

「どれ何處に」

「正面ですよ」

いかにも正面の棧敷に夫人や令嬢其の他に圍繞かれて悠然と陣取つてるのは鶴巻伯爵であつた。節子は子供の時に三三度父に伴れられて伯爵の御庭の菊を觀に行つた。國事のために片脚を爆弾で失

つた伯は政界に志を得ないが、野に在つて毎も國家を一身に負うて居るのは伯爵であつた。平素は左までにも思はないがイザ事があると國民は鶴巻伯を思ふ、新聞記者が駆け付ける、地方代議士が走せ参する、隠れもなき無官の英雄である。脚が一本無くとも、年は七十を過ぎても、慙ういふ人があるから皆は氣丈夫なのだ。節子はつく／＼思つた。

「モスコ―伯萬歳」と見物人の一人が言つた。潮の如き喝采と笑聲が起つた。畠山伯も亦聲を出して笑つた。

「不思議な男だ、實にえらい奴ぢや」

畠山伯は慙う言つて淺見子爵を向いた。

「左様々々、大法螺も慙ういふ時には必要です」と、子爵は言つた。

日露戦争が開始した時、國民は慙う叫んだ。

「金州を占領すれば大丈夫だ」

ところが連戦連勝に伴れて國民は慙う叫んだ。

「遼陽まで／＼」

遼陽が陥落した、すると又叫んだ。

「奉天々々」

奉天が陥落した。そこで國民は叫びつゝある。

『ハルビンへへ〜』

だが開戦の最初から鶴巻伯は恚う斷言した。

『皇軍はモスコイまで進撃しなければならん』

伯爵は一戦毎に一勝毎に此の言葉を繰返した。皇軍はモスコイに入るんだ。露國皇帝は素車白馬で城下の盟をなすんぢや。

芝居見物とは言ふもの、廊下では矢張り戦争の話ばかりであつた。奉天は占領した。此の上は海軍だけである。バルチック艦隊は今何處に居るだらう。

此の頃の電報は頻々として近海に露艦が出没して居ると傳へる、或ひは宗谷海峡に、或ひは持田岬に、北海方面は形勢頗る不穩である。

『牽制運動だ、其の手は食ふものか』と一人が言ふ。

『日本の艦隊は何處に居るんだらう』と心配するものもある。

『海軍の事は海軍大將に任せて置けば可い』

恚ういふ樂觀者もある。節子は是等の話を聞き、人々が心の底から國家の興亡を憂ひて居るのを見るに付け、自分の胸の底に次第々々に今までに覺えない大きな義務を感じ出した。

『皆が大きな事で心配してるのに私だけが自分の事で心配して居る』

彼女は恚んな事を考へてると膝の處で何だか蠢くものがある。はつと思ふ途端に篤彌の手が早くも我が手を握りしめた。

『面白いよ、そら幕が開いた』

節子は顔を擧めたが振拂ひもしなかつた。モンナ・ヴァナの第一幕、場面は伊太利のピザ城内である。ピザは今敵軍に圍まれて絶體絶命である。此の上は城を枕に討死するより他ない。此の時敵の大將プリンチヴァルレから使が來た。

『ピザの城將ギドウ氏の夫人モンナ・ヴァナを我が陣營に訪れさせたら圍みを解いて上げませう』

此の申込はギドウに取つて最も恥辱とする處であつた。彼は恥を取るよりも寧ろ死を取らうと言つた。だが彼の妻モンナ・ヴァナは一身を犠牲にしても市民を救はうと言ひ出した。さうして裸體の上一枚のマントを掛けて敵營に赴いた。

これが第一幕である。

『どうなるんですか、これは』と芹澤夫人は少からず驚いて言つた。

『女丈夫ぢや、西洋にも感心な女があるのう』と畠山老伯爵は言つた。

『どうですか、あの場合皆さんだつたらどうなさる』

「皆が助かるなら私行きます」と節子は言下に答へた。と彼女は此の時母の眼に涙が一ぱい溜まつたのを見た。

「さうだ。私は丁度モンナ・ヅンナの様だ」と節子は胸の中で言った。

「私も参ります」と芦澤夫人が言った。

「私も参ります。無論」とてにをはの刀自が言った。

「御婆さんでは敵將は承知しまい」と淺見子爵が言ったので皆が笑つた。不意に言つた言葉ではあつたが、節子は自分の言葉に依つて自分とヅンナの境遇が同じである事に氣付いてから此の劇に對する興味が一層強くなつた。

第二幕は敵將プリンヂヴァルレの陣營である。夜闇を衝いてヅンナが訪ねて來た。彼女は残忍な敵將の兇暴を覺悟して來た。が事件は反對に進行した。敵將なるものは幼友達である。彼は幼い時からヅンナに戀をして居たのだ。さうしてヅンナの幸福のためには自己の幕營自己の名譽、自己の味方をも捨て、圍みを解き自ら去らうと決心した。彼はヅンナの肉體には一指だも觸れようとはしない。只彼は昔の戀人と一夜を語り明かしたのである。彼はヅンナを劬つて昔の幼話をした。ヅンナの胸の底に潜んだ昔の愛が次第に復活した。二人は夢の如く追憶に耽つた。

「あ、私」と節子は堪らなくなつて身慄した。彼女は自分がヅンナであると思ひ、さうして相手の

プリンヂヴァルレは小南浩であると思つた。一夜……一時間でも可いからあの人に會つてヅンナの様に昔話をして見たい。彼女は恍惚と二人の對話を聞いた。闇に包まれた天幕の中、一つの椅子に二人が腰を掛けて彼一句、我一句、交はす對話は海の彼方の而も四百年も前の異國の人の身の上だとは思へない。二人の感情が昂まるに従つて節子の感情も昂まつた。

「どんなに嬉しからう〜」と彼女は口の中で繰返して居る中に次第に氣が遠くなつて霞の覆紗の中に美しい虹が溶けて行く様になつた。今しも二人は迫り來る感情に酔うて其の恐ろしい戀の力に抵抗しかねつ、も躊躇して居るのであつた。

節子の五體は石の如く硬くなつた、彼女は呼吸が止まるかと思つた。さうして思はず拳を握りしめた。と彼女の掌にある良人の手が得たり賢しと恐ろしい力で握り返した。

「面白いの？」

節子の幻影は一瞬間に消えた。

「素的ですね」

良人は恚う言つて又握りしめた。幕が降りた。

「怪しからん〜」

老伯爵は怒鳴り出した。

「何だこれは、實に怪しからん、あの男は何だ、あれは人間ぢやない、畜生だ、女一人のために國を賣る奴だ、以ての外のことだ、あんな奴は外國にはあるかも知らんが日本には無い、斷じてない、若しあるなら磔刑にしなければならん」

「外國では何よりも純眞な愛を尊びます」と篤彌が言った。

「愛だと言ふか」と伯爵は益々吼え出した。

「愛だ？ 女に惚れて國が保てるか、馬鹿な事を、あの女も大馬鹿ぢや、國家存亡の秋に方り敵の大將と惚氣合ふて奴があるもんか、亭主が氣に入らんなら離別して何處へでも行くが可い、最初の意氣はまことに可かつたが、敵陣へ行つて色男を見てから急にぐにやくになつた。彼奴は國家を救はうとして行つたのぢやない、色男を探しに行つたのだ」

「其りや酷ですな、少くとも作者は……」

「酷ぢやない、西洋の女は多淫だから、色男を見て涎を流すのは仕方がないとして、其れなら何故使命を果してから、良人と離別してからにせんか、ビザの市民は死ぬか活るかとの夜の眼も寝ずに待つて居るのだ。男を見て急に氣が變るとは何事だ」

「其れでも敵將をビザへ連れて行つたから可いでせう」と篤彌が言った。

「私は歸る、こんな芝居は見るのも汚はしい、あの役者共も碌なものぢやない」

老伯爵はブリ／＼して出て行つた。其方此方からくす／＼忍び笑が聞えた。

だが此に奇妙な問題が起つた。其れは昔澤夫人から口火が切られて八方に擴がつた。

「若し私達だつたらどうするでせう」と夫人が言った。

「矢張りヅナの通りですわ」と日出子が言った。

「いゝえ、どんな幼馴染でも、良人以外の男と用談外の長話をするのは宜しくありません」とてにをはの刀自が言った。

「でもあれは潔い戀なんです」

「潔くても汚くても良人以外にそんな心を向けるのは不眞です」

「併し先生、ヅナは好きでギドウの妻になつたのではありますまい」

「好きで結婚したのでなくとも、人の妻となつた以上は不可ません、そんな悪い了見を起す位なら最初から結婚しなければ可いのです、結婚は心と心の約束ですからね」

「節子さんはどう思ひますか」と篤彌は節子の顔を見詰めて言った。

「私？」と節子は訊き返して、「ヅナが可愛さうだと思ひますわ」

「いゝえ戀愛問題の事よ」と日出子が言った。

「戀愛問題がどん底まで行くと至極簡單になりますわ」

『どんな風に?』

『死なうか活きようかといふ問題に』

『さう?』

日出子は眼を睜つた、芦澤夫人は酷く感動した様に、『全くね』と小聲で言つた。實際彼女はそんなに感動して居ないのであつた。

雑問雑答、雑念雑音を避けて節子は廊下へ出た。彼女は孤獨になつて考へを纏めたいのであつた。彼女は階段の上に立つて下へ降りようかどうしようかと思ひ惑うた。此の儘良人に無断で家へ歸らう? 但しは良人に断つて今夜實家へ泊ることにしようか?

階段の上から二段目に足を踏み出して下を見やると、群集はざわ／＼芋を洗ふ様に混亂して居る。中には藝者らしきもあり、女學生もあり、貴婦人もあり、下町の娘もある、其等に雜つて出沒する紳士、學生、商人、労働者、何れを見ても何となく男らしく何となく緊張まつた顔をして居る。

『どんな男でも篤彌の様に空虚な顔をして居る人はない』

彼女は慙う思つて、第三段に踏出した。

『あらッ!』
階段の下に驚きの聲が聞えた。節子ははつとした、今彼女の足元に立ち停まつたのは小南の妹

環と姪の澄江であつた。

『あらッ!』

節子も思はず聲を擧げた。三人の視線がびたりと合つた。と此の時節子は釘付にされた様に立竝んだ。

環と澄江の背後に立つて居るのは小南浩であつた。

『御兄さまから御音信がありますか』

小南は慙う訊いた。

『いゝ、些も』

節子は小さな聲で言つた。其が聞えたか聞えぬか解らぬ。小南は一吋會釋をしたまゝ、群集の中へ紛れ込んだ。

『小南さん、一寸』

節子は急に階段を降りかけた。

『節さん!』

階段の上から篤彌が聲を掛けた。

浴室

芝居の打出しは十時半であつた。二人の馬車は灯の並ぶ町を抜けては又暗い静かな町を行く、四月の夜空に呆けた様な朧月が懸つて、向ふの森や竝木の頭の輪廓だけを憎平と見せて居る。二頭の馬の蹄の音がカバ／＼と眠つた町に響く。

節子は何にも言はなかつた。彼女の胸は未だ波立つて居る。彼女は眼前を流れて過ぎる軒並の灯や、垣根や、板塀や、家々の家根などには殆ど無關心であつた。種々な幻影や感覚が洪水に打ち寄せられた芥の如く、一波々々毎に起伏し去來し出没する。耳の遠くに芝居の観客のどよめきを聞く、眼の何處かに百千の燭。光や群集の頭が見える。而も其等の何處かに戀人の姿が判然と現れる。

『もう少し話をする勇氣がどうして出なかつたのだらう』

『嗚ういふ後悔がちり／＼と胸を打つ。』

『其れにしても、顔が見られたから可いわ』

直ぐに鼓動が高まつて来る。

『私を蔑んでいらしたのではなからうか』

彼女は階段の上から聲を掛けた良人の顔を憶ひ出した時脊筋が寒くなつた。

『小南さんばかりでない、環さんも澄江さんも私を笑つてたに違ひない、あんなに薄つぺらな男を良人に有つてるなんて何といふ馬鹿な女だらうと……』

節子は堪らなく羞かしかつた。

『貴方！ 止めて頂戴ね』

彼女は腹立たしく、而も靜かに言つた。

『あ、さう／＼』と篤彌は貧乏揺りを止めた。彼は椅子に掛けた時でも、馬車に乗つても、毎も膝をかたく貧乏揺りをするのが癖である。而も其れが節子の嫌ひなもの、一つである。

妻に聲を掛けられたので篤彌も發言の緒を得た。

『モンナ・ワンナは可愛さうだね』

『えい』

だが節子は其の事を考へては居なかつた。彼女は今夜本郷座にあつた時、二千人近くの多くの男を見た。男は色の黒い人白い人、大小肥瘠千差萬別であるが、而もどんな人でも何處かに男らしい貫目を有ち、腹の底に力がありさうに見える、自分の良人の様に腹が薄くて輕率で沈着がなく品位が下等な人は一人もない。

奇妙な襟帯をぶら下げて手巾を三角に折つて胸の衣囊から出した姿はいかにも西洋の模倣だけで一生を送る人間の様に見える、其れが厭さに今夜は和服に着替へさしたが、肩に品位がないから羽織がだらりとして藝人の様に見える、袴は後下がりになつて疲れた葬式の歸りの様、これでは洋服の方がまだしも可かつた。

愆んな事を考へると情ない氣が一ぱいになる。其れでも世間では立派な若様だと言つて居る、どうして立派なのだらう。彼女は曾て母に此の事を言つた時母は愆う言つた。

『つまり性が合はないのですね』

節子は其れを憶ひ出した。

節子と竝んだ篤彌は貧乏揺りを止めてから再び沈黙した、實の處彼は先刻本郷座で節子と小南とが顔を見合はした時、嫉妬に近い不愉快な感情がむら／＼と起つたのであつた、だが樂天的な彼はさういふ事を深く胸に考へたくなかつた。彼は妻と小南との關係に就いては一種の疑を抱いて居た。其れは結婚前からの事である。結婚後三日目に彼は此の事を恐る／＼節子に訊いた。

『お前は僕と結婚する前に戀人があつたか』

『ありました』と節子は言つた。

『どの位の程度の關係だつたかね』

『貴方は』と節子は呆れた様な顔をして言つた。

『私の品行を疑ひなさるの？』

『さうぢやない、其れで解つた、堪忍してくれ』と彼が言つた。さうして、『誰だつて娘時代には戀人があるものだ』と附加へた。

言葉だけでは其れでさつぱりした様だが、篤彌の胸底には其れがこびり付いて離れなかつた。彼は今少し真相を確かめたいのであつた。而も節子には何か知らん深い秘密があるらしく見える。左りとて其れを探索して若し妻の身に前科があるとすれば自分は失望せねばならぬ。其れが恐ろしい。のみならず、節子に對してそんな探索をするといふ事は大なる侮辱である。紳士たるものはそんな事をしては不可ない。

愆う思ひ返した、其れから以後今日に至るまで彼は紳士の體面を保つために、妻に對する嫉妬と随分激しい戦ひを續けて來た。彼は妻の冷靜な性質、傲慢に近い上品さを見るに付け此の疑念は次第に薄らいで來た。

『だが僕に對して愛しやうが足りないのはどういふわけだらう』

此の點も直ぐ形付けた。

『年が若し、御姫様育ちだし、第一僕の價値が未だ充分に解らないからだ』

ところが今夜本郷座に於て彼は不思議なものを見た、其れは妻が小南を見た時の一瞬間の眼の働きである。呼吸が止まつた人の様に節子が立竈んだ、顔がさつと青くなつたかと思ふと直ぐ紅くなつた、顔の皮膚は少しも動かないが、眼は恰らに燃ゆるが如き光を放つた。さうして魅せられた様な熾烈な表情が突々と動いた。

此の場合彼女は小南より以外に何にも思はなかつたに違ひない、無論良人たる自分の存在をも忘れた、恰ら沛艾の馬が勒を脱れて高原に馳せ向ふ様に、彼女の霊も肉も小南に向つて飛び盡くしたのである。篤彌は今まで彼女の歡心を得べくどれだけ心を盡くし誠を盡くしたか數へきれないのだが、一邊も此の様な熾烈な表情を自分に向けてくれた事はない。

侮辱と憤怒を感じた彼は前後を忘れて妻に聲を掛けた、聲を掛けないとも小南が後へ引返す處であつた。

『どうだ、貴様の戀人かは知らんが、今は俺のものだよ』

彼は慙う肚の中で言つて勝利を感じようとした、だが直ぐ亦慙う考へ直した。

『身體は俺のものだが、靈は先方へ行つてる』

芝居の残る一幕は此の混亂した嫉妬のために極めて不愉快に過ぎた。此の不愉快が今亦馬車の中で繰返された。

『可しッ、あの眼付を見ると二人は何等かの秘密を有つてるに違ひない、今夜は是非訊問してやらう、さうして場合に依つては暇をやる、何！ 糞ッ！』

馬車は一定のタイムを取つて一定の蹄の音で今しも麻布の坂を上りかけた處である、垣根々々から木蓮や連翹や菜の花に似た様な暖かな香ひが仄々と流れて来る。

家へ入るや否や節子は着物を脱いだ。毎も慙ういふ時には二人が軽い食事をするか、一杯づつ葡萄酒を飲むのである、女中共が其の準備をしてる中に節子は黙つて浴室へ行つてしまつた。

『一緒に入らうか』と篤彌が聲を掛けた。

『では御先に御入り下さい』と節子が言つた。

『僕は止さう』と篤彌は言つた。彼は室をぐる／＼廻つた。彼は自分で自分を嘲らねばならなくなつた。毎でも彼は妻の冷やかな態度を見ると癩癩の虫が喉まで昂みあけるのだが、さういふ興奮状態の時でも腹の底で和睦を希望して居る。少しでも節子が柔順な顔色をすると、丁度鐵が磁石に吸はれる様に、一瞬間に憤怒が消えて妥協してしまふ。彼は其の點を自分の臆病に歸した、時として『こんな女は別れる方が可い』と思ふ、だが此の考と殆ど同時に、『彼女は俺の許を離れても立派に生きて行くだらう』と思ふ。それが癩にも障れば未練の種にもなる。

今夜こそ大訊問を開始して去就を決しようとして心に計畫しながらも、一緒に風呂に入らうかと申込

んだのは疑もなく屈從の表白である、若し節子と一緒に入浴したならば篤彌は其の儘にこゝ顔で一夜を幸福に過したのかも知らぬ。ところが物の見事に拒絶された、彼は自分の意気地なさを判然と見せ付けられたのである。

「可しッ負けるもんか」

彼は寢室へ入つた。節子が風呂を出て髪を撫で付け終るまで相當の時間が掛つた、彼女が寢室へ行くと良人は既に寐て居た。さうしてハイネの詩集を胸の上に披いて讀んで居た。

「お寐みなさいまし」

節子は慙う言つて自分の床に入つた。彼女は良人が何か言葉を掛けるだらうと思つて居た、だが篤彌は何にも言はない。節子も黙つて居た、其の中に彼女の疲れた頭が段々甘くなつて、何處かの遠くに何かしら自分自身を待つて居る様な氣がした。

「どうだ、風呂は熱くなかつたかえ」

突然良人の聲が聞えた。

「い、え」と節子は慌て、答へた。

「さうか、其れは可かつた」と篤彌が言つた。

翌日は無事であつた、その翌日も……だが三日目の朝に篤彌は非常な力を以て節子の背後から抱

きか、へ、顔を振り向けて猛烈な接吻をした、食事を運んで来た女中のお梅は思はず「あッ」と聲を擧げた。節子は壁の隅に立つて蒼白になつて顫へた。お梅は顔も擧げずに俯向いたが耳根が眞赤に染まつて居た。

「はッくく」と篤彌は笑つて膳に着いた。さうして慙う言つた。

「どうだ、新緑の朝日は爽々しいものだね」

節子は何にも言はずに食卓に向つた。

「オートミルが可いんだよ」と篤彌はお梅に言つた。

「左様でございますか、奥様も召上りますか」とお梅が言つた。

「さうだよ、直ぐ持つて来てくれ、可い子だからね、お前はなか／＼別嬪になつた」と篤彌は一人

軽躁いで言つた。

「ねえお樂、五分間にオートミルが出来るか、五分間だ、可いかお樂」

此のお樂といふ女中に今一つお梅といふ名がある、節子はお樂よりもお梅といふ名の方が好きなので、お梅と呼ぶ事にした、だが篤彌は何か心に嬉しい事があるとか、お梅に特別な親密の意を表する場合にはお樂／＼と呼ぶのである、此の些細な事が節子の氣に障つた。彼女はお梅が出て行つてから慙う言つた。

「なぜお梅と御呼びになりませんか？」

「何方でも可いぢやないか」

「い、え、決めた通りに呼ばないと何だか變です」

此の時勝手元の方で高聲に笑ふ女中共の聲が聞えた。

「彼奴、今の接吻を臺所中に觸れてると見える」と篤彌は笑つた。節子は長い溜息を吐いた。篤彌の想像通りお梅はオートミルを銀盆に載せて持つて來た。

「おい、お前が向ふで何か言つたね」と篤彌がお梅に言つた。

「い、え、私何にも……奥様牛乳を御入れ致しませうか」とお梅は言葉を反らした。

「可いから彼方へ行つて御出、私が御給仕をしますから」

お梅が去つた後で二人は元の沈黙に復つた。

「お前は此の頃ヒステリーになつてゐるね」と篤彌はスプーンでオートミルを口の中へ掻き込みく言つた。

「ヒステリーではありません、ヒステリーはたしなみのない女にある病氣です」

節子の聲に鋭い針があつた。

「さうかね、昨日は大變長い手紙を書いてた様だが、あんな事は身體のために可くないよ、誰の處

へ手紙を書いたのか」

節子は黙つて居る、篤彌は續ける。

「モンナ・ヴァナを觀た時の感想か？ 御友達へ送つたのか」

「……」

「随分長い手紙だつたね」

「御兄さまの處へ」と節子は簡單に言つた。

「さうか」

遠廻しに探りを入れた篤彌の計畫は失敗に歸した。彼は此の二三日の節子の憂鬱は本郷座で小南を見たからだと思つて居る。

「さうかね」

彼は席を立つた。さうして庭下駄を曳きすつて薔薇の芽を摘んだ。節子は長い間席を離れなかつた。不圖庭を見ると良人の姿が見えない。最早出勤の時刻だから其れを知らせねばならぬ、愆う思つて彼女は洋室の入口から庭へ降りようと廊下を通つた。彼女は自分の居室の前へ出ると其處に篤彌が坐つて居た、彼は節子の足音にも氣付かぬほど其の仕事に夢中であつた。彼は節子の手文庫や抽斗を夢中に搔廻して居た。其れから机の上の吸取紙を凝と見詰めたが聽て虫眼鏡を取出して其れ

を一生懸命に覗き出した。これはほんの一瞬間であるが、節子は此の瞬間にいかにも野卑な感情に燃えて居る良人の顔を見た。はつと思つて逃げようとする隙もない、良人は節子をちらと見返つた。さうしてフ、と苦笑した。

「何を見ていらつしやるの！ 薔薇の虫ですか」と節子は言つた。さうして虫だと言つてくれ、ば可いと思つた。

「虫は虫だが、悪い虫がね、お前の胸を噛む虫が居やせんかと思つてね」

「どういふ事なの？」

「戀人がね」

「貴方何を仰有るの？」

「節子は堪らなくなつて叫んだ。」

「長い手紙を戀人にやつたんだらう」

篤彌の顔は青くなつた。彼が恚ういふ風に大きな聲を出したのは今が初めてである。

「貴方は其れで吸取紙を検査していらつしたのですか」

節子の聲は顫へた。

「さうだ」

「卑劣ですわね」

「何を？」

篤彌はもう市井の無頼漢である、節子は戦慄した。彼女は人間の如何なる罪惡よりも品格の下等な事は一番嫌ひなのである。

「貴方はね、御自分の妻の貞操を疑うなんて、さういふ心持で能く私と一緒に暮らせるんですね」

「何を言ふか、おい、これを見ろ、小南といふ字が判然左向きに出て居る」

「御兄さまに書いた手紙ですもの、小南もあれば北もあり西に東もありますわ」

「小南へ出した手紙だらう」

「貴方、静かに仰有つて下さい、私達は身分のないものではありませんから」

「これより静かに出来ないよ、さあ白状しろ」

「いやな事を仰有る」と節子は凛然と開き直つた。「貴方は私を何だと思つていらつしやる」

「俺の嫌アだ」

「まあ」

「金を出して買った大事の嫌アだ」

「あゝ……」

節子は天井を向いて額に手を當てた。

『もう止して下さい』

『お前は此家へ来た事を思に着せてるんだね、俺は思とは思つて居やしない、金で買った俺の嫌

アだ』

『貴方!』

節子は片手を覺にばかりと突いたが、其の儘倒れもせず凝と首を低れたま、下唇を噛みしめ嘔みしめ姿勢を崩さなかつた。彼女の胸は鐵の如く硬くなつて脊筋は恰ら水銀の棒を突込まれた様、さうして三角の石塊が鳩尾の邊りを桶の箍の様子に締め付ける。

『取り亂しては不可ない』と彼女は眩暈の渦の中に眼を確乎と据ゑて自分を叱つた。眼前の疊は坂の様に半ば起き上り其の縁は一尺ほどの幅に見え、障子といふ障子は躍り出した。

どれだけ長い間彼女が其の儘坐つて居たか知れない。——實際其れはほんの十分間位のものであつた、彼女は夢の如く起つて化粧室に入つた、鏡を見たが顔が見えなかつた、彼女は只矢鱈に髪にピンを挿し込んだ、髪は一面に針の山の如くなつた。

漸く吾に復つて白粉下を顔に塗る、其れを拭き取つてから水白粉を掌に滴らす、一滴、二滴、三滴! 小さな壺から滴る白粉は掌に一ぱいになつた、彼女は其れを見るときもなく見て居た、依然と

して白粉が滴る、指の間を潜り手の筋を抜けて白粉は膝にほとりく垂れる、彼女は矢張壺を傾けて居た。彼女の靈は全く疲れて只ふはくと涯りなき青天の上へ飛んだ、彼女は何も考へる事もなくければ悲しみも憤りも反抗も努力も……さうして希望もなくなつた、白粉の壺が空虚になつても彼女は矢張左の掌を開き右の手の壺を傾けたま、動かすに居た。

家の中は静かである。夫婦の間に不愉快な葛藤が起つたと知つた女中共は鳴りを静めて死の如くに沈黙して居る。掌の白粉が乾き盡くした時に彼女は初めて其れに氣が付いた、堪へがたき淋しさが一度に五體に浸み渡る。

『泣いちや不可ない』と彼女は自分を制した。其れだけ涙は胸から喉へと昂み上げて来る、微かな足音が背後に聞えた、不圖顔を上げると父の姿が鏡に映つて居る。

『どうした節子! 此の頃は些とも邸へ來んな』

博多平の袴に茶色の羽織を着た父は口に銜へた葉巻を左手に持ち直して窓の外へ灰を叩き再び節子に向き直つた。

『身體が悪いのか、御母さんが心配しとるぞ、どうだ、私と一緒に居らんか、迎ひに來た』

『いゝえ、何でもありません』と節子は微笑した。

『先刻、篤彌さんが見えてな、どうも節子は機嫌が悪くて困るから何とかしてくれといふものだから

らな、御母さんは、其れは多分妊娠の故ぢやらうと言つてたよ、妊娠をすると女は憂鬱になる、其れは仕方のない事ぢやよ」

「そんな事はありません御父様」

「いや、確かに妊娠ぢや、篤彌もさう言つてたよ」

「篤彌が伺ひまして？」

「あ、ひどく心配して居た、節さんに叱られたから逃げて来たつてな」

「さう？」

節子は篤彌の心を推しかねた、たつた今卑しい聲を張り上げて金で買った嫌アだと怒鳴つた良人が、妻の實家へ行つて仲裁を頼むとは一體どういふ氣持の人だらう。彼女がそんな事を考へて居ると、父子爵は一向無頓着に饒舌り續ける。

「もう英國あたりから媾和の勸告があつたらしい、萬一したら一郎が歸つて来るかも知らんでな、さうすると先づ第一に一郎の住宅を造らにやらん、其れで此の間から邸の裏隣、そら大見さんの邸、あれを買ひ受けて新築に取掛る事にした。私の設計ぢや、私はこれで中々建築にかけては博士ぢやてな、無論贅澤は慎まなきやならんが、一郎の體面上、相當の事はせにやらんでな、篤彌さんにも今度は一肌脱いで貰つた様な次第で……」

「篤彌に建て、貰ひましたの？」と節子はさつと顔を染めて言つた。

「建てるのは私が建てたのだ」

「でも御金は？ 御父さま！」

「金か、うむ、金は栗津の世話になつたよ、なあに其れはな、平和になつて内閣でも變るとどうでもなるよ」

「では、矢張り栗津家の世話になつたのですね」

「さうだ、だが心配するな、金の事はどうにもなるものだよ」

節子はしげくと父の顔を見やつた。胡麻鹽の頭、白い髭、達者さうには見えるが額の皺は前月よりも深くなつて居る。彼女は何にも言へなくなつた。彼女は先刻良人が叫んだ聲を憶ひ出した。

「金で買った嫌アだよ」

何方にした處が其れに違ひない、金で買はれた以上は父が此の上に世話を受けようと受けまいと其れは問題でないと彼女は思つた。

其の日の夕方、三臺の馬車が篤彌の門内に入つた、一臺には篤彌と芦澤夫人と烏瀧令嬢日出子とが乗つて居た、次の一臺には、をはの刀自と矢島代議士夫人が乗つて居た、第三番目には女子大學卒業生で婦人記者たる山城京子と他に三人の若い婦人が乗つて居た。此の人達が一度に押寄せた

ので節子は急に着替へて應對せねばならなかつた。俄かの事ではあるが食卓は節子の機敏な取計ひで頗る完全であつた。

「貴方！ 私困つちまひましたよ、突然にあんな大勢の御客を御伴れなすつたんですもの」

節子は良人を別室に呼んで慇う言つた。

「いや結構だよ、お前の才智には全く感服した」と篤彌が言つた、慇ういふ對話は晝の鬨争を打消してしまつた。主人夫婦が若いので御客達も極めて無遠慮に語り合つた、さうして非常に大仕掛な賣市を開いて陸兵部へ寄附しようといふ相談が初まつた。

「一萬圓位は集めたいものですな」

「なか／＼どう致しまして、五萬圓位でなければ」

「でも、今までの賣市で一萬圓以上はありませんよ」

「い、え、三萬圓がありました」

「では三萬圓！」

「いや五萬圓！」

「いつその事十萬圓にしませう」

「會の名前を何と致しませう」

「日本淑女會が宜しいでせう」とてにをはの刀自が言つた。

「フレッシュな感じのする名前が可いでせう、どうしても若い人にはフレッシュでなければ人氣を惹きません」

慇う言つたのは婦人記者の山城京子であつた。その頃日本には婦人記者といふものはたつた二人ばかりしきやなかつた。彼女はさういふ事には頗る通曉して居た。今までの赤十字社や愛國婦人會などではフレッシュでない、若い婦人といふのを看板にしなればならないと主張した。

「フレッシュとは何でございますか」とてにをはの刀自が質問した。

「其れはねえ小母さま、新しいといふ事ですのよ」と鳥潟嬢が説明した、そんな事で此の相談はなか／＼時間がかつた、だが何れも満足して居た。

「女子青年會は如何ですか」と言つたものがある、それに對して刀自は言つた。

「青年と申しますと男の事になります……」

鳥潟嬢は透さず横槍を入れた。

「女の事を青年と言ふのはてにをはが合ひません」

一同は崩る、許りに笑つた。相談が決まらない中に夜が更けかけたので再會を約して退散した。一人で歸るのが體裁が悪いので、大勢の人を狩り集めて一緒に歸つた篤彌の計略は圖に當つた、

客と應對してゐる中に節子の氣持は次第に和いで來た。客が歸つた後で二人は平和に語つた。

「今晚は實に愉快だ、僕は生れてからこんなに愉快な日はない」と篤彌は繰返しく言つた。

これはいかにも篤彌の大発見である、彼は毎日毎晩只二人きりで顔を向き合つて暮らして居る事が、節子を憂鬱にするのだ、節子の氣持を明るくするには絶えず客を會して雑談させるにある、彼は慙う思つた。一日を隔てた翌日彼は又もや婦人達を晚餐に招んだ、さうして例の賣市の相談に掛つた。晚餐又晚餐、三日に一度は篤彌の門前に馬車や車が溢れた。賣市の豫算は段々話が大きくなつて五十萬圓といふ事になつた。だが其の時には賣市に對する熱が冷めて豫算だけは大きいが實行手段を講ずる人は無くなつた。てにをばの刀自は其れに呆れて出席しなくなつた。若い夫人、暇な夫人、夜遊びの好きな令嬢達は篤彌の家を俱樂部の様にして遊んだ。其れ等の御相手をすべく篤彌は若い友達を招待した。日本には蓄音機が珍らしかつた、篤彌は外國のレコードを聞かした、若き人達は海の彼方の陽氣な音楽に憧れた。だが彼等は舞踏をするまでには及ばなかつた。

節子は此等の來客の應對を煩く感じながらも、而も一面に喜びを感じた。只二人きりで居るよりは大勢で遊ぶ方が可いのである。客には代謝があつたが、御饒舌の芦澤夫人と鳥湯令嬢と山城婦人記者の三人は一日も缺席した事はなかつた。

毎も食事が済むと骨牌をやる事になつた、篤彌は骨牌のいろ／＼な仕方を皆に教へた、節子は骨

牌が好きであつた、彼女は慙ういふ遊びをする人間が變つた様に陽氣になるのである。時々大きな聲を出して笑つたり、隣の人の札を覗いたり、負けた時には口惜しがつたり、勝つた時には自分で喝采したりするのであつた。

「子供の様だ」と篤彌は毎も思ふ。すると或日篤彌は綺麗な箱に入つたものを持ち出した。

「何ですか？」

「私知つてゐるわ、御花の札でせう、八八とも言ふのよ」と鳥湯嬢が言ふ。

「骨牌も飽きたから此の方が可い」

篤彌は其の方法を教へた、其れは骨牌よりも興味のあるものだと思つた。其の夜からして集會毎に御花が続いた。キングとか女王とか但しは記號の數を書いた札よりも、松の傍に首の長い鶴が居たり、牡丹に蝶、紅葉に鹿、眞赤な月が芒の山から出たりする繪模様の方が遙かに優美である、節子はさういふ事が氣に入つた。

骨牌や花合せが始まつてから來客が段々に減つた、其れが却つて一同の喜ぶ處であつた。如何となれば人數が多いと花合せが出来ないからである。非常な熱心を有つて節子は花合せを研究した。すると或夜芦澤夫人は二人の婦人を伴つて來た、一人は官吏の夫人で一人は代議士の夫人である。二人は花合せの名人だといふ紹介であつた。

そんな事で栗津の家は毎晩賑はつた。或夜節子は人々が雑談に耽つてゐるのを餘念なく聞いて居た。曇り日の少し蒸す様な天気なので窓を一つだけ開いて居た。節子は疲れて人々の團欒から離れて頭を冷まして居た。芦澤夫人は某外交官夫人の姦通事件に就いて例の曲折高低のない調子で喋舌つて居た。人々はわあ／＼笑つたり合槌を打つたりして居る、此の騒々しい雑音の間々に蛙の聲が聞える、蛙は只一匹である、長く／＼續けたかと思ふと、ハタと止まる、止まつて又續ける、さらさらと竝木が風に動く。庭は眞暗である。節子は窓に寄り添うて暗を覗いた、三日月は曇つて見えないが草の微明が仄かに漾うて居る。

「カツ／＼／＼」と蛙が舌を鳴らす。室内でどつと笑聲が起る、芦澤夫人の話が佳境に入りつゝあるのだ。右外交官夫人は良人が藝者を伴れて箱根へ行つた事を知つた。其れを報告したのは馬丁である、そこで夫人は馬丁と共に良人を探索すべく箱根へ行つた、さうして宿屋に着いた、二人はこつそり忍んで室々を探した、すると良人が果して藝者と二人で灯のない縁側で喃々と語つて居るを見た。夫人は赫として其の場へ踏込まうと思つたが、此の刹那に彼女は思ひ返した、さうして馬丁と二人で良人の隣室に泊つた、これが所謂魔が射したのであらう。

人々は其れに就いて批評し合つた、婦人記者は此の夫人の墮落の徑路は同情が出来ると言つた、其れに對して芦澤夫人は毫末も同情が出来ないと言ふ。議論に花が咲いた。

蛙は矢張り鳴いて居る。

「カツ／＼／＼」

其の次にはころ／＼／＼と舌を轉がす、さうして響てさあ／＼と雨の如く柔かに靜かに長い音律を續ける。其れはいかにも靜かである、暗い處から窓の灯を見て鳴いてるのであらうか、但しは獨り暗さを楽しんで我が聲に聞惚れてるのだらうか。

明るい灯の下で戀の夜語をする雑音と、暗い草の露に咽んで孤獨を奏つる蛙の聲とが、一高一低に斷續して節子の耳に響く。

「詰らない。こんな事をしてどうなるんだらう」

節子は次第々々に蛙の方へ氣を取られた、さうしてしみ／＼と孤獨を味はつた。

喋舌り疲れた芦澤夫人は黙つた、人々は暇を告げた。節子は人々を玄關に見送つてから大急ぎで帯を解き、寢床へ入つた。其處からも矢張り蛙の聲が聞えた。

「お前どつか加減が悪いのか」

篤彌も大急ぎで節子の枕元へやつて來た。

「えい、何だか……」

「風邪を引いたんだらう」

篤彌は節子の額に手を當てた、さうして顔を低れて接吻した。

「今日の話は面白かつたね」と篤彌はもち／＼と寢床にもぐり込んだ。

「さう？？」

「聞いてなかつたのか、外交官夫人の姦通の話さ」

「姦通の？」

「うむ」

節子は良人の方へ背後を向ける様に寐返りした。途端に彼女は恚う思った。

「姦通をしようかしら」

其れは今まで夢にも思はなかつた事である。彼女は何の聯絡からこんな事を考へたのか無闇自身で考へる暇もない。

「姦通でもしたら此の人は私を離縁するだらう、それより外には別れる方法がない」

凝と其れを考へる。

「節さん」と良人が呼ぶ。節子は答へなかつた、良人の大きな欠伸が聞えた。

外では依然として蛙が暗に鳴いて居る。

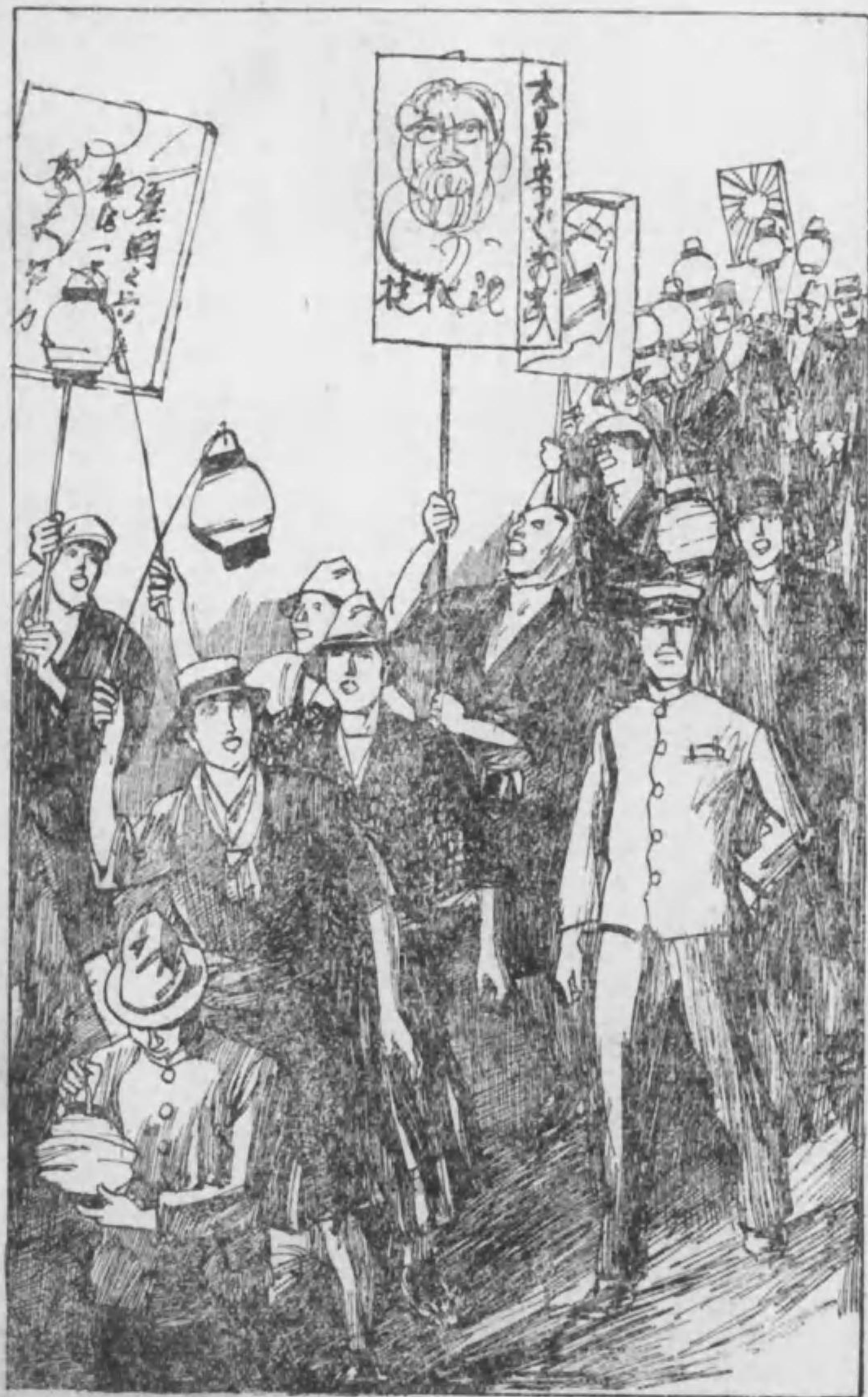
賣 市

明治三十八年五月二十七日。東郷大將の帥る帝國艦隊は日本海に於て露國のバルチック艦隊三十八隻を撃沈若くは捕獲し、提督ロヂエストウエンスキー以下を捕虜にした。此の前代未聞の大戦捷の報道が熱狂せる號外屋の手から戸毎に配付された時、日本全國は歡喜の極に達した。最初號外を讀んだ人は何れもこれは新聞社の法螺だらうと思つて居た。

「いくら何でも玩具の舟ちやあるめえし、こんな巧く行けるもんか」

皆が恚う言つた、だが愈々其れが本當だと解つた二十八日の夜はもう東京の町は全く氣狂ひじみてしまつた。何十萬といふ提灯は町から町を跳り廻つた。市民は今までの戦勝々々で有りたけの智恵を絞り出して祝意を表したのだから、此の上何もうする事がなくなつた。海戦の當日、伊勢の大廟は異常に震動して何とも言へぬ物凄い音響があつた。日本八百萬の神々が集まつて日本海へ出發したのだと人々が言つた。此の噂に就いては何人も反對するものはなかつた。深川の八名川町に豊さんといふ八百屋があつた。彼の次男は驅逐艦不知火の水兵であつた。豊さんは戦勝を聞いて氣が逆上した。彼は素裸になつて外へ走り出した。さうして「倅は勝つた／＼」と怒鳴りながら踊り廻つた。其の背後に従いて町の人々も同じく怒鳴つた。

「伴が勝つた〜」
 人数が次第に殖えて終りに約千人許の一團が永代橋を渡り日本橋の本通りに差掛つた時には一萬人餘りとなつた。其の中に又二人三人と氣狂ひじみた男が殖えた。群集は新聞社といふ新聞社を訪ね廻つた。其れからあらゆる交番所にも萬歳を浴びせた。巡査は恐しい眞面目な顔をして涙を眼に湛へながら同じく萬歳を唱へた。東京の全市は慙ういふ騒ぎのために手にものが付かなかつた。さうして此の萬歳が少くとも十日位では済みさうになかつた。水天宮の御殿の前に東郷大明神と書いた幟が立つた。すると神田の五十稻荷にも芝の金毘羅前も同じ幟が立つた。
 戦勝の報道が歐洲各國へ着いたのは二十九日であつた。丁度其の日に有栖川宮殿下は伯林に御入京あつた。露國のニコラス二世を教唆して黃禍を説き戰端を開かした獨逸皇帝は親しく停車場に軍隊の禮式を以て迎へられた。さうしてロカールアンツアイゲル新聞やフオツジツシエ・ツアイツング新聞は「露國皇帝が媾和を提議すべき時機が來た」と論じた。
 露佛同盟を以て絶えず露國を援助しつゝ、あつた佛蘭西でもそろ／＼露國に愛想を盡かし初めた。タン新聞は慙う言つた。
 「だから我輩は奉天陥落の時に媾和を勧めたのだが、我輩の言を用ひなかつたからこんな事になつた」



ビュブリック・フランセーズ新聞は、
「陸でも負け海でも負け、一體露國はどうする積だ」と同盟國を冷かした。
最も面白いのは、ユーマニター新聞である。

「日本の様に人道を重んずる國が勝つたから可い様なもの、若し反對に露國が勝つたら其れこそ大變だ、人道がめちやく／＼に破壊されるだらう」

ブチ・シビブリック紙の筆はもつと烈しい。

「弱虫の辭に強がり云つて兵士をむざ／＼と殺してばかり居る露國の如き犯罪者は監獄へ抛り込んでやらなきやならん」

クレマンソー氏でさへも流石に露國の愚を責めて「親友は私の言を肯かなかつた。此の慘憺たる悲劇を何れの日に終了する積だらう」と言つた。

日本に快からざる獨佛でさへも此の通りである、同盟國たる英國の如きは殆ど日本に劣らざる歡喜を以て日本を激賞した。

「露國が此の上にも負け惜みを言つて居ると、内亂が足下から起つて東洋ばかりでなく歐洲に於ても地位を失ふだらう」(タイムス)

「負ける度毎に惡魔の様な氣を起して復讐々々と焦る暴君は埃及王ばかりでない様だ」(スタンダ

ード)

「露國は今や平和締結などと言ふ資格がない、只降伏の二字があるのみだ」(デーリーメール)

「此の際列國會議を起して日本戰勝利益を妨害しようなどいふものがあつても、英國は斷じて其れに應じては不可ない、英國は何處までも日英同盟を確守して日本に抗敵する何れの國をも相手に戦ふだけの準備が必要だ」(モーニングポスト)

米國はどうかといふに、

「露國の敗戦は文明の凱旋である。迷信と殘虐の鐵壁が破壊されたのだ、人類の自由進歩の路が開かれたのだ」(紐育サン)

「矮小のダヴキッドは巨大のゴライアスに勝つた、文明は野蠻に勝つた」(華盛頓タイムス)

世界各國の日本に對する賞讃の聲は毎日々々日本の諸新聞に掲載された。

「浦鹽へ！ 浦鹽へ！」

陸軍では奉天を完全に占領し海軍ではバルチック艦隊を全滅した。國民の意氣は果しもなく上進した。

「どうでせうか、暑い中にモスコウを取りたいものですか」

町々の人は恚う語り合つた。一勝毎に慾望が増して最早モスコウも聖彼得堡も占領した積で

居る。祝勝會が又々続いた。此の矢先に早くも米國から媾和勸告が來たと噂するものがある。人は其れを一笑に附した。

『モスコを取らない中は媾和なんて以ての外だ』

若し日本の全歴史を通じて、日本人が最も得意であつた時代はと問は、何人も、日本海を戦後一ボウツマス媾和締結までの三ヶ月間であると答へるであらう。

小柴敬三は頃日の祝勝酒にすつかり胃を痛めてしまつた。今日から禁酒だ、恙う母に言つてから矢張り實行が出来なかつた。其れは晴れ渡つた初夏の朝であつた。敬三は例になく早起をした。母は漸く眼覺めて女中を起して居る處であつた。敬三は自身で雨戸を開けて座敷へ風を通し其れから庭の井戸端で顔を洗つた。十時前の朝日を見た事のない彼には初夏の爽々しい朝風は堪らなく快かつた。夜は明け放れて庭の草も木も一ばいに胸を張つて健かな空気を呼吸してゐるかの如く見えた。彼は朝飯も食はずに自轉車に乗つた。

町は半ば眠り半ば目覺めて居た。軒並の提灯は昨夜のまゝである、道路には例の提灯行列が過ぎた跡の紙屑や草履片足や、その他多人數が捨て去つた様な埃が散らばつて居た、ほち／＼店々の小僧が出て水を打つたり、掃いたりし初めた。

のつとした朝日が今町を豎に半分ほど顔を出した。屋根々々は急に赫突と輝いた、ちら／＼と國

旗が見え出した、納豆賣が行く、豆腐屋が行く、町は活動し初めた。敬三は嬉しくて堪らなかつた。彼は淨かな道を自轉車で行く中に宿醉の胃囊はしつかりと落着いて胸に洞穴が出來た様に思つた。

『朝の氣分は快いものだ』

彼は恙う獨りで言つた。飯田橋へ差し掛ると砲兵工廠の大きな煙突が眞赤な朝日を負うて恐しい黒い煙を中天に吐いて居るのを見た、風は東北の微風であつた。黒い腸の様な煙が、むら／＼と簇り出ると其れが朝日に熔けて輪廓だけが鼠色になり銀色になり紫色になり、聽て上方の稀薄な部分だけが黄金色の亂箭に碎けて霧の様に擴がる、と其の小さな破片が綿を薄めた様に白い雲となつてパツ／＼と飛んで行く。

『なるほど、徹夜なんだ』

敬三は今まで砲兵工廠が徹夜で仕事を續けて居るのだと知らなかつた。戦争開始のすつと前からあの煙突の煙は絶えた事がないのだ、あれが絶える時は平和克復なんだ、だが平和なんか克復しない方が可い、やるだけやるんだ、徹底的にやるんだ。彼は恙う思つて自轉車を緩めながら再び煙突を見上げた。赤い煉瓦を繞らした方五六町許りの宏大な一席の中に起伏する工場の屋根、朝日は最早一番低い窓の處まで射し込んだ。

不圖氣が付くと彼は例のお夏の駄菓子屋の前に來て居た。

「やあ、どうして此處へ来たんだらう」

「憊う獨りで言つたが、實のところ彼は其れを意識して居たのであつた、彼は度々の訪問でお夏の一家とすつかり懇意になつてしまつた。此の哀れな出征軍人の家族を慰めてやるのは自分の義務だと思つた、さうして多くの慰問者の中でも、自分こそは最も家族を喜ばすものだといふ自惚もあつた。」

「彼は今お夏の姿を見て自轉車から降りた、お夏は早くも遠くから敬三を見て少し慌て出したのである、彼女は短い紺飛白の單衣の寢巻を着たまゝ、竹箒を以て店の前を掃いて居たのである。」

「お早う」と敬三は元氣好く聲を掛けた、實を言ふとお夏が夜業か但しは早勤めかで留守ではなからうかと危んで居たのだ。がお夏を見ると急に胸が浮きくして來た。

「お早うございます」

「お夏は丁寧な御辭儀したが、自分が細紐一つで居るのに氣が付き、きまり悪さうに笑つた。」

「今起きたの？」

「えい」

「御母さんは？」

「御飯を焚いて居ます」

「お夏ちゃん今日は休み？」

「い、え、これから緩り行くんです、昨夜は晩歸りだつたから」

「眠くない？」

「眠かないわ、随分眠たんですもの、貴方は御早いのね」

「僕はいつもこんなに早いよ、大抵五時頃にはちやんと起きるんだ」

「お夏はくすくすと笑つた。」

「知つてるわ私！」

「何を？」

「知つてるわ、私知つてるわ」

「お夏の笑は賑やかに破裂した、さうして慌たゞしく家へ駆け込んだ。下駄は閨の内外に飛んだ。」

「御母さん、小柴さんがいらつしたわ」

「母親は両手を前掛に拭きく出て來た。」

「少尉になつたんですね」と敬三は言つた。

「はい、御蔭様で、あの子はまあ、少尉にね」

「母は毎日町の人々に祝辭を受けて同じ言葉を聞き同じ言葉を返すのであるが、其の度に倦きもせ

で同じ涙がほろ／＼零れるのであつた。彼女は一昨日小石川の區長様が御自身でやつて来て工藤三吉殿は少尉になられた、これは小石川全區民の名譽だと言つて大きな菓子折を下すつたと語つた。さうしてどうぞ其の御菓子一つ食べてくれと言つた。敬三は奥の室へ上つて三吉の寫眞に敬禮した、寫眞は何時の間にか小さな額に入れられて、其の前に大きな菓子折が供へてあつた。

工藤三吉！此の亂暴者の勇敢な逸話は毎も新聞紙を賑はした。遠くの／＼北海道や九州邊から態々見舞品を贈つて家族を勵ましてくれる人もある、特に嬉しいのはお夏が兄の御蔭で役所の氣受けが好くなり、今では女工の組長になつた事である。

「其れから又」と老母は話を進めた。「俸のところへ手紙をやりましたら、返事が参りまして貴方には御目にかゝりませんけれども、淺見副官には大變に御最負になつて……全く筆に書けない程御最負になつて……其れが又ね、淺見様と貴方とは御兄弟の様な仲だから不思議なものだつてね、貴方の事を淺見様に申上げたら大變に御喜びになつたさうでございますよ」

老母はあらゆる事を一度に話さうとするので、順序が混亂し淺見と三吉と敬三とお夏と自分との主客の區別が付かなくなり其の上に涙が交るのだから堪らない、でお夏が一々母の話を訂正したり補修したりした。

「安心して死ぬると、慫う申しましてね」と母が言つた。

「其れぢや解らないわ」とお夏は例のはき／＼した調子で言つた、彼女は新しい紺飛白にメリンスの帯を締め、髪を撫で付け、顔はいかにも清らかに洗つて來たのであつた。

「淺見の殿様が仰有るにはね、小柴君がさういふ風に君の家族と親しくして居るなら實に願つてもない幸だ、小柴君に頼めば君は何にも心配する事はないから安心して死ぬ、小柴は僕よりも親切な男だからと慫う仰有つたさうでございますよ」

「無論です、僕は貴方方の御用ならどんな事でも厭ひませんから遠慮なく言つて下さい、ところで貴方方は御飯を食べて下さい、僕は手紙を書いてお夏ちゃんのと一緒に同封で戦地へ送りませう、ねえお夏ちゃん、君も書くんだぞ」

「いやだわ私」とお夏は顔を染めた。

「いやだつて書かなきや不可ないよ」

「だつて」

「何がだつてだ」

「だつて……」

「何でも可いから書かなきや不可ない、軍國婦人の義務だよ」

「だつて……」

「兎に角御飯を食へ給へ、其れからだつてくの百萬遍をやり給へ」
 敬三は手紙を書き終りお夏には署名だけをさせた、最早出勤の時刻である、敬三とお夏は一緒に家を出た。お夏は兄が少尉に昇進したのは嬉しいけれども、今までの戦績に依ると一番多く死ぬのは少尉と中尉だから其れだけに却つて心配が殖えたと言つて、
 「御母さんには言へないのよ、御母さんはね、位が上げれば危い處へ行かないものだと思つて居るんですもの」と附加へた。

「併しもう休戦になるから大丈夫ですよ」

敬三は恚う言つた。

「でも私はさう思ひませんわ、役所はまだく人を増して仕事が増がしくなるんですもの、戦争は長曳くと思ひますわ、皆がね、さう言つてますよ、あの煙突の煙が無くならない中は戦争が續くんだつて。そしてね、戦争が止むと仕事が無くなるから、いつまでも續いてくれ、ば可いつて……だけれど、仕事が無くなつても戦争は止めた方が可いわ」

二人は西の入口で別れた。敬三は門の外に立つてお夏が入つて行くのを見成つて居た、お夏は門鑑を門衛に見せた、さうして嬌然して敬三の方を振返つた。他の女工達は幾十幾百となくぞろぞろ續いた。瘦足らぬ顔もあれば奇麗に朝化粧したのもある、嫁入盛ではあるが貧乏のために嫁けない

様なのもあれば、五歳許の子供を連れて未亡人らしいのもある、疲れきつて人生のどん底に喘ぎ喘ぎながら猶生きて行きたい爲めに働かねばならぬ老婦人もあれば、少しでも家計を助けたいため働きに出る十二三の小娘もある。此等の間に混つてお夏は二度三度敬三を振返つた、廣い構内の路は砂利を敷き詰めて居る、砂利には朝日が輝いて居る。大きな建物の影はお夏の肩を斜に暗くした、肩から上は一ばいに朝日が射して彼女の顔は他の凡ての女よりも美しく見えた、彼女の姿が遠くなればなる程二つのばつちりとした眼が益々はつきりと黒くなる様に思つた、もう曲り角であるらしい、お夏は一才立留つた、さうして此方に向いたらしいが此の時續々と門を入る女工の群に遮られてしまつた。群は途中で両方へ分れた。お夏の姿が全身のま、浮き出した。彼女はきちんと立つて居た。其の眼は何事かを語る様、敬三の胸は怪しく亂れた。お夏は静かに腰を曲めて御辭儀した。敬三は自轉車に片手を掛けたま、口をあんぐりと開いて伸び上つて見やつて居た。

「こらッ」

突然大きな聲が聞える。敬三はハツとした。彼はさつと顔を根らめた、が彼は此の時門衛が一人の男の胸元を捕へたのを見た。

「×××面會です」と男は言つた、彼は瘦せてひよろ長かつた、さうして口元の髭には見覚えがある。

『就業中は一切面會がならん』と門衛が言つた。

『未だ就業前です』と髭が言つた。

『ならんといふに解らんか』

『面會が出来ないなら其れで可いんだ、なぜ僕の胸倉を掴んで小突き廻すのだ、親切に教へてくれれば溫和しく歸るんだ、役所風を吹かすな』

『貴様は拘留されたのか』

『いやに嚇かしやがるな』

髭は蒼白な顔をしてにやりと笑つた。さうしてすたくと去つた。

もうお夏の姿は見えない、敬三は其處を去つた。彼は工廠の正門に差掛つた時、川の向ふの低い土堤の上に彼の髭が突立つて居るのを見た、其處には假橋が架けられ、線路が敷かれて、構内からトロッコ車で運び出す貨物が岸に山の如く積まれてある。其の下から人夫が蟻の如く集まつて舟に積込む、橋の上をがうく／＼車が通る、雜然たる騷擾の中を彼の男は平氣で眺めて居る。

敬三は水道橋を渡つた時に又してもお夏の姿を思ひ浮べた、構内の建物を背景にして淋しさうに立つた姿、二つの黒い眼、それがどうして恚う自分の胸を騒がすのかは自分で解らない。只彼は自分に依つて慰められ、自分に依つて喜びを感じて居る、彼女等母子と自分とは離れがたない運命に

ある事を直覺した。

『俺の嫌にしても可いな』

偶然恚う思つた。元來彼は妻に就いて深く考へた事はなかつた、他人の事はいろ／＼と氣を揉むが彼自身は今急に妻を迎へようとも思はず、其の必要も感じない、時期が至れば誰かゞ世話をしてくれるだらう、此の位に思つて居た。其れは只今の月給では妻を迎へても困るといふ理由もあり又若い時に苦勞をした一人の母の晩年を楽しく送らせるには女房などが無い方が可いといふ理由もあった、それやこれやで彼はいろ／＼な藝者に關係を有つたもの、妻にしようなどと思つた事はなかつた。

自轉車は竹橋の邊を快く走る。

『戦争は』と彼は考へた。『個人を犠牲にする、其れは事實だ、だが犠牲があればこそ正義が保存されるのだ、これも事實だ』

彼は大きな問題が眼前に立塞がつた様に思つた。

『出征者の家族！ 其れに對して國家はどんな保護をして居るか、母と妹が駄菓子賣り女工にならなければならぬといふのは……さうして一方に息子を戦場に送り一方に自分の生計に勞す、これでは逆も……』

極めて断片的な考が出没して居る中に彼は社へ着いた。編輯局では社長と武藤白山より以外に誰も居なかつた、二人は額を突合して協議して居た。

『お早う』と敬三は言った。

『早いね、昨夜何處かへ沈没したと見えるね』と白山が言った。

『君ぢやあるまいし』と敬三は笑つた。

『さうだ、今日は何處も負傷してない處を見ると昨夜は無事で帰宅したと見える』と社長石阪倉平は言った。さうして敬三の書いた論説が非常に可かつたと褒めた。元來石阪社長の癖として無暗に社員を褒めあける、さういふ時には必ず何か胸に陰謀を藏して居るのであつた。

『ところでね、今武藤君と話して居る處だが、高峰が何か計畫をして居る様だね』

『高峰の事だからやつて居るでせう、身に覚えのない露探の冤罪を受けて黙つてる筈がないでせう』

『まあ憤慨するなよ』と社長は笑つて、『だが梅園伯の處へ高峰が頻繁に出入して居る事を君は知るまい』

『知つてます、高峰は伯爵を樞密院から引張り出して現内閣を打倒さうといふのです』

『其れだ、其の政策として？ 其れは？ え？ どうだ、政策は？』

『解つてます、内閣は今休戦説に傾いて居ます、だが國民はモスコイまで行かなきや承知しません、そこで高峰は梅園伯を引張り出して強硬進軍論を看板にして内閣を一蹴しようといふんです』

『其れが成功するかね』

『二十萬の血を流した國民の義憤に逆ふ内閣は倒れるのが當然です、高峰はこれで露探の復讐が出来るでせう』

『さうなると我が社は？』と白山は社長の顔を覗く様にして言った。

『それだよ、軍國多事の秋に際して内閣更迭は宜しくないね、せめて媾和まで持たしたいものだ』

『媾和になると社長は勅選議員になるんですね』

『敬三は大きな聲で笑つた。社長は恐しく難かしい顔をした。が直ぐこれも亦大きな聲で笑つた。』

『そこで君、今日の賣市に行つてくれんか』と白山が言った。

『何があるか』

『梅園伯が行く筈だ、君は伯と懇意だから都合が可い、富塚惣兵衛も行くだらうと思ふ、僕の考では伯の兵站部は富塚だよ、二人を叩いたら屹度面白い音が出る』

『探りを入れて来いといふんだね』と敬三は改まつて言った。

『だが社長、僕は此の件に就いて豫め僕の意志を表明して置きたいと思ひます、聞いて下さいますか』

「聞きませう」

「僕は日本のためにはモスコウでなくともせめて浦鹽を占領してから媾和したいと思ひます、如何となれば露國はあれだけ負けても本當に負けたのでないと言つてます、日本兵が露國の領域に足を踏み入れない以上は敗軍とは言へないと言つて居ます、だから今日の媾和は不利益です、僕は強硬主義です、若し現内閣が休戦主義なら僕は現内閣を打壊します、其れが至當である以上は、高峰や梅園伯の計畫に對して我が社は全力を擧げて聲援したいと思ひます」

「併し高峰が頭を擡げ出すと、我が社はどうなるか」と白山は忠義顔に言つた。

「高峰の主張が日本の國是に合つてゐるなら我が社の事は第二の問題だよ、高峰の明治新報と我が東洋新聞と合同するが可い、社の利害に依つて國を誤まらうとするは……」

「解つたく、君には兎を脱ぐよ」と白山は手を額の處へ上げて拜む眞似をした。

敬三は空腹を感じた、蕎麥を二つ食べて社を出たのは十一時頃であつた。賣市は上野の精養軒である。元來今日の賣市は華族會館で開く積であつたが、其れでは狭過ぎるといふ議論が出て上野に変更した。實際昨年从今年に掛けて恤兵部寄附の運動に就いては上流中流の婦人達は驚くべき巧妙に達した、其の上には海軍の大勝利は疾風の如く満部の人氣を煽り上げた。

「露國は日本の疲勞を侮つて居る、此の際國民は一致して前回よりもより多くの醵金をなし日本は

なか／＼餘裕がある事を露國に示さねばならぬ」

此の宣傳は最も人氣に投じた、華族や富豪の令夫人令嬢が一人も残らず品物を賣つたり御茶の給仕をしたりする事に決した、新柳二橋は無論あらゆる花柳社會でも藝者が飲食店を開く事にしたが藝者を令嬢達と一緒にする事は不可ないといふので、此の一隊だけは當日御客になつて買物に出掛ける事になつたといふ噂も傳はつた。

敬三は上野廣小路に差しか、つた時沿道の兩側は人の山を築いて居た、彼等は行儀好く並列したま、未だ列を崩さなかつた、人々の顔には喜びと敬虔な色が漂うて居た。

「御瘦せ遊ばしましたね」

「さうです、御心配が多くていらつしやいますからね」

「さうく、私達のために御心配遊ばすんです、其れでもまあ、御にこやかに私達の方を御覽下さ

いましてね」

「私は御顔を拜む事が出来ませんでした、もう涙が一ぱいになりました、どうしても、はつきりとは拜めませんでしたよ、惜しい事を致しました」

〇〇殿下の御通御があつたのだと敬三は初めて知つた、沿道の兩側に立つた棒杭は開戦當時から提灯を吊りに立てたもので、其れは一年餘りの風雨に黒すんで居た、提灯も矢張り黒すんで居る、

國旗も黒ずんで居る。戦勝々々大勝利、毎日々々の吉報に旗や提灯を引込める事は出来なかつた。幾千幾萬となき人民は御還りに今一度拜みたいといふ慾望のために其の儘散りもせず立つて居る。中には七十許の老翁と老妻は五人の孫を伴つて庭の上に坐り馬車が通る度に御辭儀をして居た、人は笑ひながらも何人も其れを輕蔑する者はなかつた。敬三はほろ／＼と涙がこぼれた。

「日本人はえらい」

彼は自轉車を曳き／＼會場へ上つた。精養軒の前、櫻若葉の下に大きな捨石が二つ三つある、此の石は彰義隊の戦で有名になつた、黒門の礎を此處へ引いて來たのだとも言ひ、又御寺の跡だとも言ふ。だが此の石は能く散步の人の腰掛になり、又基督教徒の演壇にもなつた。

其の石の上に立つて大きな聲を出して演説してゐるものがある、櫻の木に紙札を長く垂れてある。

「戦禍を呪ふ」

其れは演題である。

「あ、先刻の男だ」と敬三は思つた途端……彼は昨年大六天の蕎麥屋で格闘した非戦論者の「髭」は此の男であると思ひ出した。

「此奴、群集を煽動して戦争を呪はせ國民の元氣を銷沈させようとしてゐるのだ、撲つてやらう」

敬三は自轉車を茶店へ預けて群集の中に入つた。髭は今露西亞と日本の負傷者の數を列挙しつゝ、

あつた。

「馬鹿野郎！」と敬三は叫んだ。と此の時今一つの石の上に立つたものがある、其れは印絆天を着た職人風の男である。

「何を吐かしやがる、手前の様な奴は露西亞へ行くが可いんだ、日本の飯を食ひやがつて日本のためにならねえ事を吐かしやがつて、べらんめえ」

彼は顔を眞赤にして何か言ひ續けようとしたが文句が詰つたので、矢鱈にべらんめえ／＼と繰返した。

「やつちまへ／＼」と群集は叫んだ。巡查がばら／＼とやつて來た。敬三は其處を去つて會場に入つた。會場は一ぱいの人であつた。文房具店、玩具店、簞や桶を賣る店、手工品や繪畫店、果物屋、菓子屋、雜誌店、あらゆる店は精養軒前の廣場を埋めて、どの店も／＼美しい令嬢や貴婦人が賣子になつて居る、幾度かの賣市で彼女等は全く玄人に近くなつた。

「召していらつしやいませ、御高價のものが自慢でございます」

恙／＼洒落を言つて御客を笑はせ自分も笑つてゐる令嬢もあつた。中には値段が解らなくなつて狼狽してゐる貴婦人もあつた、御客が錢を出すと氣味悪さうに手を引込める初々しいのもあつた。御客の中ではなるべく美しい方の店へ寄る。狡いになると何圓何十何錢と成るべく端錢のある品物を買

つて、御刺錢を取る様にする、御刺錢を貰ふ時、嬌やかな指先が自分の手に觸れるのが堪らなく嬉しいのである。

藝者や賣女は价とも思はないが深窓に育つた姫君達に聲を掛けられて買はずに過ぎるのは露兵よりも卑怯だと男共は言ひ合つた。敬三は梅園伯を探して一品も買はずに二度ほど會場を過ぎた、すると漸く會場が精養軒にもあるのだと解つた、精養軒の入口には墨痕淋漓と看板が掛けられてあつた。

日英同盟軒!

此の大字の下に小さく「春山」と署名してある、春山は梅園伯の雅號である。此の看板は非常な人氣を惹いた。人々はその前に集まつてがや／＼批評し合つた。

『日本第一の政治家も令嬢達に攻められて看板書になつた』と誰か言つた。
敬三は中へ入ると先づ黄色な聲が一度に轟いた。

『いらつしやいまし』

矢絣に立てやの字、文金高嶋田の令嬢達はぞろ／＼と八方から寄つて来る。敬三は頗る狼狽しながら漸と一つの卓子に着いた。彼はウキスキー一杯を注文した。椅子の大部分は塞がつて居た。彼の背後に坐つて居たのは若い辯護士風の男が二人であつた。彼等は盛んに強硬進軍論を語り合つて

居た。さうして梅園伯はこれに依つて内閣を乗取るだらうと言つた。突然入口と場内は氣色ばんだ。

『やあ梅園伯だ』

いかにも中肉中丈の伯爵は頰髯を片手にしごきながらフロックコートの服装で入つて来た、人々は皆目禮した。伯は上機嫌であつた。

『皆美しいんで眼が廻る様だのう』と彼は言つた。

『小父さま、何を召上る』と一人の立やの字が言つた。

『なに小父さままだつて？ はッ／＼／＼これは敵はん、私は給仕女を姪に有たんよ』と伯爵は言つた。令嬢達は皆腹を抱へて笑つた。

『私の卓子へいらつしやいまし』

『私のよ小父さま』

『私のよ小父さま、よう小父さま』

鼻聲になつたり、袖を振つて押へたりする。

『待て／＼／＼小父さんは恨みつこのない様に皆から一ぱいづつブランドーを買はう』
『怒言つた時人々は又騒いだ。』

「富塚だ」

惣兵衛の瘦せた顔、例の鷲の様な鼻、一文字に結んだ唇、小柄ではあるが精悍な氣宇が溢れて居る、彼も亦喜色満面の體であつた。彼は今度の海戦で五百萬圓を相場で儲けた。海軍の衝突は遠からずある事を見越した彼は力のありたけを盡して株の買方に廻つた、乾坤一擲！ 若し日本に利がなければ諸株は微塵に暴落するのだ。

「日本は決して負けない」

此の確信から彼は全財力を投じた、果然！ 未曾有の大勝利、五百萬圓は懐に飛び込んだ、だが彼は第二の計畫を立てねばならなかつた。此の場合どうしても知らねばならぬのは進軍か休戦かにある。

進軍とすれば株は居据り、或は低落に向ふかも知れぬ、休戦とすれば莫大な償金を見越して諸株が暴騰する、何れでも構はない、相場師は變動を喜ぶのである、變動の機先を制すれば勝ち、後れば敗る、此の機微な消息を誰が知らう、知つてるのは梅園伯である。彼が梅園伯に呢近するのは其のためであつた、日本海々戦の公報が發表される前に彼は伯爵邸で食事を共にして居た、すると電話が掛つて來た。

「御上御電話でございます」

「何處からだ」

「御電話でございます、御書齋の方へ」と執事が言つた。彼は何處からに就いては答へなかつた、伯爵は首肯いた、さうして座敷を去つたが、直ぐ又入つて來た。

「シヤンパンを持つて來い」と伯爵は言つた、さうして波々と酌がせて嗜み干したま、直ぐ馬車を命じた。

惣兵衛は直感した。

「海軍は大勝利ですね」

伯爵は答へずに莞爾と笑つたま、席を立つた、惣兵衛は直ちに取引所へ走つた。

進軍か休戦か。惣兵衛は虎視眈々として伯爵の顔——眉毛一本、例の眼の下の黒子の色までも深く注意して覗いた。

伯爵と惣兵衛が、偶然にも卓子を共にしたといふので満堂の人々は想像のありたけを逞うした。

「いよく伯爵が政黨へ逆戻りか」

惣兵衛は進軍黨の尻押しをして一と儲するのか、但しは進軍と見せかけて實は休戦の準備なのか

凡ての視線は二人に集まつた。二人は五六杯のウキスキーを飲んで直ぐ席を立つた。敬三も席を

起つた、室を出て廊下である、廊下の向ふで二人の姿が消えた、敬三は追跡した、突當つて左の方、
其れから又左の方！ 突然其處の室で異様なものを見た。

爆 發

精養軒の廊下で消えた梅園伯と富塚惣兵衛は何處へ行つたか皆目解らない、迷宮の如く右へ延び
左へ開けた小廊中廊は鈍色の光線の下に奥深くく續いて居る、此の長い廊下の途中は三段ばかり
の階段に中絶して左右に庭の新緑を見る處がある、向ふは新館、此方は舊館とでも言ふのだらう、
右は東照宮の境内を望み松杉の影が冷やかに壓して居る、左は不忍池畔の方へ開いて青いく天は
數十竿の竹林の上に覗いて居る。敬三は伯爵と惣兵衛は確かに新館の階段を経て何番目かの室に入
つたと思つた、が扱其れは何番目かは解らない、一と通り廊下を真直に抜けて再び立戻り、階段の
下に出て庭を隔て、相向ふ幾つかの窓を見やつたり、何處となく奥深く聞ゆる扉の音を聞き澄まし
たりした。彼は普佛戦争の當時、兩國講和會議の秘密を探るべく倫敦タイムズ記者が非常な辣腕を
振つた事を想ひ出した。其れはホテルの廊下に掛けたビスマークの帽子の中に秘め置いた黄色な紙
の講和條件覺書を盗み取り非常な迅速さを以て謄寫したのである、此の秘密が發表されるや獨逸は
回復する事の出来ない打撃を受け、講和談判に大挫折を來した。

其れは外國新聞記者の悪辣な手段であるが、今日日本は戦争を繼續すべきか中止して講和期に入る
べきや、寔に東と西の分水嶺上に立つて居る。日本として最も重大な時であり、新聞記者としてこ
れを知る事は最も急務なのである。

進軍か？ 講和か？

其れを決するには大本營會議がある、内閣會議がある、樞密院會議がある、だが其等一切の機關
を動かすべく最も力あるものは梅園伯である。今日日本の死活を一身に負うて居る伯爵と日本の死活
問題に乗じて何億かの私利を博さうと牛蠡の如く伯爵に隨いて離れない實業家！ 此の不思議な伴
侶が何處に隠れて何を語りつゝあるか。機微は此の間に存する。

「若し伯爵が講和説を懐いて居るとすれば其れは實に怪しからん事だ、今や我が國は陸に海に連戦
連勝だ、此の際東洋永遠の平和の基礎を築くには敵の首都まで進軍せねばならぬ、豈夫それを知ら
ない伯爵ではあるまい、併し元來が親露主義の伯爵である、軟弱外交を以て終始した伯爵である、
どんな軟説を唱へるかも知れぬ、若しさうであつたら黙つて居る事は出来ない、斷じて許す事は出
來ない、國を誤るものは糾弾せねばならぬ。糾弾！ 糾弾ばかりでは手緩い、來島恒喜は大隈伯
を……」

敬三の若い血が躍つた。彼は自分ながら此の揣摩想像は常軌を逸したものであると氣が付きなが

ら、而も一旦熱した慷慨の氣はなか／＼に冷めきらなかつた。

『生命に代へても軟弱黨は打破しなきやならん』

心の底に重たい錘がどつきりと落着いた。

『だが』と彼は又考へ直した。『富塚の奴は實に不都合な奴だ、今日日本國民は臥薪嘗膽祖國の一大事に精進潔齋して居るのだ、其れに彼は相場の事ばかりを考へて居る、あんな奴は無論懲らしめなきやならん、一體梅園伯は何のために惣兵衛の様な奴を近付けるのだらう』

極めて不快な雲がむら／＼と起つた。

『軍國の機密を漏らして惣兵衛に金儲けをさせ、政黨組織の資金を調達せしめるのではなからうか』

偶然の考へは稻妻の如く敬三の胸を射た。

『さうだ、其れに違ひない、政黨者流は國家よりも政黨を尊重する。……併し梅園伯は元來金錢には淡泊である、彼の周圍の者は虎の威を藉りて不正の富をなして居るが彼だけは清貧である、彼は色を好み酒を好み權勢を好み名譽を好むが、彼は黄金を好まない、それだけは彼の美點である、まさか惣兵衛に相場をさせて金を儲ける様な事はしまい、……だが政黨は……』

階段を昇りつ降りつ敬三は次第に苛立たしい氣持を感じた。と此の時彼は娑婆と動く竹の葉蔭を漏る、窓の窓帷が微かに動いたのを見た。其れは中庭に臨んだ第二の窓である。緑の窓帷を絞つて三分ほどの隙間に廂髪が耳の上に歪んだ三十餘りの蕩長けた女の顔、水色の袴袴の襟が崩れて肉付の豊かな胸が露れ、窈と竹吹く風に襟の汗を乾かして居る。

『やあ女優の望月浪路だ』

恙う思ふ途端に浪路の頭の上に若い男の顔が現れた。美しい漆の様な髪は白い額の上で渦を巻いて、大きな眼、女の様に小さな紅い唇、さうしてワイシャツ一枚を着けた喉の處に眞珠の釦がきらきらと輝く、女に比べて男は十歳も若い。其れは例の落胤と稱する青年瓜生實であつた。二人は何やら囁いた、さうして笑つた、女は下から兩腕を伸ばして男の首筋に絡んだ。さうして其の若々しい頬の邊に接吻を亂射した。

『彼奴は亭主があるのに怪しからん奴だ』と敬三は思つた、が彼は此の時第二の驚きに接した。丁度其の隣の第一の窓、其處にも一人の女の顔が見えた。彼女は今無遠慮に窓を開いた、四十餘りの脂肪ぎつた身體に纏うた薄絹一枚のシユミーズ、皮膚の色は櫻色に若やいで居る、敬三は其の顔を竹の間から覗いた。其れは上原雅子である。

『やあ、大變な奴が來てゐる、上原女史は何のために來てゐるんだらう』

恙う思ふ間もない、女史は確かに隣室のものを音を聞いた。彼は窓の格子に顔を嵌めて一層詳らかに

に隣室の模様を探らうとするかの如く見えた。

「さうだ、隣室に居るのは瓜生だ、瓜生は女史の情人だ、氣を揉むのも無理がない」

敬三はもう天下國家の事を忘れて此の不思議な現象に心を惹かれてしまった。

「面白くない」

隣室では浪路が故意と聲を大きくして笑つたり饒舌つたり瓜生の頸を抱いたりする、其れは恰ら自分の勝利を誇るかの様。

其の度毎に隣の上原女史は肩と胸と露な下衣一枚の姿で動物園の熊の様に窓の鐵棒に攫まつたり顔を出さうとしたり、心も空に焦り出す。丁度其れは隣室に居るのは瓜生實其の人であるか否かを半ば疑ひ半ば信ずるかの様！ さうして若し其の人であると解れば直ぐに隣へ躍り込んでやらうと考へて居るかの様！ 彼女の眼は嫉妬に稜立ち額に汗が沸き呼吸が苦しくなつた。彼は窓へ來ては引込み、又窓に飛付く。緑の窓帷は其の白い腕に反射して顔は青さめて見える、彼女は窓帷に垂れた太い絹の房の付いた紐を腕に巻いて顫へた。

「可愛さうだ、上原は教育家だ、浪路は女優だ、身分のある者と身分のない者と争闘する場合には身分のない者が必ず勝つものだ」

敬三はこんな事を考へて居ると突然一人の男がのそりと雅子の背後に現れた。其れは髮の毛を長

く肩まで垂れた五十恰好の男である。眉が太く唇が厚く身丈は高い。

「幡ヶ谷の行者だ」と敬三は思つた。行者は雅子の肩を靜かに叩いた、さうして笑つた。雅子はさつと顔を染めた、同時に行者の腕に凭れた。

「醜態！ 百鬼夜行！」と敬三は口の中で叫んだ。

女學校を創立せんとしつゝある教育家と、良人のある女優が一人の若き男を争うて居る、其の一方に教育家は今多くの心靈を掌りつゝある自稱豫言者と密會して汚れた享樂に耽りつゝある。此の數塊の腐肉團が毒氣漲る息吹の底に、糜爛した淫慾の渦の中に身を任せて居る此の大きな建物の同じ屋根の下に實業家と稱する賭博師は元老の鼻息を窺つて居る、而も雅子も浪路も同じく元老の情婦なのである。

醜き妖魔等に互に怪しげな縁の綱を曳き合ひ、室を別にして同じ盤上に踊つて居る。黄金と獸慾の交響樂がドス黒く顛へて居る。夏の眞晝の強烈な光のどん底に紫色の影が狂ひ廻つて居る。

怪物の巢の五十歩彼方には恤兵密附の賣市が今開である。報國、慈善、義俠、忠節、若い姫君達は聲を哽らして紙一枚、燐寸一箱でも多くを賣つて兵士を慰む料にしようといふと汗を掻き叫んで居る。青い天に白い雲が飛んで、日本の國旗が正義と人道の光に輝いて居る、其の線門を潜る幾千幾萬の尊卑貴賤の男女が祖國に幸あれ、出征兵士に榮あれと祈りつゝ、財布の底を叩いて居る。

「外は明るい、家は暗い」と敬三は言つた。彼は逃ぐるが如く廊下を出て庭へ下りると、其處の瀟洒な露臺に梅園伯が只一人、支那風の榻に腰を下して人待ち顔にウキスキーを飲んで居る。富塚の姿も見えない、左右に侍る人もない。

「誰かを待つてるのだ」と敬三は思つた。

「浪路か？ 雅子か？」

急に堪らなく滑稽を感じた。彼が待つて居る女共は……一人は若い貴公子と、一人は怪しげな行者と各々一室で酸敗した戀に浸つて居るのだ。其れとも知らず此の偉動赫々たる大政治家が胡麻鹽の髻をしごいて待つて居るのはいかにも馬鹿けて見える。

「女にかけては甘いものだ」

敬三は肚の中で笑ひながら靜かに挨拶した。

「やあ貴公は……」

伯爵は口に當てた洋盃を下に置いて新來の男の何者であるかを見定むるもの、如く眼を据ゑた。元來伯爵は非常に記憶が強い人で、一度でも會つた人は必ず其の顔を記憶して居る、記憶された人は非常に光榮を感じ親みを感じるもので、これは彼が政治家たる資格のある點である。彼は敬三を能く知つて居た。

「どうして來た」

「閣下の後を跟けて來ました」と敬三は大膽に言つた。

「困るな、私は今女を待つてるんだ」と伯爵は笑つて言つた。敬三はにやりとした。

「では御邪魔にならない様に要點だけ伺ひませう、閣下、戦争は繼續ですか」

「わからん」

「媾和ですか」

「わからん」

「閣下の御意見は？」

「わからん」

「併し輿論は繼續にあります」

「さうか」

「噂に依ると兒玉總參謀長は媾和説を唱へたさうですが本當ですか」

「わからん」

「何れにしても此の際閣下の御意見が最も重大なものと思はれて居ます」

「小柴君、どんな軍人にしろ戦争を好むものはあるまい、だがどんな國民にしろ我が國の發展を冀

はないものがあるまい。戦ふも國のためなら和するも國のためだ、新聞紙は輕率な批判を慎んで貰はねばならんよ』

『無論さうです、ですから……』

『まあ飲め』

伯爵は洋盃を探した、卓上には伯爵の洋盃と今一つの洋盃がある。

『頂戴します』と敬三は手近の洋盃を取った。

『其れは不可ん、それは富塚の飲んだ洋盃だ、彼奴の洋盃は銅臭を帯びとらぞ』

『銅臭はアルコールで淨めます』

『うむ、名言ぢや』

伯爵は洋盃になみ／＼と酌いでくれた、唇に葉巻を銜へて居るので煙がゆらく／＼と伯爵の顔に立騰る、伯爵は片眼を閉ぢて口を歪めた。

と此の時突然恐しい大きな音響が起つた、音は建物のあらゆる窓々の硝子を震撼して大地は跳り上る様に揺れた。さうして卓上の壺や洋盃が一度に舞ひ上つた。賣市の會場では百千の叫び聲が起つた。多數のものは木立の間、廊下といふ廊下を走り廻つた。

『何だらう』と伯爵は起ち上つて椅子を離れた。

『地震だ／＼』

聲々が聞えた。夏の烈日は緑の木立に光の亂箭を浴びせて居る。

『地震ではない様です閣下』と敬三は言つた、さうして敏捷にもウキスキーの壺を手握つた。此の一瞬時に敬三は伯爵の泰然とした顔色を見た、伯爵は唇から葉巻を離さずに青天を眺めて居た。

『何だらう』

『何でせう』

此の聲が終らぬ中に再び天地も破れる様な大砲の様な響が起つた。賣市の會場は悲鳴、叫喚、亂雑な音が始まつた。精養軒の室々の客は一度に二階を降りたので中庭に異様な服装の人が溢れた。半裸體の人も少からずあつた、丁度會場の奥で活人畫の催しが始まつた處なので、小楠公や辨慶や松風村雨などの變装をした令嬢達は其のまゝ、跣足で庭へ飛び下りた。恐怖に充ちた男女は見る見る垣を越え木立を潜つて右へ左へ只芋の子を洗ふ様に押し合ひへし合ひ狼狽の渦巻に狂ひ廻つた。

『續いて第三の爆音！』

叫喚は一度に起つた。

『さあ此方々々』

人々を押し分けて黄色な聲で叫びながら浪路は細紐一本の淫らな姿で脛も露に走つて来た。彼女は情人瓜生實にはぐれまいと一生懸命に人を掻き分けた。其の背後から上原雅子は帽子も被らぬ洋装で、而も靴も穿かずに走つて来た。

勇氣のある男共は松の木に上つて市街を眺めた、精養軒のボーイ共は屋根の上から何やら怒鳴つて居る。

『爆發だ!』

『爆發だ!』

『何處?』

『砲兵工廠だ!』

人々は高臺に集まつた、いかにも西の方に當つて龍巻の様に眞黒な煙が半天に騰つて居る。不忍の池を隔てた下谷の仲町茅町の屋根々々は人を以て埋まつた。本郷臺の屋根々々にも人の姿が群がった。

砲兵工廠の爆發!

敬三は高臺を去つて直ぐに伯爵の傍へ戻つた。伯爵の前に今雅子は靴も穿かない露な足を恥ぢな

がら蹲んで居た。

『伯爵! 砲兵工廠の爆發です』

『なに?』

伯爵はよろ／＼と二三歩前へ出た。其の顔色は見る／＼土の如くなつた。

『砲兵工廠です』と敬三が繰返した。

『砲兵工廠か』

伯爵の聲は蟲の如く弱かつた。唇から葉巻が力なく落ちた、伯爵は茫然と榻に腰を落した。さうして又言つた。

『さうか』

霹靂が寸前に碎くるもビクともしない伯爵がどうして慙くまで萎れ返つたか、敬三が其れを不思議に思ふ間もなく彼の頭にお夏の家が電光の如く閃いた。

『お夏!』

今朝工廠の裏門で別れた時のお夏の姿!

『やられたッ』

彼は脱兎の如く走つた、人を押し分け／＼會場の外へ出ると、賣市の入口で幹事連がワイシャツ

一つになつて狼狽する群集を制して立て、居た、だが群集は其れに構はず廣場へくくと雪崩れを打つた。敬三は茶店に預けた自轉車を受取らねばならなかつた、だが茶店にも人が一ぱいに詰まつて居た、十四五歳ばかりの少女が縁臺の毛布を取入れようと焦つて居たが毛布は既に靴や下駄に蹂躪されて居た。敬三は自轉車を捜した。と彼の前に一生懸命に走つてる紳士がある、帽子も被らず汗は瀧の如く首筋を傳つて居る、其れは富塚惣兵衛であつた。

「おい仲屋！ おい、三人で綱曳だ、おい」
 其の眼は血走つて聲は嘎れてしまつた。

「おい仲屋、綱曳だ、三人！」

彼は恚う叫びながら群の中を押し分けて行つた。

「彼奴！ 相場をやりに行くんだ、だが砲兵工廠の爆發は相場にどういふ關係があるだらう」

敬三は自轉車を目付けて飛び乗りながら恚う考へた。

「工廠の爆發、まさか休戦の原因になる様な事はなからう」

彼は三橋を過ぎた時消防隊が勇ましく駆け出したのを見た。

「急がなきゃならん、ぐづくすると非常線が張られて入る事が出来なくなる」

力の限り速力を早めた。埃交りの風は顔を打つ、帽子を確乎と眉深にして背中を圓くした。往來

は織るが如く雑沓して居る、彼は兩側にどんな店があるか、又どんな出来事があるか知らなかつた。只真直に！ 馬車馬の如く。

壹岐坂を降りると早幾條かの柳筒の管が縦横に亂れて居た。片側の人家には群集が塀の如く立つて居た。黒い大きな門は開かれて内部の混亂した光景が覗かれる、其處から間斷なしに悲鳴が聞えて擔架や戸板に載せられた負傷者が續々と運び出された。

一つの柳筒は只目當なしに高い建物の屋根に水を掛けて居た、もやくとした煙は一面に奥を閉ぢ籠めて居る、煙の裾から母を呼び子を呼び姉や妹を呼ぶ聲が聞える。其等の聲は半ば毀れた小さな舎の周圍に一番多かつた。

「やられた」

敬三は再び恚う思つた、彼は自轉車を蕎麥屋の店に突込んで又走り出した。監督らしい士官や憲兵などは半狂亂の姿で亂入し來る民衆を阻止しようとしたが其れは無駄であつた。男女工合せて此處に働くものは六千人、其の親兄弟が一度に殺したのだから堪らない。柳筒の水は路を泥の海になし、煙と霧は顔の向け様もない。敬三は逆も此處から入る事は出来ないと斷念し、足を返して正門から入る事にした、だが正門は更に混雜して居た。最初の爆發に外へ飛び出したものが第二回の爆發で數十名一度に五六間ほど吹き飛ばされた、屋根の上に打ち上げられたものもある、人に負は

れて泣きながら行くもの、もう呼吸も吐けずに路傍に倒れたま、助けを待つもの、宛ら硫黄の火燃ゆる地獄の山に追ひ立てられた亡者の如くであつた。泥！ 火！ 煙！ 焰硝の匂ひ、破壊の音！

『作業場だく』

敬三は霧々地に作業場へ突進した。

『お夏ちゃん！ お夏ちゃん！』

彼は聲を限りに叫んだが、四圍の騒音に自分の耳にも聞えない、だが一生懸命に叫んだ。

『お夏ちゃん！ お夏ちゃん！』

彼の聲と共にいろくな聲が起つた。

『お花やあい』

『お菊、お菊、お菊やあい』

『山本とめ子！ とめ子さん！』

作業場は五棟ほどある、第一の建物は盛んに青い火を吹いて居る、其の煙は風に煽られて熱火を雨の如く降らす、第二の建物は跡形もなく真黒になつて寸々に碎けた。第三の建物！ 其れは老婆の腰の如く二つに折れて屋根は地べたに低れ、窓の口から黒い煙を瀧の如く吹き出して居る。

『お夏ちゃん！』

敬三は第三の工場へ走つた。

『危い！』と聲々が言つた。敬三の耳には聞えない。

『こらッ、待て、こらッ』

一人の憲兵が横合から走つて敬三の腕を掴んだ。

『何處へ行く』

『工場に勤めてる女を探しに……』

『女は何か、お前の親戚か』

『妹です』と敬三は言つた。

『姓名は』

『工藤夏子——兄は近衛騎兵少尉工藤三吉！』

『お前は？』

『三吉の兄です』

口から出任せに慍う言つた敬三の頓智は憲兵を納得させた。

『併し危険だから注意したまへよ』

『難有う』

敬三は屋根の下に這ひ込んだ、其處には一人の姿も見えない、反對の方へ這ひ出て向ふを見ると端なく女工の一群に逢つた、彼女等は皆跣足であつた。彼女等の着物は悉く焼け爛れ、乳房も露に喘ぎ／＼走るもあり、顔も手も泥だらけになつて居るのもあつた。彼女等は一團になつて泣き叫びながら煙の下を迷うて居る。

「お夏ちゃん！」

「はい」

判然と聲が聞えた、敬三はハツと思つた。同時に小夏は砲丸の如く敬三の胸に抱き付いた。

「小柴さん」

「おう」

敬三は確乎と抱き締めた、彼は其れが果してお夏であるか否かを確める暇もなかつた。其れに拘らず彼はこれがお夏だと思つた。彼はどうしてお夏を門の外まで連れ出したか解らなかつた。後で考へて見ると彼は最初の間二三町ばかりお夏を抱いて走つたが、門を出る時には背中へ負うた。さうして何の意味だか知らないが自分の上着をお夏の肩に掛けてあつた。

お夏の働いて居る作業場は第三工場であつた。第一工場が爆發した時お夏は他の女工と共に外へ出た。同時に第二の爆發が起つた。彼女は爆發の力に煽られて木の葉の如く飛ばされた。

門の外で彼女の老母に逢ひ、其れから家へ歸つた時お夏は氣の弛みと共に喪神の状態に陥つた。お夏の喪神と共に母は餘りの驚きに全然痴呆の如く役に立たなくなつた。敬三は一人で凡ての手當をしなければならなかつた。醫者が來て診察した時初めてお夏の膝の上に烈しい打撲傷がある事を知つた。彼女が打撲の痛みを感ずると共に凡ての知覺を恢復した。

「手を貸して下さい」と醫者は言つた。さうして醫者はお夏の膝を捲り上げた、雪の如く白い膝から上の皮膚は紫色に腫れて股の方まで充血して居た。敬三は其の足の方を持ち上げて居た。醫者は藥を塗つて繃帯を施した。其れが終ると敬三は醫者に從いて藥を貰ひに行つた。

藥を貰つて歸るとお夏は全く元氣であつた、彼女は母に向つて、

「なぜ直ぐ來てくれなかつたの？」と幾度も言つた。

「直ぐ行つたけれども人に押されてね」と母は頻りに謝まつた。

「でも小柴さんがいらして下さつたから……」

「さうよく、本當にさうよ」

憐れ力を込めて言つたが痛みが襲うて來たので又眉根を寄せた。と再び元氣になる。

「私ね、今朝何だか小柴さんと御別れするのは厭だつたのよ、蟲が知らしたんだわね」

「どんな蟲ですかお夏ちゃん」と敬三が言つた。お夏はさつと顔を染めた。彼女は繃帯が厚過ぎる

ために動けないと言つて母を困らした。

「着物をどうかして頂戴よ、着物を」

老母はお夏の下紐を結んでやり、單衣の裾をきちんと重ねてやつた。

「苛々せんと安眠なさいね」と敬三は枕元に寄つてお夏の額に手を置いた。

「えい、私眠りますわ、貴方もう御歸りにならなきやならないんでせう」

「いや僕は何時までも此處に居ます」と敬三はお夏の手を取つた。お夏は靜かに眼を閉ぢた。さうして指先で敬三の指を弄つて居た。

安らかな眠りに入つた。

敬三には煩瑣な用事が多かつた。其れは工廠へ行つてお夏の負傷を届ける事、右負傷に就いての手當料を請求する事、其れから堂岐坂の蕎麥屋へ預けた自轉車を取つて來る事などであつた。彼はお夏の母から門鑑を借りて直ぐ工廠へと急いだ。工廠の西門は最早人出が薄らいだ。が門の前には約十人ばかりの憲兵と十人ばかりの巡查が立つて居た。敬三が門鑑を示して來意を告げると、一人の士官が慪う言つた。

「此方は混雜してゐるから正門の方から入つて下さい」

敬三は正門へ廻つた。其處には何十人となき憲兵巡查が警戒して居た。

「火事を出した後で警戒したつて何の役に立つものか」と敬三は思つた。だが内部に入つて見ると一層驚いた。爆發した二棟は未だ細いながらも煙を立て、居る、大勢の兵卒が焼跡を始末して居る。彼等は死骸を掘出すためであらうか、但しは何等かの目的があるのか。敬三には其れが解らないが、彼は焼跡の周圍、其れから稍と離れた倉庫といふ倉庫、工場といふ工場に無数の巡查が動いて居るのを見た。

「砲兵工廠だから一切の警衛は憲兵がやるべき筈だ、巡查をこんなに集めたのは何か理由がなければならん」

敬三の頭に一點の疑が起つた。彼は人事課へ行つて手續を終り其れから東門へと足を向けた。工廠の中には元一條の小河が流れて居た。此の河は何時の間にか大きな鐵管となつた。さうして其の上は普通の地面となつた。何人でも工廠の南方にある溝の様な河——これは江戸川へ續く河である——へ北から落ち込む水の音を聞き得るであらう、此の樋の口は工廠の煉瓦塀の下にある、而も外からは潜入が出来ない様に岩疊な鐵の柵が立てられてある。敬三は今此の河の近くまで來た。其處の右に五人、左に五人づつ巡查が立つて居る、而も今三人の巡查が鐵管の穴へ歩み下りて其の水口を覗いて居る。

「何だらう」

「悪い奴等だなあ」
 敬三は堪らなく不愉快になつた。彼は二合の酒を飲み終つて自轉車に乗つた。彼は先刻から例の
 髭の男を憶ひ出したのであつた。
 「彼奴だ、彼奴の一派だ、彼奴を引捕まへて根底から悪思想を剿滅しなきやならん、さうだ、
 俺は必ず捕まへて見せる」
 日は赫々と輝く、屋根々々は燃ゆる様、同時に敬三の頭に火の粉が降つて、胸の底は熱湯が沸る。
 二合の酒は憤怒の血を煽り、自轉車は果しなく走る。

家出

新聞社へ行くと編輯局は鼎の沸くが如き騒ぎである。先づ社の入口には何十人となき配達夫が老
 いたるも若きも少年も蠅の如く集まり、往來まで飛出して何ものかを待つて居た。
 「號外だな」と敬三は思つた。彼は自轉車を降りて二階へ駆け上ると其處には編輯の面々が大聲に
 罵り合つて居た。

「あの爆発と同時に工廠が非常門を開けなかつたのは實に怪しからん」と眞赤になつて怒鳴つて居
 るのは染井といふ記者であつた、彼は印場へ馳せて憲兵から大目玉を食つたので酷く反感を懐いて
 居た。彼は幾百の女工が煙の底を迷うて泣き叫ぶ光景を極めて面白く物語つた。だが人々は其れに
 耳を傾けず全然別な議論をし初めた。

「損害はどの位だらう」

「何しろ雷管が何百萬発といふのでは大變な事だ」

「戦争に影響するかね」

議論は二つに分れた、工廠の爆発位で日本は戦闘を中止するほど貧弱でないといふ説と、實際日
 本は今武器彈藥の缺乏、兵員の補充に困つて居るのだから、此の爆発が一大障害となつて戦争繼續
 は覺束ないといふ説と相衝突した。最初は休戦説を何人も信じなかつた、だが軍事係の服部といふ
 記者は奉天戦の實情から精細に語つて行く中に人々の顔に不安の色が漾つた。と丁度其の時相場記
 者から電話が掛つた。

「富塚惣兵衛が買ひに掛つた。片つ端から買つてく買ひ捲つて居る、多分休戦を見越したのだ
 らう」

此の電話は一同を震駭させた。或人曰く天下の形勢を知るには新聞を読むよりも相場に氣を付け
 る、確かに新聞より一日だけ早く解ると。此の言葉は決して誇張でない、外國のいろく々な事變
 や、外交問題などは政府よりも兎町の方が早く知つて居るのは昔からの習慣である。

「惣兵衛の奴、やつたね」

敬三は恚う思つて苦々しく感じた。惣兵衛が買ひに掛つたといふ事は休戦の象徴の如く人々に思はせた。

「休戦！」

「休戦！」

聲々が起つた。此の矢先に給仕が一枚の號外を持つて來た。其れは明治新報の號外であつた。人は争うて其れを見た。

「當局者責を引くべし」

白山は其れを朗讀した、其れはいかにも堂々たる大論文であつた、一刻も早く報道を急ぐべき號外に論文を掲げたのはこれが嚆矢である。論文の趣旨は恚うである。

此の軍國多事の秋、而も我が國が一個の雷管一發の彈丸さへも節約しなければならぬ際に工廠を爆發さして戦鬪力を減ぜしめた當局者の責任は斷じて看過する事は出来ない、而も事に従ふ職工男女合して數十人の死傷を見るに至つた、政府は何を以て辯解の辭となすであらう、聞く處に依れば不逞なる社會主義者の毒牙が遂に此に及んだものであるさうだが、曾て無辜の代議士を露探の嫌疑の下に排斥した衆議院は、此等不逞の徒を取締る事も出来ぬ政府に對して晏然として國事を委ぬる積

であらうか。

「やつた〜」と白山は苦笑した、「犬糞的復讐だよ」

「いや至論だ」と敬三は言つた。「若し爆發が休戦の理由になるほどの大損害だとすれば、當局者が日本の大計を永久に誤まつた事になる、其れは責めなきやならん」

「新聞の人氣取策としてはなか〜巧妙な論文ですね」と社長は微笑して言つた。

「人氣取のためではないと思ひます。我が社も斷乎として政府を攻撃すべき事だと思ひます」

敬三は赫として叫んだ。

「君はいつも反對新聞の肩を持つね」と白山が言つた。

「正義は正義だ、僕は國家の利害を以て休戚を分つのだよ、新聞の政策などは眼中にない」

「君は國士だからね」

白山と社長は顔を見合せて笑つた。

「貴様は新聞商だね」

敬三は恚う言つた、社長と白山と他の人々は大急ぎで工廠の罹災者に慰問品を贈るべく協議した。

敬三は黙つて窓の傍に凭り外を見て居た。

「罹災者の住所が解るだらうか、但しは工廠に分配を頼まうか、ねえ小柴君」

白山は憊う敬三に聲を掛けた。

「衷心から罹災者に同情して慰問品を贈るなら現金を贈るが可い。方々の商店からハミガキや仁丹や手拭位を無理に密附させて、荷車に社名を書いた旗を押し立て、東洋新聞は慈善家のごさといふ廣告に利用しようといふなら止すが可い、人氣取の犠牲にされる死傷者こそ可い面の皮だ」と敬三は言つた。

「君には相談しないよ」

白山も到頭怒り出した。敬三は少し言ひ過ぎたと思つた。だが彼はどうしても白山と社長の顔は氣に食はない。此の二人の前へ出ると憎まれ口を叩きたくなる。室内は妙に白け渡つた。敬三は毒口を吐いた後の淋しい氣持で外を見やつた。天はどんよりと曇つて屋根々々に光がない。入口に集つて居た配達夫どもは一人も残らず散り失せて往來は急に物忘れした様に靜かになつた。

「妙な奴が出て来たものだ、社會主義者なんて實に不思議だ」

彼は不圖憊う考へた。連戦連勝、國威が隆々と揚つた。前古未曾有の榮譽の絶頂に立つて居る日本のどん底に今まで見た事のない蛆虫が湧いて来た、社會主義！ 社會主義！ 日本に生れて日本を呪ひ、君の臣となりて君に叛く、此の思想は何處から来たのだらう。

コレラといふ病がある、ペストといふ病がある、此の恐るべき病は外國より輸入された、日本は文

明を外國から輸入したと共に悪疫をも輸入した。而も醫學がどんなに進んでも此の悪疫の根を絶やす事は出来ない、今社會主義が日露戦争と共に輸入された、其れは總てどうなるだらう。

彼は憊う漠然たる考に引込まれながら向ふの銀座の方を見やつた、其處に一本の細い道路があり其れが銀座の大通と丁字形に突き出て居る。銀座の通の見える兩側の屋根と屋根の間に走馬燈の如く往來する人の姿が見える。彼は其處で今まで意識しなかつた奇妙な看板を見た。第一に眼に着いたのは Restaurant と書いた洋食屋の看板で其の次に見えたのは SEIYOSSENTAKU といふ看板であつた。彼は洋食屋の方は解つたが、西洋洗濯の方はなかく讀めなかつた。

「何といふ馬鹿だらう」と彼は思つた。ローマ字で西洋洗濯と書いた處で、日本人にも讀めなければ外國人にも解らない、双方に解らない看板を掲げて得意になつて居るあの家の主人はどんな奴だらう。

其れから彼はいろ／＼な看板を数へて見た、さうして英語の看板の多いのに驚いた。

「これはどうした事だらう」

彼は堪らなく不思議に思つた。これには何か理由がある、左なくば一時の流行か、一時の流行にせよ其れにも理由がなければならぬ。但しは何時の間にか浸潤した拜外の氣風が憊ういふものを自然に生み出したのか、若しローマ字の西洋洗濯が理由ありとすれば社會主義も亦理由がなければ

ならぬ。

一概に憤慨し罵倒し等閑に附すべき問題ではない、大きな變化が日本の一角に兆しかけてるのであるまいか。

敬三は呼吸も吐けぬ程胸苦しくなつた、何か知らん凶變が來るだらう、日本の空氣は刻々に變化しつゝ、あるのだ、露西亞を打碎きながら打碎かれつゝ、あるのだ。

これは何といふ事だらう。

『小柴さんく』

噎れた様な聲が背後から聞えた。敬三は吾に返つた。

『電話でけす小柴さん』

其れは例の三面記者で劇進たる田人君であつた。

『難有う』

敬三は電話室へ行かうとした。

『婦人でけすよ、へツくくくどうも實に』と田人は例の人の善い笑ひ方をした、敬三は受話器を耳に當てた。

『もしく』

聲は女でなく男である。

『はい誰方？』

『浅見ぢや』

『あ、子爵ですか』

慙う言つた時田人は肩を叩いて笑つた。慙ういふ惡戯は敬三も屢々他人に用ひた處である。

『あんたは小柴さんか』と老子爵の聲、何となく顛へて居る。

『小柴です、はい』

『娘がな、節子がな、家出をしたのぢや、どうも困つたもんで』

『えつ』

敬三は頭から冷水を浴びせられた様な氣がした。

『どうして？』

『さあ能くは解らんが、困つたものぢや、粟津から今さう言つて來たけれどもな、一向行先が解らんでな、どうも實に都合な奴で……』

子爵の聲は霜枯の虫の様に弱くなつた、白髪を顛はして電話口に立つて居る姿が眼前に浮ぶ。

『其れは實に困りましたな』

「他の人には話せない事ぢや、若しも貴方の處へ行つて居ないか、と思つてな」

「一向存じません子爵！」

「心當りがなからうか」

「さあ」

「私の考ではな、一郎や貴方の御友達で小南子爵の令息な、或ひは……どうも餘程思ひ詰めた事があるらしいんでな」

「子爵！ 御心配にや及びません、僕が行つて見ます、大丈夫です、僕に思ひ當る事がありますから」

「さうか、間違つた事はしなからうと思ふが、併しな……」

「大丈夫です」

「貴方が捜してくれ、ば私も安心が出来る、貴方ばかりが頼りぢやからな」

「承知しました、御安心下さい」

「よろしく頼みますぞ」

「は、」

受話器を掛けたものの敬三は途方に暮れた。節子が良人の家を出た！ 無念さうあるべき筈だ。

だが普通の女と違ひ、氣象が勝つてゐる女だけに決心した以上は、翻すべくもない、扱何處へ行つたのだらう、父の名譽兄の名譽を思へば自殺などする様な事はなからう、自殺をしないとすると差向き遠くへ旅立つたか、但しは……。

敬三は此まで考へた時兩眼が熱くなつた。父の政治慾のために犠牲となつた妙齡の婦人、誰が見ても品性劣等な富豪の息子の妻となつて、朝に夕べに笑つた事もなく暮らして居る捕虜の生活！

其れがどんなに辛い事かは父も母も氣が付かないのだ、親は親の心で娘は幸福だと思ひ、子は子の心で自分ほど不幸なものはないと思ふ、双方の心は相距る事千萬里、娘に毒を飲まして藥だと信じて居る此の親子ほど不幸なものはあるまい。

敬三は怨う考へながら首を低れたまゝ、二階を降りた。彼は老子爵を慰むるために可い加減な返事をしたもの、實は節子の行先に就いては全然見當がつかないのである。

「戦地へ行つたかも知らん」

彼の頭に不圖怨う浮んだ。節子が杖とも柱とも頼むは父でない母でない、戦地にある兄だけなのだ、其の儘戦地へ行つたらうか、但しは看護婦にでもなる積だらうか。敬三の空想は果しなく擴がつた。

「其れとも或ひは僕の家へ……」

其れはいかにも有りさうな事である、良人の家を出た時に差向き敬三以外には相談すべき人がない筈だ。敬三は恚う思つて自轉車を自宅へ飛ばした。彼は門に入るや否や見覺のある薩摩下駄が目に付いた。

『御母さん、小南君が來てる？』と彼は聲を掛けた、母の返事よりも先に小南の聲が聞えた。

『あ、來てるよ』

『さうか、丁度可かつた』

敬三は自轉車を玄關口に寄せて家へ入つた。自分の書齋に小南の丈高い姿が見える。

『やあ失敬』

『やあ、どうして早く歸つて來た？』

『どうして君が僕の留守を知りながらやつて來た？』

『實はね……』

『節子さんの事だらう』

『うむ』

『どうして君は知つて居る』

栗津から僕の處へ電話を掛けた、栗津は僕が節子さんを引張出したと思つて居るらしい、失敬な』

平素の温厚に似ず小南は酷く昂奮して居た。

『栗津て奴はそんな奴だよ、彼奴は相手にするだけ損だ、抛とけよ』

敬三は極めて磊落に言つた。さうして次の室へ聲を掛けた。

『御母さん、御茶を下さいよ』

『御土瓶は其方にある筈です』と母の聲。

『土瓶の御茶ぢや詰らないな』

母の笑聲が聞えた。

『酒は止せよ、僕は君に話したい事があるんだ』と小南は真面目に言ふ。

『うむ。何でも聞くよ』

『だから酔はない中に聞いて貰ひたい、可いか、僕は今度愈々結婚しようと思ふ』

『うむ、何處から貰ふんだ』

『富塚の娘だ』

『デブ公か』と敬三は思はず叫んだが急に額に手を當て、『やあ失敬々々』

『うむデブ公だ』と小南は靜かに言つた。

『本當か』

『うむ』

『本當に本當か』

『うむ』

敬三は口を一文字に結んで凝と小南の顔を見詰めた、小南も黙つて敬三の顔を見詰めた、二人の眼と眼は結び付いたまゝ、何時までも動かない、小南の顔は刷と紅らんだが直ぐ蒼白になつた。

『なぜあんなものを貰ふか』

溜り溜つた憤怒が破裂した様に敬三は怒鳴つた。

『理由がない』

『いや、理由がないだけでは僕は満足が出来ない、あの女……眞琴といふ女は品行に於て缺點があるよ、彼の親父は富塚惣兵衛だ、金を儲ける事だけを目的として生きてる奴だ、砲兵工廠の爆發に乗じて相場で儲ける奴だ、あんな奴の娘を君が、おい止してくれ、おい、君は華族ぢやないか、皇室の藩屏だ、國民の模範を以て任じなきやならん身分だ、可いか、君の一舉一動は直接に國民の氣風に影響するんだ、惣兵衛の様な愚劣な奴を舅と仰ぎ、デブ公を妻としたら世間は何といふか、俺は反對だ、俺はどうしても反對だ』

敬三は恚う言續ける中に兩眼が次第に熱して來た。

『解つてるよ、君はさういふだらうと思つて居た、だが今度は凡てを黙認してくれ給へ』

『いや黙認は出来ない、僕は今日子爵から電話が掛つてから自轉車の上で随分考へたんだ、さうして節さんの家出は寧ろ喜ぶべき事だと思つた、これを機會に僕は栗津家へ嚴談して離縁を取る、節さんを潤溝の中から救ひ出して自由の身にする、さうして君と盛大な結婚式を擧げる、其れが正當過ぎるほど正當な事だ』

『待つてくれ給へ、其れが出来る位なら何も僕は急いでデブ公と結婚しやせんよ』

『なぜだ』

『小柴君』と小南は聲に力を入れて言つた。『僕の身體が決まらずに居るのは節さんに取つて最大の苦痛なのだ、僕が妻を迎へると節さんの心が落着くだらう、只其れだけだ』

『ちや君は節さんのために……』

敬三は恚う言ひ掛けたが何にも言へなくなつた。いかに立派な小南の犠牲心よ！ 彼は恚う心に讃歎しながらも扱其のためにデブ公を小南の妻に迎へる事はどうしても賛成は出来ない。

『何とかならないかね君』

これが敬三の歎息であつた。

『今度だけは許してくれ、僕は其の積で今日富塚家へ承諾の挨拶をしてしまつたのだ』

『さうだらうと思ふがな』

『兎に角行つて見ます』

敬三は暇を告げた。

『一杯傾けて行つたらどうか』

『時間が無いから塚で頂戴します』

敬三はブランデー一本を片手に握つて自轉車に乗つた。

『面白い、これさへあれば徹夜でも探さぞ』

彼は風を截つて走つた。扱何處へ行く目途もない、五六町走つて車を駐め、ブランデーを喇叭飲みに呷ると、ひり／＼と喉の痒い處に擦れて通る、口の中が赫と温かくなるかと思ふと、香氣が喉と鼻の間の邊からほの／＼と漲る。彼は堪らなく愉快になつた。さうして又自轉車に乗つた。

『酒は酒だ、責任は責任だ、畜生め、責任は果たさなきやならんぞ』

彼は自分で慙う叱つた、飲んででは走り、駐まつては飲む、其の間彼は何處をどう走り廻つたかは自分で知らない、彼は彼の知る限りのあらゆる家を探したのは事實である。だが節子の行先はどうしても解らない、終りに彼は栗津の家へ行つた、主人の篤彌は恐しく真面目な顔をして應接室に現れた。彼は自分がどんなに節子に未練を有つて居るかを他人に見透かされまい爲めに極めて冷や

かに應對した。

『私の方では人の妻たるものが無断で家出をする以上は其れだけの覺悟があつたものと察しますから、今強ひて其の出先を搜索する必要を感じませんから……』

慙う言つて印形を彫つた指環の手を開いたり握つたり襟帯を弄つたりする。敬三は其れだけを見て堪らなく厭になつた。一つ擲擲つてやらうかと思つたり、罵倒しようかと思つたりした、其の後の事は後日になつても記憶がない、兎に角篤彌の家で更にブランデー一本を飲み干したのは事實である。彼は自分では少しも酔つて居ない、極めて眞摯に節子の行衛を探して居るのだと信じきつて居た、麴町から四谷、麻布、赤坂、八方を廻る中に日が暮れた、さうして何時の間にか夜が更けた。此の泥酔の中にも彼は自宅へ歸る事だけは忘れなかつた。併し彼は家へ歸つた時、日の丸の提灯を片手に持ち、今一つの提灯を洋服の襟に刺し込んで居たのを母が見た、二つとも灯が完全に點つて居た、何處かの提灯行列から分捕して來たのだとは母も想像が及ばなかつた。

翌る日は眼を覺ますや否や社へ出掛けた、彼は非常な大罪を犯した様に思つた。節子の行衛を探しながら要領を得ずに終つた、其れが堪らなく心苦しい。

『俺は何といふ不親切、不人情、背徳な人間だらう、もう斷じて酒は飲まんぞ』

新聞社はなかく忙がしかつた、昨日の爆發事件はもう忘れたかの如く何人も噂するものがない。

満都を震駭せしめた大事件も一日過ぐれば十年の過去の如くなる、時間は人生のあらゆる出来事の色を消して過去へくと遠ざけて行く。

だが此の日は素破らしい外国電報が到着した。米國大統領ルーズベルトが日本帝國に對し媾和の勸告をするだらう。

左なきだに媾和の風が吹き渡つて居る矢先である。昨日の砲兵工廠の爆發にさへ媾和熱が高まつた時である。媾和か？ 媾和か？ 在京の政治家は東西に奔走した。媾和反對演說會の立看板が要處々々に立てられた。政黨の本部は大入滿員の姿である。

『ハルビンへ』

『モスココーへ』

『同胞が流した血を安價に見積るな』

『町々は熱狂した。』

『起てよ國民、同胞の血を空しくするな』

明治新聞の一隊は三百人、陣太鼓を先登に昇ぎ込んで町々を練り歩いた。東洋新聞の人々は皆窓から顔を出して其れを見た、社長と白山は苦い顔をして笑つて居た。

此の騒のために敬三も多忙であつた、彼が節子捜索に掛つたのは夕方であつたが、其の夜も何の

手掛りがなかつた。二日と二晩、節子は何處に何をして居るのだらう、敬三は節子の身の上に大きな危険が刻々に迫つて来る様な氣がした。

翌日も又多忙であつた。淺見子爵から幾度も電話が掛る、敬三は既に心當りの家は悉く獵り盡くした。此の上は警察の手を借りるより他はあるまい。

『待て、もう一度栗津の家へ行つて前後の事情を調べて見よう』

愠う思ひ付いて彼は社を出た。彼はこれで若し手掛りを得なければ最後の手段を取るだけだと決心した。日はもう暮れて天は今にも降り出しさう、敬三は栗津家の庭深く自轉車を入れた。案内を乞ふと直ぐに玄關に現れたのは篤彌である。

『歸りましたよ』と彼はちよこくと歩き寄つて顔を突き出して言つた。餘りに輕率な態度なので敬三は、何の事だか解らなかつた。

『歸りました、家内が歸りました』

『あ、奥さんが』

『歸りましたよ』

愠う言ふかと思ふと急に慌て、『さあ御上りなさい、どうぞどうぞ』と自分で上靴を出して見たが、片方だけだったので彼は女中を呼んだ。

『たつた今歸りましてな、少し疲れてるんで寢んで居ます。どうもいろいろ御心配を掛けまして』
 『併し何處へ行つてたんでせう』

二人は應接室へ入つた。

『其れがね貴方、芦澤夫人の別荘へ遊びに行つてたんださうですよ、只ふらくとね、直ぐ歸る積でね』

『さうですか』

敬三は狐に誑まれた様な気がした。二日二晩兩親や知合に天地顛覆の様な心配をさせた事件が極めて平凡に而も軽々しく終局を告げた。其れは結構な事に異ひないが、併し餘りに馬鹿々々しい騒ぎであつた。

『どうも濟みませんでしたな、併し歸つてくれましたから』

篤彌は前夜の憤怒を忘れたかの様に只節子の歸家を喜んで居る、彼は二日二晩懊惱した恨みもなければ改めて向後を戒めようといふ勇氣もない。

『稀にはね、好きな所へ遊びにやらねばならないものですな、僕は今度で始めて解りましたよ、夫婦といふものは折り／＼別居が必要です』

『なる程』

敬三は馬鹿々々しさに堪へられなかつた。

『何しろ結構ですな』と言へば、

『さうです結構です』と言ふ。

『ちや左様なら』と敬三は立上つた。

『貴方がいらしたら御目に掛りたいと言つてましたから御迷惑でなければ會つてやつて下さいませんか』

『御差向なかつたら』

『御待ち下さい、私が行くと興奮しますから』

彼は女中を呼んで敬三を案内させた。敬三は女中に従いて廊下傳ひ、奥の書院の襖を開けると其處に節子が端然と坐つて文机に凭れて居た。

『どうしたんです節子さん』と敬三は聲を掛けた。

『何でもないのよ』と節子は笑つて女中に何人が来ても此の室へ入れてはならぬと申渡した。女中が去つてから彼女は暫らく文机の面を指先で撫でて居た。

『御寢みぢやなかつたのですね』

『えい、さう言はないと煩いから』

節子は肩を擧めた。水々とした二百三高地の頭、額頭の毛が豊かに耳の側に垂れて長い襟足の地肌白々といかにも上品に見えるが、何となく浮かぬ顔色で眼には毎もの活気がなかつた。

『随分心配しましたよ』と敬三は言ふ。

『済みません、本當に済みません』といふ聲に力がない。

『節子さん、僕は貴方に御勧めしたい事があるんですが、貴方はもう少し徹底したらどうですか』

と敬三は穩かに言つた。

『何をです』

『貴方はどうしても此の家が厭なら此家を捨てるが可いでせう』

『捨てられませんか』

『捨てられないと決まつてるなら快く人の妻たる義務を盡くしたら可いでせう』

『だつて厭なんですよ』

『あれも厭、これも厭では困ります、其のために貴方も不幸、良人も不幸、御両親も不幸、僕等も不幸になります』

『ですから私……』

節子は恚う言ひかけたが急に口を噤んだ。

『其れで？』と敬三は促す。

『いえね』

節子は何か言はうとして再び沈黙した。沈黙は長く続いた。

『二度とこんな事がない様に、はつきり決心する必要があると思ひます』

『私ね、二度とこんな事をしませんわ、私ね小柴さん、私此の家に腰を据ゑると決めましたわ』

節子の聲は段々弱くなつた。

『確かにですね』

『えい、其れより外に仕様がありませんもの、同じ事を繰返して毎日自分も厭な思をし、良人にも厭な思をさせるよりね』

『其なら其の積で御やりなさい、僕は僕の考があるけれども貴方の御決心が着いたなら何も言ひますまい、どうか其の決心を鈍らさずに貞節を盡くして御あけなさい。御父様も御安心なさるでせう』

『貞節と仰有るのは？』

節子は肩を揺つて溜息を吐いた、と彼女は又續ける。

『小柴さん、私貴方だけに白状したい事がありますのよ』

『どんな事ですか』

「貴方、怒らずに聞いて頂戴ね」

「承知しました」

「ぢや申しませう、私ね道ならぬ事を致しましたの」

「なに？」

敬三は愕然として顔を挙げた。これほどの驚きは又とあらうか。節子は慌たしく文机を指もて拭き出した。

「私ね、今の良人と同棲する事は苦しくて／＼堪へられませんもの、時には憎らしくて堪らない時もあります、あの人は私の肉體以外のものは何にも認めてないんですもの、そんな人と一緒に暮らすには私は自分の弱點を作るより他に方法が無いと思ひます、自分に悪い罪があれば良人の悪い點をも忍ぶ事が出来るでせう、良人に對して苦情も言へなくなるでせう、私さうするのが此の家の妻になつて行ける方法だと思ひましたわ」

「馬鹿な事を……節子さん、本當に其れは……其れは……其れは……」

敬三の怒は頭の中で炎の如く狂ひ廻り眼から火の粉が散亂した。

「一昨日ね、私は芦澤さんの奥さんと一緒に……奥さんも私と同感でしたのよ、其れで私は……」
「相手の男は？」

「言へませんわ、詰らない男なんです、どうせ詰らない男でなければ……」

「もう止して下さい」と敬三は大喝した。節子はさつと顔の色を失つた、其の唇はふる／＼と顫へた。

「だから私は貴方に怒つて下さるなど御願ひしたぢやないの？ 貴方には女の氣持が解らないのね、私が此の家に永く居ようとすれば私自身を墮落させなければならぬといふ事は御解りにならないのね」

「そんな事は解りません、苟くも人間の心あるものは解りません、節さん、小南はね、小南は獨身で居ると貴方の心が定まらないからと言つて富塚の娘を貰ふ事に決めました、貴方の幸福を思へばこそです、其れに貴方は」

「小南さんが眞琴さんを？」

節子は文机の端を兩手に掴んで顫へながら凝と敬三を見詰めた。

「小柴さん、小南さんの氣持と私の氣持と同じぢやないの？ 小柴さん、其れが解らないの？」

「貴方の様な人とは今日限りです」

敬三は立ち上つた、節子は凍て付いた様に動かなかつた。さうして靜かに／＼言つた。
「貴方には解らない、小南さんなら解つて下さる」

媾 和

明治三十八年七月八日の午前、新橋の停車場は蠟塗の馬車、絹帽、フロツクコート、美々しい盛装の紳士淑女で立錐の地もなき程満たされた。停車場に送迎の多いのは開戦以來数倍になつたが、恚ういふ上流の人達が集まつたのは珍らしき事であつた。左なきだに狭い待合室は到底群集の十分の一をも入れる事が出来ないで驛長の取計として改札口を開放して歩廊へ出る事を許した。其の頃歩廊は漸く十間ばかり繼ぎ足したので鐵軌に沿うて奇妙に長い形になつた、歩廊も瞬く間に塞がれた。

此の日は媾和全權公使として日本帝國外務大臣男爵小村壽太郎が渡米の鹿島立ちであつた。六月十日米國大統領ルーズベルトが日本に媾和を勸告してから此の三十日間國民の心血は外交の上に注がれた。此の最も大切な任務を負うて渡米する人は何人であるか、樞密院に於ても内閣に於ても梅園伯を第一に推擧した、だが伯は承知しなかつた。伯が何故に承知しなかつたかは今日に至るも猶釋明し得る人がない、或ものは露國が第二流の外交官ムラヴィヨフを選定したので梅園伯は相手嫌ひをしたのだと言ふ。或ものは聰明なる伯は早くも今度の談判が國民を満足せしむるほどには行かぬ事を洞見したのだと言ふ。又或ものは伯が今まで親露派の首領であつたから何かに付けて反對

黨から疑はれるのを恐れたのだと言ふ。其れは何れであるかは明らかでないが、此の談判が貧乏圖である事は少しく海外の事情に通ずる人が何人も認める處である。

當時の日本對諸外國の形勢はどうかと言ふに表面上佛蘭西は露國の同盟國で、英國は日本の同盟國である、さうして獨逸は局外者の様な顔をして露國を助けて居たのも事實である。恚ういふ風に日本の忠實なる友は唯英國だけである、だが英國は果して其の忠實を何の程度まで續け得るか。

日本が餘りに強かつた、豫想外に強かつた事が却つて英國の嫉妬を招いた事は明らかである、大人が子供を庇ふ様に庇つて居たものが俄然として子供の力量が大人以上であると心付いた時に、將來東邦に於て英國と覇を争ふものは日本であると思はざるを得まい。

勝つたものが憎まれる、此の心理を考へると此の媾和談判に由々しき障礙がある事を豫期しなければならぬ。

一面に日本の状態を考へると熱し易くして醒め易い國民の感情は最早戦に倦んで居る。元老の中、閣員の中にも媾和を熱望する者が續出した。世間では山縣、大山、兒玉の三將が軟説の主唱者の様に言ふが、實際當時の兵力を知悉して居るなら軟説を唱へざるを得ないのであつた。

露國のリネウキツチは百三十萬の大兵を擁してハルピンに控へて居る。日本は豫備後備を盡くして奉天にあるもの僅かに七十萬、其れ以外には一兵もないのである。軍資はどうかといふに、一日

二百萬圓はどうしても要る。募集した軍資二十億は既に費ひ盡くした、此の二十億でさへ、其の中十四億五千萬圓は英米二ヶ國で募集したものだ。此の上何れの地に金穴を掘らうぞ。日本は今兵力の上に、軍資の上に一大弱點を暴露せんとする危機にある、ボロが出ぬ間に媾和をするのが最上の策である。

だが此の悲しむべき弱みを胸に懐きながら遠く米國に於て敵と四つに組み合はうといふ、全權公使の苦衷を誰か知る。

若し列國の干渉が來たらばどうしよう、我に對應の力なくして徒らに虚勢を張るは各國の同情を失ふばかりである。而も餘りに成功すれば英國に嫉まれる、不成功に終れば國民に憎まれる。

元勳！ 大政治家！ 賢き人達は巖壁の下を避けて澄まして居る、だが澄まして居られないのは外務大臣である、逃げるに逃げられないのは一片愛國の至情である。小村男爵は敢然として起つた。心ある人々は梅園伯の卑怯を憎んだ、さうして小村男の孤忠に感謝した。彼等は銘々無言の儘恐しく緊張した顔をして立つて居た、すると其處に島山伯の白い髭が見えた。人々は伯爵を圍んだ。

「尊き犠牲ぢや、これこそ本當の犠牲ぢや」

と伯爵は言つた。人々は皆「然り」と言ふ様な顔をした。

「あの身體でやりきれぬだらうか」と難波子爵が言つた。

「身體が行くのぢやない、精神が行くのぢや」

と伯爵が言つた。聲が高かつたので諸方からいやが上にも人が集まつた。

小柴敬三が自轉車を喫茶店に托して待合室へ入らうとしたが中々入りきれなかつた、そこで彼は男爵の來るのを待つ事にした。上流社會が沈鬱な顔をして居るのと反對に、一般市民は熱狂的に喜んで居た、彼等は停車場前の廣場に奔々と集まつて居た。巡查が來て馬車が通るだけの路を開く様に制したが直ぐ崩れてしまつた、大國旗を交叉した柱に登つた男が三人ほどあつた、其れは巡查に叱られて降りた、と又た登る、又降る、其の度毎に群集は喝采した。

「來た〜〜」

一人が言ふと皆が新橋の方を見る。此の悪戯が幾度も續いた。其の中に立派な馬車が二臺來た。先なるは恐しく肥つた老紳士でいかにも傲然として居た。後なるは瘦せた小柄のフロツクコート姿で無難作な髭が口の兩端に垂れて居る。

「小村男爵萬歳！」と一人が叫んだ。群集は悉く肥大の紳士を目蒐けて帽子を高く振つた。

「バンザイ」

すると後の方の瘦せた垂れ髭の紳士が立つて帽子を脱ぎいかにも慇懃に群集に向つて答禮した。「後の方だ〜」と人々が叫んだ。萬歳の聲が再び潮の如く起つた。